

---

# ナキモノ

nylon;

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ナキモノ

### 【Nコード】

N9390M

### 【作者名】

nylon;

### 【あらすじ】

卵蔓庵というがらくたばかりを置いた不思議な店の主人那葵を中心に様々な人物が己の価値観を変えていく。

人の数だけ世界があり、その世界が交わる事でまた別の世界が生まれる。

那葵の言う仲介屋とは何なのか・・・その答えに行き着いた時選ぶ道は

現実と非現実。有と無。絶望とフェティズムによる逆転する理想世

界。

無

冷たかった異質の物体が、初めて体の一部になって、もう随分経った。

受け入れる事に躊躇はなかった。全てを跳ね返す銀色の光沢は酷く魅力的で、それに抗う事等出来る筈もなかったのだ。

どこか懐かしくもあり、未知でもあり、正しく自分自身の求めているものだとも意識のうちに自覚した。

万物の真実が垣間見えた。

だから自ら選んで欲した。

インプラントされていくその痛みにはさえ酔った。確実に身体へ埋め込まれて行くのを痛みによって感じ、安堵したのだ。埋め込まれた部分から、徐々に自分と同一化されて行く。妙に透明感を持った赤黒い血液に侵食されても尚、輝きを失わずに自分自身になった。

全てが綺麗に埋め込まれ、すっかり定着してしまうと、それは左胸の上で温もりを持つ。波打つ脈動すらも自分の物にし、まるで始めから身体の一部であったかのような錯覚を起こさせる。

肌の上からその金属版の微かな出っ張りをなぞるとそれだけで救われる心地がした。

何に救われたかったのか

救い等を求めているつもりはなかった。それはある意味救いではあったのかも知れぬが、希望が無い救いだっただのである。明確な絶望が欲しかった。

異物を取り込んだ時、やっと望んでいたものを手に入れられた事を実感した。

絶望を埋め込まれて、絶望を知り、絶望に安堵したのだ。安楽の場所が確かにあると知った。

自分自身を異質へと変えて、永遠の苦しみを得る。苦しみは安らぎだ。

それはただ表面上だけの錯覚なのかも知れぬ、と分かっていた。だがそれでも良かったのだ。何も変わらないよりはよっぽどいい。あのままでは生きている状態も死んでいる状態も変わりがなかったのだ。いつそ全てなかったことにして消されてしまった方が良かった。

例え死んだとしても、存在した事実は曲げようもなかったし、死んでも骸は残り、存在を無意味に主張するからだ。

それが無性に嫌だった。だから生きることが嫌でも死ぬことは出来なかった。そして異形に憧れた。

異形　つまり人外である。

人間の関知しない世界の住人になりたかった。勿論そんな世界を信じていたわけではなかったがそれでもどこか望む気持ちが確かにあった。

そしてその気持ちが正に勝利したかの如く、人外への道を見つけたのだ。それが世間一般にとっての在るべき人外の姿かどうかは知らぬ。だがそんな価値観などどうでもいいのだ。要は自分自身にとってそれがそうであるのかどうかが重要な因子となる。

無数に埋め込まれた硬い温もり。そして悪戯のように散りばめられた消えない傷跡。全てが愛おしく、失われていた自分自身がそれから一つ一つによって甦って行くようだった。

そして幾つ目かの異物、幾つ目かの傷を受け入れた時にやっと人では無い者になる資格を得たのだと分かった。欠けていたピースは後一つで全て揃う。

最後のピースは理解と共に訪れた。

それは万物の真実そのものだった。

主に会ったのだ。

一目で惹かれた。主の姿を見ただけで、そうとは気付かずに散り散りになっていた世界が一瞬のうちに集積していく。

主は完璧だった。陳腐な言葉で言えばそれは正しく　神。果てる時まで永遠に仕えなければならぬ絶対的な存在。何故この存在

を今まで知らなかったのか不思議に思う。否、知らなかったのではなく忘れていたのだ。

そしてその存在を忘れ去っている間も無意識に仕えていた。愚かしくも人間と言う狭い檻の中に迷い込んでしまっても尚、主の意図は全て届いていたのだ。

主の傍らには一人、恭しい様子で控えている者がいる。それは闇の中から無限にも広がると思われる重厚な声で語りかけてきた。

「改めて紹介させて頂きます。私は名も無き主の僕。しかし僕は私だけでは御座いません故、便宜上この姿の間はレヴィと名乗っております。そしてこちらは我が主。主には名前等必要ありません。主と言うものはこのお方以外に御座いませんし、本来ならば主、という表現も必要等ないのです」

この声は幾度も自分に施術を施してきた男のものだ。姿も違えば声も違う。ただどすぐに理解した。これが本質なのだ。

「貴方様ももう十分こちら側の住人としての資格を得たようで御座いますし、主からのたっのご希望でも御座いましたので本日ご紹介させて頂く事に相成りました。本日は誠に良い闇が満ちておりますからね」

にんまりと笑みを湛える姿は不気味だった。

牙が覗く赤黒い唇に黄土色の肌、ゴルゴンのメドウサを思わせるうねうねとした蛇のような髪の毛、爬虫類のような黄色の光を帯びた眼は右目だけで、左目はぴったりと縫い合わされている。細長い身体には鈍い銀色の角が背中から肋骨のように張り出ているし、ぶよぶよとした鶏冠のような物が腰の辺りから垂れ下がっていて、手は鍵爪のようで丸ごと頭蓋を包んでしまえる程大きい。その姿は正に異形と言って良いだろう。

だが、その姿はとても懐かしいものだと思った。姿とは裏腹にきつちりとした詰襟の礼服を纏っているのも、芝居がかった慇懃な態度も、全てが心地良く感じられた。

レヴィは最後に大仰な身振りで身体を折ると、滑るように奥に引

き、殆ど闇に埋もれてしまった。主の輪郭が一層際立つ。

主はゆっくりと微笑んだ。

「はじめまして」

響いた声音は透明だった。透明故に圧倒的な支配力を備えていた。それは、身体に埋め込まれた金属を震わせてそのまま体内に溶けて行く。

そしてその姿はレヴィとは全く異なる異形だ。銀系の髪に銀色の瞳、殆ど白と言っても差し支えない程の肌の色。主は余りにも美しかった。

そしてそれ故に人ならざる者なのだ。

幾ら優れた詩人でも到底その姿を的確に言い表すこと等出来ないだろう。どんなに腕の良い人形師であろうともこの美しさを再現することは不可能だと思われた。それどころか全く違う形であっても、主に匹敵する美等造り出せはしないし、存在すらしないだろう。

主は全人類にとって共通の美だった。そして全ての者に同じ感覚を抱かせるのだ。

つまりは存在を疑われるもの。

異形である。

美しい異形はただ微笑んでいる。何を求める訳でもなく、ただ微笑んでいる。

この異形は紛れもなく己の主であった。

空は苦々しい程の晴天だった。

今年の夏は猛暑であつたが意外に暑さは長引くこともなく、九月も半ばになると途端に肌寒さを齎した。だから晴天と言つてもそれ程日差しがきつい訳でもないし、世間で言ふ所の気持ちの良い秋晴れという感じの空模様である。

だが今の長坂義文ながさかよしふみには苦々しい以外の何物でもない。元々日差しには弱い性質だったし、今の心中を天氣に準えるなら曇天であるからだ。氣紛れにぼつぽつと小雨を落とすようなすつきりしない曇天である。これが大雨だったとしたら実際の天氣を氣に掛ける余裕は無かつただろうが、曖昧な曇天故にどうにもその落差が氣に障つた。こつ感じてしまうのは自分自身の精神状態に起因しているというのに、何もかもこの晴天に原因があるような氣がしてしまふ。八つ当たりだ。自分でもそう分かつているが、かといってこの胸のむかつきが消える訳でもない。

何故こんなにささくれ立つた心境に陥っているかという理由は明確である。今日職を失つたからだ。いや、正確に言えば自分自身の意思で辞職することを決めたのだが、その辞職の理由を引きずっているという訳である。

辞めるという強硬手段まで取つたのだから、理由などこの際過ぎ去つたこととして割り切れれば良いと頭では分かっている。だが、そう簡単に気持ち切り替わるかと言つたらそういう訳にはいかない。生憎楽天主義者でもないし、どちらかと言えば過ぎ去つたことで思い悩んでしまふ性質なのである。

こればかりはどうしようもない。

昔からの癖なのである。それを良い方向に活かせば良いと思うのだが、今までこの癖のお陰で良い方向に事が運んだ試しはなく、義文にとっては悪癖以外の何物でもない。



辞めてきた仕事は元々肌に合わなかった。毎日単調な作業をこなすだけの役所の事務勤め。何の刺激もなければ仕事に対する意義も持つことが出来なかった。

仕事とはそういうものなのだとされてしまえばそれまでなのかも知れないが、それで納得出来ない自分が確かに存在しているのに、目を瞑ることは出来なかった。

就職難と言われるこの時代に、安定した職を持てるだけでも恵まれていると言えるかもしれない。だがそれは他者と比較した場合の話である。社会生活を営むに当ってその比較は重要だったとしても、そんな比較をして満足する人生に何の意味があるのだろうか。

今回辞める直接の原因となったのは些細なことである。上司が気に食わなかったからだ。

勿論気に食わないと言っても仕事をする上では苦手な種類の人間とも折り合いをつけて接しなければならなし、単に人の好き嫌いで辞めた訳ではない。謂れない文句を付けられたことが気に食わなかった。

上司側が予め伝えておかねばならない事項を伝え忘れていたという否があつたにも拘らず、その責任を押し付けられ、拳句その上司は義文を責めたのだ。

義文は通常通り業務をこなしていただけだし、客観的に見ても全く否はないだろう。理不尽な振る舞いに眉を顰める同僚も決して少なくはなかった。

過去にも似たようなことが何度かあつたが、いつものように納得出来ないながらも何とかやり過ごすという事がこの時はどうしても出来なかった。今までの我慢が積もりに積もり、許容量を超えて一気に溢れ出てしまったからなのかもしれない。結局そのままの勢いで辞職を申し出たと言う訳だった。

辞めた事を全く後悔していないと言えば嘘になる。やはり自立して生活していかねばならない立場だし、金銭面の心配もある。だが、それよりもまず辞めた事が逃げた事のような気がして悔しい

のだ。

義文は周りに思われている以上に責任感が強い。課せられた義務はこなさないと気が済まない性質なのだ。例えばそれが辛い事であろうとも、一度その枠に入ってしまったえば筋は通す。でなければそれに異議を唱えることも出来ないし、明確な主張も出来ないと思っているからだ。

しかし、それはあくまで理性的な考え方であり、感情を制御できない場合もある。つまり今回はその感情を制御出来なかったことになり、それへの自己嫌悪に襲われているのだった。

この春就職したばかりだったから義文が突然辞めたとしても大した痛手にはならないはずだが、それでも迷惑は掛かるだろうし非常識でもある。

せめて一ヶ月後に辞職するとかにすれば良かったのかもしれない。後からそんなことを何度か考えたが、感情的になっている時はそこまで頭が回るはずも無かった。

自然と深い溜息が零れ落ちる。

だが、今更幾ら考えても仕方がない。もう過ぎたこと 早く気持ちを切り替えて新しい仕事を探さなければならなだろう。

まだ一向に気分は晴れなかったが、それでも街中をぶらぶら歩いていると幾分頭の中の整理は付いていた。相変らず晴天の空模様に腹を立てながらも、周りの景色を見る余裕も生まれている。

広くなつた視界で見る景色には古めかしい商店や家々が並んでいた。見慣れぬ道だ。

裏路地の細い道では車の通りも人通りも殆どない。無意識にこの道を選んで歩いていたのが納得出来る。人目を気にする必要もなく幾分気楽な気持ちで歩くことが出来るからだ。

ちよつと角を曲がって真っ直ぐ行けば毎日のように通っていた大通りがあり会社もあるが、元々出歩くのが余り好きではない義文は近くにこんな通りがあることを今まで知らなかった。距離としては僅かな差だと思っのだが、雰囲気はまるで別の国、時代ではないか

というくらいがらりと変わっている。

むくむくと湧き出る好奇心のまま、連なる店先に視線を投じる。何を扱っているのか義文には良く分からない店ばかりだった。古びた本が沢山積みまれているのを見て古本屋と分かったくらいで、他は雑貨だか骨董品だかを扱っているような、明確な名称を付け難い店等がばつばつと並んでいるのである。また、客らしき姿は殆ど見当たらず、客は居なくても店主は必ず居るはずなのだが人の気配と言うもの自体が希薄だ。寂れていると言うのが良く合った通りである。ここが都心であるというのが一瞬何かの間違いなのではないかと思ってしまう程だ。

義文はこんな雰囲気を感じられる場所というのを実際に体験したのは始めてだったが、良いものだなと思った。眺めて歩いているとそれなりに楽しかったし、なんだか昔にタイムスリップしたような気分になる。新鮮でどこか懐かしいような不思議な感覚になった。

初めは何となく眺めているつもりだったのだが、いつの間にか随分熱中して見ていた様である。ついさっきまで胸の内を支配していたもやもやした気持ちも雲散霧消していた。それに気付くと可笑しくなっていて知らず微笑が漏れる。

こんな風に笑ったのは初めてだった。

僅かに軽くなった足取りで暫くそうして歩いて行くと『らんつるあん卵蔓庵』と掲げられた店があった。随分立派な古めかしい木目の浮いた看板である。

店自体も看板同様随分古いようだ。くすんだ色合いの木造建築は重厚な迫力を醸し出している様にも思えたが、全体的に小ぶりであるし、何故か飄々とした印象の方が強い。建物が飄々としていていると言うのは可笑しい表現だと思ったが、事実その言葉が一番しっくり来る気がした。

同じように古い店は他にも並んでいたが、義文は妙にこの店が気になった。開店の札が掛かっているにも関わらず中の様子が伺えないし、店の正体が全く分からなかったからだ。それ故に飄々とし印

象を持ったというのもあるのかもしれない。

ここまで見てきた店にも何の店なのか一見分からない場合があったが、何かしら扱う物の名前が書いてあり、無くとも外から見える位置に品物が並んでいた。そういう配慮がこの店には一切無いのである。

屋号を掲げているのだし、開店の札も掛かっている、紛れもなく店であることに疑う余地はないと思われたが、全く商売をする気がないと思われる程に自己主張がなかった。閑古鳥が鳴いてもおかしくない程人通りもない場所での商売だと言うのにこれでは誰も客など来ないのではないかと思う。

でも、だからこそ気になってこの店に入る客も居るのだろうか、そう思いながら義文自身も気になって恐る恐る店のドアに手を掛けている。

扉は微かに軋んただけですんなりと開いた。幾らなんでも鍵まで掛け忘れて店を放っておくことはないだろうし、誤って開店の札を掲げていた訳ではないと思うが、中は驚く程に薄暗い。

それとも何かのつぴきならない事情があつて店を放り出したのかまさか、とは思うが実際のところそう思つた方が今の状況にはぴつたり当てはまるような気もした。人影すら見えない。

だが兎に角事情は分からないが店が開いていると言うことは事実だ。もし何かの間違いでも、言い訳は充分立つ。少しだけ見てみようと思ひ店の中に足を踏み入れた。別に疚しい気持ちは無かつたが、気持ち音を立てないように注意を払つてしまふのは仕方ないだろう。さて、入ってみると店の中は実に可笑しな配置だった。天井まである棚が入り口だけを除いて四面にびっしり置かれており、壁際に沿つてぐるりと品物が並べられているのだ。

何か呪いにも使うような人形、瓶やら箱、中に何が入っているのかは良く分からないが、実験で使うような無機質な感じの物から色取り取りの原色で彩られた物まで様々である。下のほうにはやけに大きい壺だとか置物だとかも並べられており、雑然とした印象で

ある。

床面積は割りと言つのに何故壁際にだけ品物が押しやられて並べられているのか　天井には棚にある物と似たり寄つたりの品が無作為に下げられたりしているものの、中央はやけに伽藍としていて何ともバランスが悪く、またその配置によつて奇妙な雰囲気はますます高められている。

一通り店の様子を入り口で眺めてから、開けっ放しになっていたドアを閉めた。僅かに自然光で見えていた世界が急速に薄暗い世界へ馴染んで行く。それでもぼんやりとした橙色の照明が点つていおり、慣れてしまえば視覚的に不便さは感じない。

仄かな明かりの中、今度は間近で品々を眺めていく。だが、説明書きも何もない品々の中で義文に分かつたのは何かで見たドリームキャッチャーという悪夢を避けると言われるお守りくらいの物だった。確かアメリカンインディアンに伝わる物だったか　と言つことは民芸品等を扱う店なのかもしれない。そう考えるとどこか不気味な様相を呈していた周りの品にも幾分親近感が沸いた。

品物の数は多いがただ眺めるだけなら全て見るにもそれ程時間はかからない。それでも十分程度は経つていたのではないだろうか。その間聞こえてきたのは自分の足音だけで、物音一つしなかった。やはり誰も居ないのだろうか、そう思うと何故かとても残念な気持ちになった。そして根拠なく何処かに居るのではないかという気もした。

だが、元々人が居るようには見えなかったのだし、壁際に品物が並べられているのだからこの店の中に人が居たらすぐに分かるはずである。もしこの店の中に居るのだとしたら、それこそ品物の中に埋まっていなければ見当たらないと言つことはない。

そこまで考えて会計する場所も見当たらない事に初めて気付き、益々疑問は膨らんだ。これでは客が困るのではないだろうか。

勿論義文は買い物をしたくてこの店に入ったわけではないのだし、余計な心配と言われればそれまでなのだが、誰だつてそう思うだろ

う。

そして無性にこの店のことが知りたくなってきた。若しかしたらそのうちひよっこり店主が現れるかも知れない。こんな店を経営している人物とは一体如何なる御仁なのか。そんな期待を胸に暫く待ってみようと決意した。どうせ帰っても直ぐに仕事探しなど出来るわけもないのだ。

ただ、義文は民芸品には興味もない。一度眺めればもう満足である。一旦待つとは決めたものの床に座り込む訳にも行かぬし、暇を潰せる様な物も持ち合わせていない。さて、如何した物かと思つたが元より普通店の中では品物を見ているより他はないとも思い直し、一つ一つなるべく時間を掛けて見ていく。

初めは義務的にやっていたのだが、何時の間にか夢中になって見ていたらしい。ざっと見た時には分からなかった部分まで見えてきて面白いと感じるようになっていたのだ。

それらは実に凝つた造りの物ばかりで、同じように見える物でも僅かに個体差があり、大衆向けに作られた大量生産の模造品でないことが分かった。もしそうだとしても中々に年代を感じさせる品も多く、その中に固有の歴史が詰まっている気がする。

そんな風にしてコレクターの心理をも理解し始めた頃、不意に床の下からそれを叩く音と振動が伝わってきた。余りにも唐突だったため危うく手に持っていた小瓶を取り落としそうになる。中には薄黄色と思われる色合いの液体が入っていて、落としてしまったら確実に割れ、中身は回収不可能な状態になってしまうだろう。もしかしたら何か危ない薬品の類では、との考えが頭を過ぎり、正に心臓が口から飛び出してしまうばかりに慌てた。

幸い小瓶は手から滑る落ちることもなく、義文の手から棚に戻されたのだが、一体床下からの音の正体は何なのだろうと、次は違う意味で肝を冷やした。

床を暫くじつと凝視してみたが同じ事は起こらなかったし別段変わったところもない。暗いせいか殆ど黒に見える床は相当古い板が

はめ込まれているらしく歩く度に軋んだ音を立てたが、幾ら古くても人が叩いたような物音を立てる床など聞いたことがなかった。

義文はその場にしゃがみこみ、更に床を観察してみる。すると一部分はめ込まれたようになっていいる事に気付いた。埋め込み式の取手まで付いている。

つまりは床下に倉庫か何かがあるということだ。

丁度義文はその上に立っていたらしく、若しかしたら中に店主が居て、開ける事が出来ずに居たのではないかと思に至った。そうでなければあの音は説明が付かない。

義文は店に入ってからどれくらい経ったのか良く分からなかったが、結構な時間品物を見ていた気がする。その間全く下から物音がしなかったし、まさか床下に誰か居るなどと想像だにしていなかったから若干訝しんだが、自分が蓋をしていたのだという責任も感じ、取手を引つ張り出してそつと開けてみた。

それは意外に重く、厚さは五センチ程もある。びつちり嵌ったそれを漸く開き切ると慎重に中を覗いて見た。そこはほんのりと明るかったが、店の中より暗い。更に予想よりも深いようで成人男性が真つ直ぐに立てるくらいの深さはあるものと思われた。梯子も掛けられているし、やはりこの中に人が居るのだ。

降りてみるか否か、暫く逡巡していると奥の方からひよっこりとした人が現れた。物音も立てずに現れたので一寸吃驚したが、漸く店の人に出会えたという喜びにすぐさまとつて変わる。

「えつと、お客さん？滅多にお客なんて来ないから吃驚しちゃったよ」

店主と思われるその人物は想像を裏切つて随分若かった。まだ二十代であることは間違いないだろう。それに随分と綺麗な顔立ちをしている。

真つ黒な髪に真つ黒な髪の毛。目鼻立ちのはっきりしているが西洋人のように特別彫が深いわけでもないし、流暢な日本語を話しているから日本人のはずだ。だがどこか日本人離れしている風貌だと

も思った。だからと言って他のアジア圏の人種のようなかと問われればそういう訳でもない。

これが国籍を超えた美貌と言うのだろうか、そんな事をぼんやりと考えてしまう。

「あの、この店の店主の方ですか？」

「うん、そうだよ」

若しかしたら従業員か何かなのかも知れぬと思い確認してみたが、店主で間違いないようだ。確かにこのような小さな店で従業員を雇う余裕等はないだろうし、滅多に客も来ないのであつたらその必要もないだろうが、義文は勝手に偏屈な変わり者の老人を想像していたのだ。真っ白な髭をもじやもじやと生やしてトルコ帽でも被っていたら正にこの店の店主にぴったりである。

それが実際は真逆と言つてもいい印象の店主だった訳なのだ。その言葉に、期待を裏切られた、拍子抜けした、と思うのは自然かも知れぬが何故か戸惑った。

「あの開店の札が掛かっていたのでお邪魔したのですが　あの・  
・ここは何の店なのですか？」

黙っているのも決まりが悪く、咄嗟に思い付いたことを口に出したのだが、店主は相変らず穴倉の中から義文を見上げている格好だし、義文は義文でそれを見下ろしながら尋ねており、なんだか間抜けな図である。尋ねてから、本当は何故床下に居たのかという事に關して、まず聞くべきだったのではないかと思ひ、一人で狼狽した。最も今の質問だつて氣になつていたことではあるのだし、順番を誤つただけなのではあるが。

「ああ、まあ趣味でやっているような店で、言うなれば僕の宝箱みたいな店かな」

義文の不自然な様子も、特に店主には氣にならなかつたらしい。子供のような笑顔で答えてくれる。それを見て若干義文も落ち着きを取り戻した。

そして宝箱と言われるとそんな感じだと納得する。



義文には、これら民芸品のような物が、特定の地域から集められたのではなく、様々な地域から、様々な文化を集積した品物のように見えたからだ。つまりそれを集める基準は店主の趣味であり、特定のジャンル分け出来る物では無く、民芸品には見えたがそれである必要も無く、店主の気に入れば何でも良かったのだらう。

「はあ　でもあそこに並んでいるのは売り物ですよ？宝物を売ってしまってもいいのですか？」

扱っている物は理解したが、店が宝箱なれば品物は宝、ということになる。それは単なる比喻であつたのかも知れないが、自らの宝を売ってしまうというのはなんだか変な気がした。

「いや、あれは売り物ではないよ。値段とかも書いてないでしょ？だからあれは売り物じゃない。店の装飾品だね」

「えっ？では何を売っているのですか？」

店の雰囲気自体店らしくなく、確かに値段もなかったが唯一商品と思しき品は壁一面に並んでいる民芸品らしき物だけである。あれが商品ではないとすれば一体何を扱っているのか、義文には全く訳が分からなかった。

「売っている物は無いよ。けど一応商売はしていると言えばしている。扱っているのが目に見える物ではなくて目に見えない物、つてことかな。だから売っているとされると語弊がある気がするなあ。言葉にすれば情報　いや、仲介屋つてところなのかな」

まあどつちでもいいのだけど、と最後は如何にも適当な結びだった。面倒になったのかもしれない。

「仲介屋ですか　私が余り物を知らないだけなのでしょうが、仲介すると言えば不動産屋くらいしか思い浮かばないです。かと言ってここはそういう訳でもないでしょうし」

好奇心と遠慮が混ざって義文の問いはなんとも齒切れの悪いものになった。若しかしたら気軽に立ち入って良い店ではなかったのかも知れないと思つたのだ。

「まあ多少複雑なだけで不動産屋とそう大差はないさ。それより君

！今暇だつたら一寸下に下りてきて手伝つてくれないか？どうにも一人じゃ大変でねえ」

突然の依頼に義文は一瞬氣圧され、阿呆のようにはい？と聞き返した。

義文は興味本位で店を覗いただけではあるが一応訪問者という意味では客である。客に仕事を手伝えという店等聞いた事が無い。親しい間柄等では在り得ないことでもないだろうが、ほんのさっき知り合つたばかりだ。この反応も当然だろう。

「はい？じゃなくてはいい、か、いいえ、で答えてよ。ああ、上だつたら心配しなくて良いよ。どうせ誰も来ないだろうし、来たとしてもすぐに出て行くから」

店主の中ではほぼ九割方義文は手伝い要員として決定されてしまつたらしい。店の心配など全くしていなかつたのだが、この場合ただ義文は流されるしかないような氣がしてはあ、とだけ答えた。

元々義文にはすること等無かつたわけだが、それでも普通なら断つてゐるだろう。こういう傍若無人　唯我独尊とでも言うのだろうが、この手の人物は苦手なはずだつた。道理に適つていないというかそんな氣がして出来るなら係わり合いにないたくないタイプなのである。

だがこの青年に関してはそういう態度が似つかわしい氣がして、流されるのも仕方がないと思つてしまつたのだ。

「それははい、つてことなのかい？どうもはつきりしないけど…まあいいか。そう言えば名前は？僕は那葵<sup>なき</sup>」

『ナキ』とは義文には聞き慣れない名でどう書くのかも良く分からなかつたし、苗字なのか名前なのかすらはつきりしなかつた。

「私は長坂義文という者です。会社は先程辞めたのでもう関係なくなつてしまつたのですが」

義文は一寸迷つてから名刺も差し出し自己紹介する。名刺を出したことで遠まわしに相手の名前に關してもう少し情報が欲しいと主張したつもりだつた。今は最早關係の無くなつた会社名等も入つて

いるが、残った名刺は処分するだけで、正式な挨拶でもないのだし別に構わないだろうと思った。

「義文ね。兎に角愚図愚図しないで早く降りてきて」

那葵は特に自分の名前を説明することもしなければ、名刺とか会社を辞めたとか、そういう事もどうでも良いらしい。名刺にはちらりと一瞥をくれただけで受け取ろうとはしなかった。義文が一寸迷っている間、待っているのに痺れを切らしてしまったのかもしれない。

義文はその様子を見ても別段落ち込むことも無く、寧ろやっぱり、思ったくらいで急かされるまま、若干戸惑いはあったものの闇の中へ降りて行く。

なんとなくこういう態度を取られることが分かっていた。

義文は既に大分前から会社を辞めた理由など如何でも良くなっていた。そして那葵と出会っていいよ本当に如何でも良くなった。出会って数分であり、意識こそしていなかったが改めて考えるとそんな気がした。

だが、本の僅かに残る蟠りわだかまはあり、それを完全に吹き飛ばすためわざわざ名刺も差し出したのだろう。この名刺を使うのも今日で最後だと会社を辞めた事実を再度認識する為、そして会社を辞めたという事実を第三者に知らせることがきつと必要だった。

更にその第三者是那葵のような人物であるということが重要だったのではないかと思う。ただ、那葵のような人物とは？と問われても上手く答えることは出来ないだろう。

己の卑小さを知り妄執を落とす。

これは簡単な様で難しい。少なくとも義文にとってはそうであった。

だが、那葵という人物を得てそれはいとも簡単に叶ってしまった。一種の思い込みなのかも知れないが、那葵にはそれが出来ると無意識に感じ取ってしまったのではないだろうか。

那葵はそれだけの存在感、揺ぎ無い個という物を持っている気が

した。

義文は別段人を見る目が優れている訳ではないし、こんな風に思  
い込むこと等今まで無かったが、那葵はどうやら例外なのかもしれ  
ない。

奈落へ降りるまでの数秒ですっかり義文の迷いは吹っ切れていた  
のである。

本庄百合恵は所謂引<sup>いわゆる</sup>つ込み思案な性格である。

特に幼い頃の人見知りは酷いものだった。二十歳になった今でも人見知りはあるものの、何故あれ程に人見知りしたものか不思議に思う程だ。

過去の人見知りと今の人見知りとはその理由も違う気がして益々不思議に思うのかもしれない。

最早幼い頃の記憶など臆<sup>おそ</sup>げで、実際にどのように考えていたのかも推測でしかないが、当時の自分には初めて会う人間が人間と認識されず、怖<sup>こわ</sup>かったが故の人見知りだったように思うのだ。自分とその周りのほんの僅かな人達しか同じ人間とは認識されていなかったのだろう。つまり初対面の相手は宇宙人や何かと同じだった、という訳である。

だが、色々な人と出会う機会が多くなり、人間というカテゴリーの意味を理解していくに従い、代わって今度は自分と他者という線引きが出来る。人間の価値観の多様性を知ったのだ。

これはそのまま今の人見知りの原因であり、価値観はある程度経験によって予測することが出来ても全く同じという事がないからである。

百合恵はどちらかと言うと人の感情の機微に鈍感な方で、表情や仕草等では中々読み取る事が出来ない。そして鈍感な癖にそういうことを気にしてしまう性質なのである。言ってしまうえば気を遣うタイプという奴だ。

そして初めて会う人間に対してはなんら免疫もないから戸惑<sup>戸惑</sup>ってしまう。如何接したら良いのか　と。

如何してここまで気を遣ってしまうのか　理由は大体解<sup>と</sup>っている。だが、それを直すことは出来なかった。別段社会生活において不都合が発生する、と言ったレベルの問題でも無いから矯正する必

要性も無いのである。

偶に小さなきっかけが元でそれを深刻に悩む事もあったが、大体は一時的なもので、これが自分なのだから仕方が無い　と諦めてしまふのが常であった。

それに、気を遣ってしまふ理由の中には譲れない部分も含まれている。

まず、保身の為だ。ただこれだけと言うと語弊を招くことになる。勿論自分の身の可愛さというのもあるのだろう。自分が傷つくのが怖いから、自分を悪く思われたくないから、と言う意識が含まれているのは自覚しており、否定はしない。こういう部分は自分でも嫌いで直したいと思っている。

だが、或いはそれに含まれてしまいそうではあるのだが、百合絵が明確に分けて考えている理由が存在している。

それは円滑な人間関係を築きたいという理由だ。言葉にしてしまうと益々紛うこと無き保身の為ではないか、という感じがするがそうではない。要はそれが自分を中心としての人間関係ではなくて、百合絵の周りを一つとした人間関係を指しているという所が重要なのだ。百合絵はその人間関係を円滑にするが為の潤滑油のような役割を演じなければならぬと思っていたのである。

百合絵は諍いが起きるのを好まなかった。人同士が対立するのも嫌だった。偏見、差別等が生じることも酷く悲しいと思う事だった。つまりこういう事態を極力避けたかったのである。自分の為でもあるが、結果的に皆が良い方向にいけるのだと信じているのだ。

かと言って百合絵自身も感情はあるから、如何しても人間的に許せない部分はあるし、偏見も無いと言ったら嘘になる。だけどそれは百合絵の中で自分自身の嫌いな部分でもあり、そういうのを取り払う努力はしてきたつもりだった。相手を理解しようと努めてきた。そして何時の間にか大抵のことではそういう価値観もあると理解し、積極的ではないにしろ気に入らない事柄でも或いは仕方が無いのだと思うようになっていた。

これが良いのか悪いのか、はつきり言って百合絵には解らない。その為にきつと百合絵と言う個が埋没してしまった印象も抱いていたからだ。

明瞭な意見というものを持てなくなっていた。こう考えればこう思うし、ああ考えればああ思う　という具合なのである。

勿論似たような事は誰にでもあることだと思う。

例えば靴一つ買おうと思っても、デザインで言えばこちら、履き易さで言えばあちら、というような場合だ。だがこういう場合、別にどちらを選んだとしても結局は自分自身にしか影響が出ない。

百合絵が判断出来ないのは、その判断に置いて少なからず他人に影響が及んでしまう場合の事だ。それが例え大多数の中の一意としてしか見られない場合だとしても同じだった。全く余計な物を取り払って自分の本心を探ってみても答えは出てきてくれなかった。

だから当たり障りの無い答えを出すか、それが出来ぬ場合、どちらかを籤引きで決定するような選択を取る事になる。様々な価値観を許容し過ぎたせいなのかもしれない。

最も全部が全部と言うことではなく、自分自身の考えというものが無い訳ではなかったのだが、それは物凄く狭い範囲であるように思われるのだ。悪く言ってしまうえばそれ以外は如何でも良い事、となってしまうのかもしれない。百合絵は時偶、自分では気付かないもののこれが自分の本質なのだろうかと考えることもあった。だが、やっぱりそれだけで説明がつくとは思えない。

百合絵が何故このような性質になってしまったのかというと、勿論生まれ持った本質と言うものもないわけではないだろうが、その家庭環境に置いて、という所が大きい気がしていた。

かといって百合絵の家庭は別段変わったところも無く、極々平凡な範疇から脱している訳でもないだろう。生活水準も至って標準的だったと思うし、別段家族仲が悪かった訳でもない。

ただ　何となくきこちなかった。

家族構成は共働きの両親に百合絵、そして四つ下の妹と五歳離れ

た弟という五人家族。

誕生日やクリスマス、お正月にお盆等、そういった行事は家族皆揃っていたし、両親が共働きということで回数こそ少なかったかもしれないが、家族で遠出した思い出も残っている。

友達の中には鍵っ子等も珍しくなかったし、両親の離婚で片親の子も居たし、実際にその子達がどう感じていたかは別にして、世間一般がそういう家庭環境で育った子供を指して評価したところの、愛情に恵まれずに育った という訳ではない。

実の子供を虐待するといった話がさして珍しくも感じられなくなってきた世の中である。そういう見方をすれば自分は恵まれていたのだらう。寧ろとても愛されて育ったと思う。

祖父母にとっては初孫に当たっていたし、両親にとっては第一子つまりはそれだけ生まれた時の可愛がられようと言ったら半端なものではなかったようだ。末っ子は甘やかされて育つ等と言うが、長子に対しての思い入れもかなり強いのではないかと思う。勿論妹、弟も同じように愛されて育った事に変わりは無いのだが、初めて孫子供が生まれた瞬間と言うのは紛れも無く強烈な印象として残るのではないだろうか。

加えて百合絵はそこそこ頭も良かったし、将来医者か弁護士に、とよく言われ期待されていた。結局百合絵にはその気は無かったし、成長するにつれてそのような期待を掛けられることも無くなったのだが、一時期は少しプレッシャーを感じていた時期があったのも確かだ。

両親にしてみれば期待はしているものの、やはり幸せになってくれるのが一番であって、期待通りに進んでくれなくとも構わないと思っていたようだが、その当時はそんな事情などよく解りもしなかった。

姉弟の中で自分一人離れていることもあり、長女としての責任も人一倍感じていたように思う。

それは中学に上がってから益々顕著になり、今まで分からなかつ



た大人の事情という部分も理解し始めていた。家族を客観的に見るという事も出来るようになった。

そして、一見幸せそうな家庭はいつの間にか百合絵には歪んで見えるようになっていたのである。

父と母のぎくしゃくとした雰囲気がかかるようになったのだ。それまでも両親の会話が余り無い事に気付いていなかった訳ではない。ただ、仕事が忙しいのだろう、父は無口な性質なのだろう、そう思っただけで納得出来ていた。実際そういう部分もあるのかもしれないが、当時の百合絵にもはつきりそれだけではないのだと感じ取る事が出来るようになっていた。

表面的には何も変わらない生活。基本的に二人とも優しく、百合絵にとって掛け替えの無い両親であることに変わりはない。でも一度それに気付いてしまってもう以前と同じではいられなかった。恐らく両親のどちらが悪いと言うことでもなく、ただ相性が悪かったのだと思う。何故結婚したのか　と思ったりもした。だが恐らく最初は些細な綻びがあっただけで問題なかったのだ。時間が経つにつれその綻びが修正不可能なまでに解れてしまっていたのだろう。

更に父は目に見えて孤立していくようになっていった。

母は子供の事を一番に考えおり、それが行動でも分かった。だが、父は無口で仕事の為に家を空けることも多かったから、妹弟は断然母親に懐く形となる。だからこれは当たり前前の事と言えた。

父は確かに家族の一員ではあったがどこか異質になってしまったのだ。

母も妹弟もそんな父に対して歩み寄ろうとはしなかった。母はしていたのかも知れないが、いつの間にかきつと諦めてしまっていた。姉弟達はずっと幼かったしそんな事を求めるのは無理な相談で、求めたところで酷な話である。

だから百合絵はたった独りでその家族の内の均衡を保とうと足掻くことになった。百合絵も父の考えていることは良く分からなかつ

たが、父が居るにも関わらず、まるで父が居ないかの如くに過ごされていく生活が無性に悲しかったのだ。

もし両親が離婚したいと思っているのなら百合絵はそれでも良かった。両親の人生である。子供を育てるという責任は全うしなければならぬと思うが、離婚してそれが出来なくなるわけではない。だが、離婚するでもなく何とも煮え切らない状況で、恰も自然消滅を待っているかの如くにその生活が続けられているのは我慢がならなかった。

これでは何も変わらない。悪くなる一方の緩慢な自殺だとすら思った。

百合絵は問題を先送りしているその様子に腹も立っていたのかも知れない。離婚するならする、しないならしないですっきりとさせたかったのだ。姉弟にとってもこの状態は良くないだろう、と。

かと言って百合絵が離婚を勧めるといふのは可笑しな話だし、百合絵が決断できる事ではない。実は母にそれとなく言ったことはあったのだが、当面離婚を現実的に考えることは無さそうだった。

だとしたら取るべき道は一つ。

家族との間を取り持つ役割を担う事      それが百合絵の足掻いた方法だ。

家の中では如何に気を遣っている素振りを見せずにそれを行えるのかという事に苦心していた。家族の役に立とうとする一方、大袈裟な程陽気に振舞ったり、我儘を言ってみたり、そういう道化師のような役割も演じる。殆ど全てに計算が入っていた事は百合絵自身が一番理解している。今考えると相当嫌な子供だとも思う。だが、努力の甲斐あつてか、それ以上家族がぎくしゃくするような事態にはならなかった。

今百合絵は家族とは離れて暮らしており、家族の関係性が普段どようになっていくのは良く分からない。ただ、帰省した際には相変わらず昔と同じ態度で接するのが癖になってしまっている。一人で居る時間が長くなった分こうした態度は酷く疲れるものに感じられ、よ

く続けていられたなと我が事ながらに感心してしまうほどだ。

実家に帰るのが嫌な訳ではない、寧ろ家族と会えるのは嬉しい。だが数日も居れば独り暮らしの手狭なアパートが恋しくなってしまうのは慣れのせいばかりではないはずだ。

人は誰でもいくつかの仮面を使い分けて社会生活を送っているものだろう。それが一番得策であるからだ。例え相手の態度が仮面を被ったものだと解っていても、それに満足してしまうことも少なくない。正直であれば　つまり本質を包み隠さず見せる事が必ずしも良いという訳ではないのだ。寧ろ良くない場合の方が断然多いだろう。

そう頭では分かっている。だが、百合絵はそんな生活、そんな世間に疲弊していた。

仮面を被り過ぎたせいか、自分の本質が解らなくなってしまうている。正直であろうと努めても何故か偽善のような気がしてしまう。所謂疑心暗鬼の状態に陥っていた。

自分が良く分からなかったし、自分が解らないから余計に他人の事も解らなくなった。仮面を使いたくてもどの仮面を使って良いのか解らない。昔使っていた仮面を引っ張り出しても、本当にこの仮面でいいのだろうか、と疑惑に陥る。

最近の百合恵はずっとこんな調子で、元々引つ込み思案だったにも関わらず、更に輪を掛けてそうなってしまうた。殆ど人と関わる事、会話する事も避けているといった有様で、何とか大学には出てきているものの、それ以外は殆ど引き籠もっているようなものだった。

一人は落ち着いた。一人の時は自然に本来の自分に戻っているような気がした。人前に居る時と、一人の時の差はなんなのか　それは分からなかったが、そんな事は如何でも良い事だ。考えて、解ったつもりになっても結局人前でそれは生かせなかったし、本来の自分だと思える時間が確かにあると思える事実が大事だった。

そんな調子で、暫く誰とも連絡を取らなかったのだが、ふと一人

の友人から連絡が入った。約一年ぶりである。食事でもしないか、という誘いだった。

元来特に用が無ければ連絡等はしなかったし、遊びに誘われたとしても大体はいつか　と先延ばしするか断ってしまっていたが、その友人には無性に会いたくなってしまうた。だからすぐに了解の旨を伝えると日取りを決めたのだった。

再会したのはそれから一週間後の土曜日。

友人の名は室井真美という。百合絵とは中学時代に同じクラスで、きっかけは忘れてしまったが、随分仲良くしていた。高校に進学してから別々になってしまったが、ずっと親交が続いている唯一の友人、所謂親友と言う奴であった。

真美は高校卒業後、専門学校に入学する際、同じく上京してきていたから百合絵と同じである。

だが、百合絵は学校こそ都内にあるものの住んでいるのは埼玉だったし、真美も学校は都内だったが神奈川に住んでいたから余り頻繁に会う事はなかった。それに中々専門学校というのは忙しいらしい。種類にも寄るのかも知れなかったが、真美は服飾の勉強をしていて、課題も山のようにと百合絵は聞いていた。

二人は丁度中間辺りの新宿駅で待ち合わせをすると、そのまま喫茶店に入る。

「相変わらず髪を伸ばしているんだね。随分長くなった」

「ああ、伸ばしてるって言うかただ無精しているだけだよ。真美は髪切ったんだね。私は短いのが似合わないから一寸羨ましいな」

百合絵は物心付く頃からずっとロングヘアだった。反対に真美は中学時代からショートヘアでために髪型も変えていた。今はアップリコットの色合いに染めた髪の毛を揃えていて、小作りで色白な顔に良く似合っていた。

「切っちゃうのは勿体無いよ。パーマとかかけてみたら？折角長いんだからいろいろ遊べばいいのに。私はすぐ飽きちゃって伸ばせな

いんだよねえ。一寸伸ばしたいなとも思ってるんだけど、長いと大変そうだし、時間も掛かるからなかなかねえ」

真美は外見からも解る様に中身もさばさばとしていて、百合絵は自分とは正反対のタイプの真美に憧れにも似た感情を抱いていた。聡明でお洒落だったし、アーモンド形の薄茶の瞳が印象的な美人だった。少し気分屋のきらいはあるが、そこが猫のようだと感じさせる辺り、真美の魅力の一つとも言えるだろう。

そこに注文した飲み物が運ばれてくる。

ケーキも美味しそうだと二人で話したが、昼を食べたばかりだったので、真美はアイスコーヒー、百合絵はアイステイラーだけ頼んだ。「そういえばさ、前に私が貸したCD覚えてる？ ガレイ Gailey っていうバンドのなんだけど」

真美はストローを挿してアイスコーヒーを一口飲んだ。鮮やかなブルーで彩られた爪について目がいく。

「確かヴォーカルがイギリス人 だったよね？」

百合絵は余り音楽に関して造詣が深い訳でもなかったし、流行の曲等も良く知らないが、そのバンドの曲はやけに印象的でよく覚えている。プログレとかいうジャンルらしい。

勿論百合絵はそう言われてもぴんと来ない。一貫してダークな雰囲気で重低音が心地良いサウンドだったと思う。激しい楽曲も多かったが、バラードも美しく、ヴォーカルの声音はどの楽曲にもしっかりと合っていた。出せる音域も広く、ころころと声の調子も変わるから一体どんな出し方をしているのだろうと不思議にも思ったのも記憶している。

「そうそう。まあ実際は国籍不明で、他のメンバーは日本人だけど、ハーフとかでもないみたいだし 外見から見ると確かにイギリス辺りの青年貴族っていう印象受けるよね。英語の発音も とは言っても私は英語なんて殆ど喋れないけど、完璧だし」

真美はそこでもう一口アイスコーヒーを啜った。百合絵もそれに倣う。

百合絵が以前見たアーティスト写真では確かにヴォーカルを除く四人は日本人に見えた。ヴォーカルの名前は　確かレオンだ。彼は栗色の巻き毛で深い青の瞳の大層な美男子だった。

その写真は曲と同じくダークな雰囲気で撮影されていたが、彼が柔和で優しい雰囲気顔立ちであることが分かり、それが正しく貴族的な優美さに見え、百合絵は貴族イコルイギリス、と勝手に思い込んでいたのかもしれない。

「まあ私もそこまで詳しくないんだけどさ。兎に角そのバンドが今度ライブやるから一緒にどうかなって思っで。CD返してくれた結構良かった、みたいな事言っでたし、私も一度ライブ行きたかったんだよね。でも最近はずっと海外で活動してたらしいし、日本でライブっていうのかなり久しぶりみたい」

真美は時折思い出す仕草で視線を上に向けたりしながらも、本当に楽しみにしているといった感じの口調である。

百合絵もその話を聴いているうちにだんだんとライブに行ってみたいと思うようになっていた。一人だったらそこまで思わなかっただろうが、元々気になっていたバンドだったし、どのようなライブなのか興味が沸いた。とは言ってもライブに行った経験等なかったから行ったところで比較出来る訳ではなかったのだが。

「行ってみたいかも。いつやるの？」

「えっと　都内では十月四日、五日だね。十八時開場、十九時開演。実はもうチケット取ってあるんだ。両日取れたんだけどどちらも行くと行く？」

真美は手帳を開いて日程を確認しながら、もう行く気満々といった様子である。

百合絵も手帳を取り出すと予定を確認した。予定らしい予定など何も無かったのだが、講義で遅くなる場合もある。幸いどちらも問題ないようだ。日にちを見るともう来週の話である。

「差し支えないなら両方行こうかな」

「じゃあ決まりね。良かった。本当はね、チケット取ってくれた友

達が居て、その子と一緒に行くつもりだったんだけど急に家の用事で帰省しないといけなくなったらしくてさ。それが解ったのが昨日。今日偶々百合絵と会うことになってたでしょ？だから丁度良いって言ったら失礼だけど、若しかしたら大丈夫かなって思ってた聞いてみたわけ」

真美は心底良かったといった様子で天を仰いでいる。なんだかそんな様子を見ているだけで百合絵も嬉しくなってくる。

「別に気にしないで。私もこんな機会でもなかったら行けなかったと思うし」

百合絵は本心からそう言った。最近家に籠ってばかりだったし、気分転換にも実際丁度良い機会だったと思ったのだ。

その友達に行く相手決まったってメールしておくね　と言って真美は手早く携帯を操作した。殆どメール等しない百合絵とは違って慣れた仕草である。便利な世の中になったな　等と若者らしくらぬ事を考えながら手持ち無沙汰にアイステイーを啜った。

それから昔話やら近況報告やら他愛無い事をたっぷり二時間は喋っただろうか。喫茶店を出ても特に目的は無かったが、二人で当てもなくウィンドウショッピング等をしていると、あつと言う間に時間は過ぎ、軽めの夕食を取るとそれぞれ岐路に着いた。

百合絵は帰りの電車の中、久しぶりに外出らしい外出をし、土曜の混雑の中を歩きまわって居た為か二十時前だと言うのに酷く眠くてぼんやりしていた。危うく電車を乗り越しそうになりながらも何とか最寄で下車する。

最寄駅の周りは民家が並び、まだそれ程遅い持間でもなかったが人通りはまばらであった。

星空の良く見える晴れた夜空を見上げながら今日一日を振り返る。疲れはしたが、出掛けて本当に良かったと思った。実は出掛ける直前、些か億劫に感じて始めていたのだから余計にである。歩いていると眠さも吹き飛び、すっきりした気分になってきた。

なんだか無性にライブが待ち遠強い気持ちになる。

山に囲まれた長閑な風景。のどか 周りには畑が広がり民家がぼつぼつと点在している。

都内ではあるものの、都心のような賑わいは一切感じられない。昼間は仕事や学校で殆どが出張っているから特に人気が無くなる。

だが、嘉山臣広かやまのみひろには関係の無いことだった。わざわざ都心に出掛ける用等無かつたし、それどころか外に出る事も稀なのである。

家の中で全ては事足りていたのだ。

仕事はしが無い絵描きである。仕事とは言っても絵だけで生計を立てるのは無理だったから趣味と言った方が正しいのかもしれない。それでも只管ひたすらに絵を描き続けている。

食扶ちは祖父の残してくれた財産で十分事足りていたし、絵を描く以外には何もする気が起きないのだった。絵を描く事でさえもそれ以外は遣りたくないから遣っているだけであって、絵で有名になるような事等に興味はない。

両親は存命中であつたが、息子の無気力な生活に口を挟む事はしなかった。

両親とは離れて暮らしており、単に息子の状況を把握していないという見方も出来るかも知れぬが、そうではない。

父親は小さいながらも会社を経営していて、臣広には兄が居たから跡取りとしては別段必要なかったのかも知れぬが、それでなくても尚更自分の子供であれば全うな道に進んで欲しいと願うだろう。だがそれはしなかった。

これには理由がある。

臣広は高校時代に不慮の事故で、右目を失明してしまったからだ。

事故の当日、臣広は両親、兄と一緒に食事に行く約束があり、待ち合わせをしていた。兄は両親と一緒に来る事になっていたので臣



広は一人本屋で時間を潰し、時間の一寸前にその場所で待っていた。すると、まるで見計らったかのように頭上から派手な音がした。

条件反射で見上げると、窓硝子の破片と一緒に男が落ちてきたのだ。ほぼ真上であつたから気付いた時には遅かつた。幸い男の下敷きになる事は無かつたが大小の硝子片からは逃げる事も出来ず、結果右目に入つた細かな硝子で片目の視力を失う事になつたのだ。

それ以外は奇跡的に外傷も殆ど無く、左目は無事だつた。落ちてきた男は打ち所が悪かつたのか即死だつたと聞く。

男が落ちてきた原因は良く分からないということだつたが、分かつたところで視力が戻る訳でもないし、当時はショックが大きくてそこまで頭が回らなかつた。

それに現在の臣広にも如何でも良い事である。過ぎた事は仕方がない、そう思っていた。

だが、臣広の両親はこの件で酷く責任を感じてしまつたらしい。両親に全く否は無いのだが、自分達が時間よりも早く着いていれば、また待ち合わせ等しなければこんな事にはならなかつた、と思つてしまう気持ちは理解出来る。臣広は視力を失つたと言う事実と目の前で男が一人血塗れで死んだという事実で混乱していたし、一時期は本当に精神を患っているような状態だつたから尚更だ。

ただ、今の臣広の記憶に、血塗れの男はまるで幻想でもあつたかのように切り取られた一瞬の虚像としか残っていない。男が落ちてきた時の場面も同じだ。

臣広は目を遣られていた訳だし、ショックの為かすぐに意識を手放していたから、状況を考えればそうなるのも当然なのかもしれない。だが、その一瞬がやけに鮮やかな印象を伴って何度も記憶の中で再生され続けた。

また、男が落ちた後の場面と血塗れで横たわる場面は全く切り離されたもののように思えた。落ちてきている姿は夕暮れの虹彩を浴びた硝子の破片に包まれてきらきらと輝いており、とても美しく、血塗れの死体の生々しさとは結びつかないのである。

それは意識を回復した時も同じで、真逆のビジョンがそれぞれが大きな衝撃となって臣広を襲った。

始めは叫んで取り乱し、漸く落ち着いてくると、口が利けなくなり、やがて全てに無感動になった。すぐに退院は叶ったもの、右目の包帯は取れず、空ろな心で自室に籠っていたのを覚えている。

それから 臣広自身に時間の感覚等なかったのだが 二三週間と同じ状態が続いて、漸く包帯が取れることになった。

その時事故から初めて右目を開けたのだ。本当は開けたくは無かった。診察を受ける時は開けていた訳だがそれは儀礼的なもので、ただ診察を受けると言う目的で無理矢理開けられたようなものである。失明はしてしまっただが、それ以外はすっかり元通りになるという意味で開くのは抵抗があったのだ。怖かったのである。

ただ、意識的に片目を瞑ったまま生活出来る訳もなく、頑なに拒む事も出来ない。目を開けることの恐怖を悟られたくもなかった。だから有りつ丈の神経を集中させてゆつくりと目を開けたのだ。それこそ目を開ければ死ぬかもしれない、とそれ位の気持ちだったから、手にはびつしりと冷や汗をかいていた。

しかし、いざ目を開けてしまえばまるで拍子抜けしたような気持ちになったものだ。

なんて事は無い、ただ視界が些か広くなっただけで、包帯をしていた頃と何も変わらなかった。

それだけだ。

両目を失った訳ではないのだ。世界は大して変わらない。一寸した違和感があるだけでそれも最初のうちだけだった。

だが、例えば事故の衝撃が薄れても、それを切掛けに臣広の何かは確実に変わってしまった。話せるようになっても無口で表情が乏しくなった。恐怖は胡散霧散してしまって、それと同時に全ての感情、感覚も朧になってしまった。

時折、何も映さない右目に事故の様相がありありと浮かぶように

なった。左目で現実を見て、右目で非現実を見ているような感覚である。

やがてそれは混じり合い、臣広の中に蓄積されていった。澱のように沈殿し、すっかり臣広の一部を形成するようになった。

臣広は高校こそ出たものの、家に閉じ籠り気味になり、只管絵を描いた。

その行為は自分の交じり合った世界を明確な形で表現したかったからなのかも知れぬ。だが、絵が描きたくなるから描く、それだけの理由であって、実際の所その意味は後付でしかない。

元々絵を描くのは割り好きな事だったが、それ程執着していた訳でもないし、描き方は美術の授業で学習した程度で技法も何も無かった。油彩、水彩、パステル、インク等その時々気分を変思ってたままに描くだけである。

絵をぼんやりと眺めているのも好きだったが、画家の名前なども詳しくない。

絵を描いている時は無心になっているか、何か取り留めの無い事を色々考えているかのどちらかだった。

臣広が繰り返し考えたテーマの中には何故眼球があるのに見えないのだろうというものがあつた。

医学的に説明すればそれは明々白々な事なのだろうが、臣広はそれを知っていた上で不思議に思った。右目は物を見る機能は失っているものの、動きもするし、白く濁ってはいたが特別に見た目が変わったわけでもない。瞼に指を這わせてその動きを追ってみたりもした。ころころと眼球が動いている。一つの生き物であるかのように感じた。

中学生の頃だったか、牛の目の解剖に関しての逸話を教師が話してくれた事を思い出す。確かメスを入れると中から透明などろっとした物　つまり硝子体が出てくると聞いた。

実際に臣広が解剖をする事は無かったが、その話を聞いて無性にその様子を眺めたくなった記憶が残っている。どんな風に出てくる

のだろう、と思った。それに如何して透明などろつとした物が身体の中にあるのか不思議だった。

生き物、この場合哺乳類を念頭に思い浮かべたのだが　これらの中身は総じて血だとか肉だとかそういう生々しくてでるでるとした物で出来ているという印象しかなかったからだ。

当時は深く考えずただ見たいと思っていたが、今はそれが身体の中で一番美しい部分ではないかという想いから見てみたくなった。

臣広の中では、本能的に嫌悪感を覚える、そういう種類の物しか身体の中には存在していないはずだった。しかし、硝子体という物の正体を知り、それは気付かぬうちに深い影響を与え、臣広の世界観を一遍させてしまっていたようだった。

既に本来の機能を失ってしまった右目を抉り取って解剖してみる妄想を何度も頭の中で繰り返した。実際するつもりは無かったが、それでも無性にそうしてしまいたくなる時があった。

また、あの事故の日の強烈な二場面についてもあれこれ考える事も多い。

時間と言うものを隔てて改めて考えてみると、それまでに気付きもしなかった面からそれを見始めていることに気付いた。

なんにしてもあれは人生で言うところのターニングポイントに変わりは無い訳だが、だからこそ　だろうが、その事件に関しての考察は深くなり、様々な啓示を与えてくれた。

そしてはつきりした事があった。

あの時、落ちて死んだ彼は、行き着くところ臣広にとって一つの物質でしかなかった。人間でもましてや生き物でもなかった。

あれは無だ　臣広はそう思っている。

臣広にとっての彼には生と死が一瞬間ずつしかなかったのだ。生まれて死んだ。切り離された記憶の二場面ですべてが語り尽くされていた。虚無から出でて虚無に没して　臣広が偶然目にした場面は、虚無が僅かに形を成した瞬間だったのだと思った。

虚無が通った彼の中身はきつと全て浚われてしまったのだ。

臣広はそう思うと無性に羨ましく思う時があった。

そしてこういう場合、段々と気分が良くなって行き、意味も無い鼻歌を歌いながら臣広の思考は諸々と流されていく。何を描いているのか自覚しないまま勝手に筆は進み、いつの間にか何時間もトリップしている。

「臣広さん、夕食のお支度が出来ましたよ」

トリップした状態では時間の感覚も分からない。放っておけば生理現象すら感じなくなるし、丸一日そのままで居続けることも可能だろう。

だがそれを辛うじて人間的な生活のうちに留めてくれている存在が一人。この日もいつの間にか魂が抜けたようになっていた臣広を優しい声音で引き戻してくれた。

「ああ、妙さんか。もうすっかり夕焼けだねえ」

臣広が妙さんと呼ぶ六十歳過ぎの小柄な女性だ。本名は篠村妙子しむらたえいと言つて、臣広は子供の頃から見知っている。謂わば住み込みの家政婦だった。

臣広は幼い頃、殆どをこの妙子に育てられたようなもので、第二の母だと思っている。妙子は臣広が一人暮らしをする際に半ば無理矢理にくつついてきたのだ。

だが、両親は臣広の一人暮らしには不安を抱いていたから、妙子と一緒に行くと言つた事で驚きはしたようだが結局はかなり安心した様子で送り出してくれたし、臣広自身は妙子が付いてくる事に依存は無かった。

妙子の前では幾分、臣広の口数も表情も豊かになる。一時期徹底的に人を避けていた時も妙子だけは例外だった。それだけ妙子の事は信頼しているからだ。

妙子のお陰で今臣広は人間で在り続けて居られると思っている。つまり、世捨て人のような生活を送っている臣広も決定的な人間嫌いにはなっていないということだ。妙子のお陰で人間も悪くないと思えているし、根本的に屈折しなかった一因であると思われる。

実家を出てから三年が経ち、臣広も歳を重ねた分、霧散していた自分の性質が丸く落ち着いて行くのを感じている。

「大分日が落ちるのも早くなった気がしますね。山も色づき始めたようですし、偶には外出なさったらどうです？先程西方さんからお電話も御座いましたし、顔を見せに行くのも宜しいのではないですか」

取り次ごと致しましたらただ思い立って電話しただけで様子を聴きたかっただけだ、と仰られてすぐに電話を切ってしまわれたんですけどね　と付け加える。

「そうだねえ、最近籠ってばかりだったから一寸行って来ようかな」西方と言うのは殆ど唯一臣広と親交がある知人である。今は友人と言っても差し支えないだろう。名は那葵と言って、大層変わり者だった。

容姿も変わっていると言えば変わっているのだが、それはなかなか見られないような美しい容貌と言う意味で変わっているのであつて、臣広が変わり者と思う所以ではない。若しかしたらその影響も無きにしも非ずかとも思うが兎に角中身が変わっている。

基本は温厚でいつも微笑んでいるような印象を受ける。だが、時々突拍子もない事を言い出すし、何処と無く逆らえない雰囲気もある。

大方の人間は多分、自分を中心に世界が回っている　ではないが、極めて主観的な立場で自分の立場を見ているから、物語で言うところの主人公は自分自身という感覚で世間と対峙していると思う。臣広自身は殆ど自分と向き合うような毎日なのだからそういった傾向は余計に顕著であるだろう。

それが那葵の前だと自分は一出演者としか思えなくなるのだ。全ては那葵を中心に進行している、そんな錯覚に囚われてしまう。威圧感がある訳でもないのだが、那葵は強力な重力を持つているのだと思われてならない。その癖まるで空気のようにでもある。何事にも無関心にそこに存在している、確かにあるのに目に見えない

そんな存在だ。別に幽霊ではないのだから透けている訳でもないし、はつきり目に見えるのだが臣広はそう思う。

下に降りてて妙子と二人の夕食を採ってから那葵に電話を掛けてみた。まだ七時半だったから恐らくは店に居るだろう。

店と言うのは卵蔓庵という那葵が趣味で遣っているような良く分からぬものである。

臣広にはがらくたにしか見えない物が沢山並べられており、何でもそのがらくたは売り物ではなく、ただ飾っているだけなのだそうだ。物売る事を生業にしている訳ではないと言う。仲介屋とか言っていたような気がするが、実際その仕事を見たことはないし、臣広等には想像も出来なかった。

第一客の来ないような辺鄙な場所で遣っていて商売になるのかとも思うが、実家は相当な金持ちとの事だったから道楽でいいのだろう。

恐らくこの店だけの存在だけでも那葵の変わり者だと言う所以は全て説明が付いてしまう。

電話を掛けたものはなかなか出る気配が無く、諦めて切ろうとしたところで戸惑うような声音の男が出た。那葵ではない。

間違ったかと一瞬思ったが、男は出る時、確かに卵蔓庵と店の名前を口にしていたし、間違いではないようだ。卵蔓庵で那葵以外の人物を見たことは無かったが、若しかしたら従業員か何かなのかも知れぬと思い、取次ぎを頼む。

暫く待っていると、又もや先程の男が出て、一層戸惑った様子の声音で那葵さんは今手が離せないようで 明日来るように伝えてくれとの事です、と言う。身勝手な話だと思い、恐縮しているのだろう。

だが、臣広は那葵の性質は理解していたから、別段何とも思わない。寧ろ電話口の男が哀れに思えた。多分まだ那葵に慣れていないのではないだろうか。

了解した旨だけ伝えたとそのまま電話を切った。顔を出そうと思

つていたのだし、用がある訳でもないから断る理由はない。

那葵との付き合いは家を出た辺りの事からなので、今の家に住んでいる時間とほぼ同じである。切掛けは展覧会に出品した絵を那葵が気に入り買ってくれた事だった。

臣広の絵は当時　今ではあるが　評判が良くなかった。きちんと勉強しているような画家から比べれば断然稚拙であつたし、抽象的なそのそれは理解され難かつたらしい。

絵画、特に抽象画等という物はどんなものでも理解されるまでに時間を要する物なのかもしれぬが、臣広の描くそれは少なくともその展覧会を見た多分大多数の人の肌に合わなかつたのだらうとも思う。

だが、那葵は如何した事かやけに気に入ってくれて、それ以降の作品も殆どが那葵に引き取られている。

那葵に言わせると臣広の描く絵には僕の世界が映っている、との事だつたのだが良く分からない。臣広は言葉に出来ない頭の中のぼんやりしたものを描き出しているだけであり、描き出してもそれは言葉で説明出来る代物ではなかつた。那葵の世界と言われてもぴんと来ない。

勿論臣広は那葵ではないし、那葵になれるはずも無く、あくまで客観的な位置から考察知るしかない訳で、那葵の世界と言われてもああそうなんだ、位にしか思えないのは仕方が無い事だ。

どこかしら那葵と共有している部分があるのだらうとは思つが、深くは考えない。考えても分からないし、それで良いのだと思うからだ。

ふとこの前完成した絵を持っていこうかと思つた。那葵にもまだ話していなかつたから丁度良い土産になるかと思つたのだ。

本当は手元に置いておこうかと思つていたが、やっぱり那葵が持つていてくれた方が良い様な気がした。

白い背景に黒く角張つた渦が幾重にも散りばめられている油彩画だ。意味は臣広自身も良く分からない。



ただこれを見ていると那葵を思い出す。別に那葵を想いながら描いた訳ではないし、幼い頃から今迄、偶に夢の中に現れる映像だった。夢から覚めると霧散霧消してしまうから、それをそのまま描いたつもりでもなんだか少し違う気もするのだが。

臣広は忘れないようにと早速絵を包んで車に積んだ。殆ど外出しないのだから車は余り運転しない。それで無くとも片目での運転はかなり気を張ってしまうから、普段は電車を使うことが多いのだ。

しかし、辺鄙な土地では車は必需品となる。普段は主に妙子が日用品の買い物で大いに活用しているから、たまに臣広が使っても不調を起こすような事はなく、その点は安心だ。

こんな事からもつくづく妙子のお陰で生活が成り立っているのだと臣広は思う。

翌朝、臣広は何時もより早めに起床すると身支度もきちんと整え、久しぶりに余所行きの服を着、姿見の前で己の姿を眺めてみる。家では絵描き等遣っているから下ろし立ての衣類を纏ってもすぐに汚れてしまうし、何時もよれよれの汚らしい格好で、髪も伸び放題だった。その様子は風来坊のようなかなりむさ苦しい印象だと思う。

しかし、身嗜みに気を遣えばそれなりに見栄えがするのである。むさ苦しい姿に慣れてしまっていたから尚更そう思うのかもしれない。優男風にすら見える。

真つ黒でウェーブがかった猫っ毛は右目を隠す為半ば必要に迫られて伸ばしているのだが、どうもそれが一因らしい。最も殆ど自室に籠っているから、ひよる長く色白に見えてしまうのは自業自得という奴で、髪の色にしようのは八割方現実逃避である。

臣広は外見に拘る性質ではないし、人に会う時は礼儀として身嗜みに気を遣いはするが無頓着な方だ。だが、やっぱり男として生まれたからには筋骨隆々とまではいかなくとも逞しい屈強な身体に憧れもした。

所謂無い物強請りという奴なのだろうと思い、溜息一つ付くかし

てそれ以上は考えないというのが臣広の常である。

那葵の店へは特に時間は決まっていなかったし、何時に訪れても構わないだろうと思っていたが、十一時頃迄には到着する計算で家を出た。態々都心部まで行くのだから他の用事も済ませて来ようという腹積もりである。

道中渋滞等もなく、余裕を持って出てきた臣広は十時半には店に着いた。

合い変わらずそこ等一体は閑散としている。

卯蔓庵の営業時間は実のところ臣広にも良く分かっていない。ただ、大抵何時でも開いている、という印象を抱いていた。単に常識外れな時間には出向かないからそう思っているだけかも知れぬ。

しかし、この日も案の定卯蔓庵には開店の札が掛かっていた。若しかしたら不在の時ですらこの札はこのままなのではないか、そんな気さえした。

「御免下さい」

薄暗い店内も相変わらずで、外が明るい分暫くは目が慣れない。

「あつ、いらっしやいませ」

昨日電話口で聞いたのと同じと思われる声が聞こえる。店の奥の方でシルエットだけが確認出来た。今日はそれ程戸惑った様子は無い。

「私は昨日電話した嘉山と言います。西方さんはいらっしやいますか？」

外からの光を遮ると、ぼんやりしていた店の様子が明瞭になってくる。声の主は壁一面にあるがらくたを拭いていたらしく、作業の手を止めてこちらに向いた。

まだ二十代前半と思われる凜とした一重瞼の青年だった。この店の雰囲気でこう言う表現は似合わないかも知れぬが、短く刈り揃えた髪の毛にぴんと伸びた背筋等から爽やかな印象を受ける。

若干穏やか　悪く言ってしまうえば気の弱そうな感じもあるような気がするが、それは昨日の電話での対応の事があったからそう感

じただけかも知れない。

「ああ、昨日の方ですね。昨日は伝言とは言え、無理を言ってしまったようで申し訳なかったです。那葵さんは一寸出てくると言って先程出て行きましたけど、すぐ戻るとの事でしたので」

最後の方は又もや困った様子で語尾がはつきりしなかった。申し訳なさそうな顔をして臣広を伺っている。

臣広はその様子に好感を抱いた。

それに特に用がある訳でもないし、待つのは構わない。半ばこういう事態も見越していたのだ。

青年は壁に開いた微かな隙間から折りたたみ式の椅子を二脚取り出すと手際よく広げ、お掛け下さいと言う。更にそこから又もや折りたたみ式のテーブルを取り出し、臣広の前に置く。そして暫くお待ち下さいと言って今度は床下に消え、五分程で戻ってきた。どうやらお茶の支度をしてきてくれたらしい。紅茶の入ったポットとカップを盆に乗せて持っている。

臣広はもうこの店の変な造りも見慣れているのだが、何時見ても変だと思う。地下にも行った事があるが、普通に住居として機能するような設備があるのだ。おまけに地下への入り口は裏手の部屋にもあるらしく、この部屋からは地下を通るか、一度外に出て裏口からしか入れないのだと言う。また二階もあるとのことだったがそれは裏の部屋からのみ行けるらしい。

使い勝手が良いとはとても思えないが、見物するだけなら面白くもある。

どうぞ、と差し出された紅茶を一口飲むと肩から力が抜けた。臣広は久しぶりの運転にやはり相当緊張していたらしい。

「君は…えっと、ここの従業員ですか？私は数年前からここを知っているのだけど、那葵以外の人間を見たことが無かったから一寸吃驚してしまつてね」

青年は忘れていた、と言うように慌てて姓名を長坂義文と名乗った。

「私は従業員ではないと思うんですけど……どうなのでしょう。実は昨日この店に偶々立ち寄ってみたら、成り行きでなんやかんやと手伝いをする事になって 今日も流されるように手伝いに来ているといった感じなんです。普通こんな事で従業員とは言えないと思いますけど、那葵さんはそういうつもりで扱っているような気がします」

今日も私に店を任せて出て行ってしまったくらいですからね、と苦笑する。それでも特に嫌がっている様子は無く、臣広は義文なりに今の立場を楽しんでいるような印象を受けた。

「はあ、可笑しな話ですね。でも那葵らしいと言えば那葵らしい。ところでお仕事 いえ、学生さんでしょうか？那葵は少し思い込みが激しいと言いか、強引なところがあるから無理をして来て貰っているのでは？」

臣広は笑いながらも一応気を遣ってみた。楽しんでいるように見えても、無理をして来て貰っている可能性もある。妙子以外の人間とは滅多に接触がないから人の感情の機微には鈍感な方だと自覚しているのだ。

だが、昨日は兎も角、今日は何か他に用事があれば幾らでも反故出来る約束だろう。それでも来たという事は時間があつたという事だろうが、そこまでする義理は無い。だから何か訳があるのかと気になった、と言うのも正直なところだった。

「私は今年の春に大学を卒業して社会人として働いていたのですが、今は無職です。でも幸いすぐすぐに職を見つけなければ生活が立ち行かない、ということも無いですし、すぐに新しい職へ、という気分にもなれなかったものですから要するに暇だったのです。なんだか変わったお店でしょ？だから好奇心も手伝ってまあ暫くは流されてみようかな、と思った訳です」

気分転換には丁度いいですよ、と義文は少し照れたように微笑んだ。心情がすぐ顔に出るタイプらしい。

義文は社会人一年目という初々しさも手伝ってか、随分若く見え

る。臣広はまだ二十五歳だし、年齢差で言えば普通に考えてほんの二歳程度である訳なのだが、学生でなくなつてからはもう七年経っている。その開きは思ったよりも大きいのかもしれないと感じた。

だが、立場は違えど義文の気持ちは良く分かる。

成る程ねえと惚けた様な声で答えて、少し冷めた紅茶を飲む。これくらいの温度が丁度良い。

「私は那葵とは三年程の付き合いになるのですけど、未だにこの店の正体が掴めていません。本人は仲介屋と言うだけで、ろくな説明はしてくれませんね」

つられる様にしてカップに口をつける義文を見て、少し居た堪れない心境になつているのかもしれないと思った。

助け舟、と言う訳ではなかったが、丁度そんな話をし始めると言い終わるか言い終わらないかの所でドアの軋む音と共に大量の光源が入つて来た。

結局場の空気は修正されることなく一気に弾け飛ぶことになる。

二人でそちらに顔を向けると案の定那葵が居た。噂をすればなんとやら、か　と臣広は心の中でなんとなく言つてみた。

「臣広久しぶり！相変わらず不健康な顔だなあ」

那葵は臣広が居るのを分かつていたかのように言つて笑っている。暗い室内でよく分かる訳は無いと思われたが、那葵が言うように確かに臣広は不健康な顔だった。昔から何とも無いのに顔色が悪いと言われてきたからもうこれは体質なのだろう。今更それを指摘されても何とも思わない。

「久しぶり。それよりどこに行つていたんだ？聞けば長坂さんは従業員ではないと言うじゃないか。勝手に店を任せて出て行ったら迷惑だろうに」

別に説教するつもりではなく、何時もの軽口の調子で言う。臣広の声の調子は何となく間延びしているから、例え説教をしたところで効力は無いし、本人も説教等柄ではないと思つている。

「あれ？僕は雇つたつもりだったんだけど言つてなかったかな？」

那葵は自分の分の椅子も出してくると座りながら首を傾げた。やはりもう義文を従業員と認識していたらしい。前半部分の質問は無視されているし、何ともいい加減な返答である。だが、荷物等持っていないところから見るに本当に一寸した用だったのだろう。

義文を見るとはあと言って苦笑している。

「幾らなんでもぼけるのはまだ早いよ。長坂さんは偶々予定が開いていたから手伝ってくれてただけみたいだよ」

「ねえ？」と降ってみるが相変わらず苦笑したままで曖昧に頷く程度だ。「でも会社辞めたって言ってたし、丁度良くなって思ってた。結構物が溜まつちやっただから整理するのに人手も欲しいと思ってたし、話し相手も居ないから義文が居れば楽しいかなって。あつ、ちゃんと自活出来る位の給料は出すから安心してね」

最後は義文の顔を覗き込むようにして念を押す。代わりに義文は一寸引いた。

正に那葵の独断であるが、多少は相手の立場も慮っていた様だ。そのせい、という訳ではないが、那葵の物言いに嫌な印象は抱かない。恐らく義文も自分と同じなのだろうと臣広は思った。

「私は構いませんよ。一寸まだ調子に付いて行けていませんが」

臣広はそんなに簡単に就職先を決めてしまつて良いものか、と思つたが、自分の口出しする事ではないと思い、黙つてその様子を眺めた。

「じゃあ、細かい所はまた追々つてことで！さて、臣広、折角来たんだし今日は昼食でも一緒に食べに行こう。特に用もないだろう？」

「ああ。それと、今日はお土産がある」

一旦落ち着いたところで臣広は持参した絵の包みを手渡す。昨日この絵を渡すと決めてからはこれを目的に出向いたようなものだった。

「新作かい？確か今年の初めに一枚貰つて以来だね」

そう言いながら包みを手早く剥いていく。その所作は如何にも大雑把であるが、包みを破いたりはいしないうし、意外にも綺麗に開けて

しまつ。何時もながらこういった器用さには感心する。

「絵描きさんですか？ 凄いですね」

横では義文が純粋な瞳をきらきらさせている。思わず臣広も微笑んで、殆ど趣味です、と答えた。謙遜ではなく事実だ。それに絵描き、と人に言われると何だがそれにカテゴリするのは一寸違つ、とも思つてしまふのだ。

「これは　　なんだが何時もとは一寸違うね。凄く近い」

すっかり晒された絵を、那葵は人形のような顔でじつと見ている。真剣な顔、に近いのかもしれないが、空ろな表情にも見える。

何時もと違つと言われても描いた本人には良く分からなかった。

それに近い、と言つのは如何いう意味なのだろう。

「余り御氣に召さなかったかな？ でもこれは別に買い取つて欲しくて持つて来た訳ではないし、要らないのなら持つて帰るよ」

良く分からないが、氣に入らないのなら仕方が無い。那葵が持つている方が自然な氣がして持つてきただけだ。

「いや、貰つておくよ。氣に入らない訳じゃない。少し意外だったというか　　そういう感じだ」

何時ものような柔らかな微笑になった。

那葵がこの絵を見て何を感じたのかは相変わらず良く分からない。だけど今までだつて同じだったのだ。臣広の絵についての感想と言うものを、臣広はまるで理解していない。

那葵も臣広が如何してそういう絵を描いているのか知らないだろうし、臣広自身言葉で説明出来る代物じゃなかったから話した事もない。そして、それで良いのだと思っている。だからただ、そうかとだけ伝える。

「私なんかは芸術だとかそういうのはまるつきし分からない人間なのでなんだか不思議な絵だなあというくらいの感想しか持てませんでも、こういうのを描けるつてだけで尊敬してしまいますね。タイトルはなんて言つんですか？」

義文は那葵の後ろに回つて、腕を組み唸りながら絵を観察してい

た。なんだか難解な数学の問題とでも向き合っているような格好だ。  
「タイトルはありません。大抵私の絵にはタイトルと言うものが無いんです。そういう時には那葵が勝手に付けている。だから、私の絵に関して話していたとしても分からなかったりするくらいです」  
義文はそういうのもあるんですね、と言って芸術の世界は奥が深い等とまた唸り始めた。

「那葵、今回のタイトルは思いついたかい？」

普段こういう風に聞くことも無かったのだが、この時は無性に気になってしまった。タイトルは無い、とは言ったものもしタイトルを付けるならば『那葵』と言うのが一番近い気がしていた。

「これは『裏』かな」

珍しいと思った。ほんの僅かだったのだが、那葵にして思案する風だったからだ。それに那葵はどこから出てきたのだ、というタイトルを突拍子も無く付けるのが常だった。意外にも普通というか落ち着いたタイトルだったので驚いた。

「私には那葵のセンスは推し量れないらしい」

今度は『裏』ねえと言いながら唸っている義文同様、一瞬間の内臣広もそのタイトルに関して考えてみたが結局抱く感想は無く、断ち切るようにおどけた声音を出してみた。感覚的な事は分かうとしても結局余り意味を成さないからだ。

義文もその意見には賛成です、と言って漸く唸るのは止めたらしい。

「ははっ、まあ感じ方なんてそれぞれだ！さて、一寸早いが飯を食に行こうか。僕は朝ご飯を食べていないからお腹が空いたよ」

絵を下に置いて来るから君たちはここを片付けておいてね、と言って一人地下に消えて行った。全て是那葵の都合らしい。

義文もポットなどを片付けるために下に降りて行ったので、臣広は勝手知ったる他人の家とばかりに椅子とテーブルを元の位置に戻す。義文は自分が遣ると言っていたが、臣広が済ませてしまった方が早い。



片付け終わってざっと店内を見渡す。

改めて一人店の中に立っていると異空間にでも迷い込んだような気がしてきた。非日常な世界の中に何時も居ると那葵のようになるのだろうか。それともこれはそもそも那葵そのもの、また日常であり、外の方が非日常なのだろうか。そんな取りとめも無い事を考えた。

そうしていると全ての時間が止まったような気もした。でも異空間ならそれも不思議は無い訳だ。

那葵と義文は五分と掛からずすぐに戻ってきた。その瞬間に異空間は見慣れた店に戻り、全部錯覚だったのだと理性的な自分に立ち戻る。

「さて今日は僕のお勧めの中華屋に行こう！小龍包が美味いんだ」  
那葵は随分はしゃいで、すたすたと店の外へ出て行く。後に臣広と義文が連なる。

那葵は店の鍵も閉めずに進んでいくが、義文は早速従業員としての責任を感じたらしく、おろおろしながら那葵に声を掛けた。勿論店の鍵を受け取る為だ。しかし、那葵は一向気にする様子も無く、そのままが良いと言う。

そう言われても義文も困るのだろう、また暫くしどろもどろになっっていたが、店主が良いと言うなら良いのだろうと諦めたらしく、店を気にしながらも後に続いた。

店の開店の札もそのままだった。やっぱりここは何時でも開店中なのだな、と臣広は思う。なんだか不思議と安心した。

思えばこうやって店から外食に出るのは初めてだった。那葵と店の関係が、少しだけ臣広は理解出来た気がする。

心のもやもやが解消されたような気分になり、無性に食欲が沸いて来た。

ふと時間が気になり時計を見ると二十一時半になるところだった。百合絵のアパートがある最寄り駅ではこの時間だと会社帰りの人々が下車するくらいで、辺りは静まり返っている。だが、ここにはサラリーマンやOLのような姿は殆ど無い。あるとしてもすれ違う位で、駅に向かって歩いている群れはとても仕事帰りとは思えない井出達の若者ばかりだ。

百合絵は途中までその群れに流されるようにして歩いてしたが、とうとう我慢出来なくなり、道端に反れてしゃがみ込む。

「大丈夫？」

真美の気遣う声が聞こえた。真美もそのまま隣にしゃがみ込む。百合絵よりは平気そうだが、疲れた様子は同じである。

「大丈夫だよ、慣れないから一寸疲れちゃっただけ」

安心させる為にそう言ったが、暫くこの倦怠感は後を引く気がした。

今日はGalleeyのライブ、二日目の公演があつたのである。百合絵は昨日とさつきまで行われていたライブの様子を思い出す。

一言で言うならそれは百合絵を圧倒するものだった。

彼らのライブは百合絵にとっては未知との遭遇と言っても良い。大変な衝撃を受けた。

まず轟めき合うファン達。開演迄の時間でさえかなりの人口密度だったのに、SEが始まると息も出来ぬ程に圧迫された。自由に動かせるのは辛うじて顔くらいで、腕でさえ無理をしなければ僅かに移動させる事すら難しかった。

しかも、一日目は確保した場所も悪かつたらしい。会場の中程よりやや前方は曲中、ノリの波が最も大きく成る位置であつたらしく、宛ら氾濫した川に身を置いているような有様だった。何とか転倒だけはしなかったものの、かなり気を張って漸く、といった感じだっ

た。

ライブというのはこんなにも激しいものなのか、と百合絵は想像すらしなかった事態を体感し、まず驚いたのである。

また、果たしてそんな状態できちんと演奏を見れたのか、聴けたのか、と思われるかも知れぬが、そんなことはない。ステージ上で繰り広げられるそれに更なる衝撃を受ける事になったからだ。若しかしたらそんな状態だったからこそあれ程の衝撃を受けたのかも知れぬとも終わってから思う。

暗い照明。シンプルなはずなのにバンドのサウンドやバックに映される映像で物々しく感じられる演出。そして全身を響かせるような重低音の効いた轟音。全てが一丸となって百合絵の脳髓を揺さぶった。

在り得ない。

百合絵はそう思った。CDを聴いて居た時から気に入っていたものの、ここまで己の内部に侵入してくる感覚は得られなかったし、想像すらしなかった。ライブも殆ど興味本位で見てみたいと思っただけだ。

それなのに　これは反則だ。

こんなに圧倒的な質量を持って自分を侵食してくる存在は在ってはならない。だが、在ってはならないに在る。

ではこれは何だ。

在るとしたらそれは

創造主に他ならないのではないか。

神のような存在。否、正確に言うなら鬼神だと思った。百合絵は鬼神の正確な意味等知らないし、勿論由来も分らない。だが鬼と神という、一見すると全く異なったものが融合したような印象のこの言葉がぴったりだと思ったのだ。

SEが始まった瞬間からもう鬼神が支配する世界に引き込まれていたのだろう。

それを理解したのは演奏が始まってからだ。まず感覚として、次

にその感覚を言葉にして理解した。そして、その時にはもう逃げられなかったのである。完全に百合絵は絡め取られてしまっていた。ずぶずぶと世界に沈殿していく。ただその世界を構成する一員となつた。

人に押されて苦しいとか、何とか倒れないように気を張るだとか、そういう意識も確かに働いていたが、それは生理現象と同じようなものである。ライブだからと、少し時間を掛けて整えた髪がぐちゃぐちゃになるのも、汗で全身がぐっしよりするのも如何でも良かった。

曲は大半が知らないものばかりだったがそれも重要ではなかった。兎に角百合絵はその世界観に引き込まれていたのである。

特に一曲目は百合絵をその世界観と同一化させてしまったのだから強烈な印象を残した。それは百合絵がCDでも聴いていたバラードだった。暗くて重厚で悲痛なバラードである。

歌い手は正に異質な世界主人公と言わんばかりに己の内面を曝け出し、表現していた。CDとは違ってその歌は完璧ではない。メロディーが消えていたり歌詞も変わっていたり。それでもそれはCDで聴くよりも遙かに、痛いくらいの感情が流れてくるものだった。レオンは圧倒的な歌唱力も兼ね備えていると思う。だが、このバンドの場合、それを重要視していない、それに頼っていない。

何かを伝える為にはメロディーや歌詞、果ては歌唱力よりも重要な事があるのだとこの時百合絵は初めて知った。

CDはあくまで商業目的もあるし、斑があつてはいけないものなのだろうが、ライブは違うのだ。幾ら完璧に演奏しても、生きた躍動が無ければきっとライブをする意味等ないのだろう。

感情は刻々と変化していくもの。決して同じ状態で留まる事は無い。変化が無いように感じられても、その実微妙に変質していくものだと思う。だから、同じライブは無く、あってもならないと思う。一度限りの、その時のリアルな感情を反映してこそそのものなのだ。

初日から延々二時間、人の波に揉まれ続けたライブだったが、百

合絵は何時までもその空間に留まっていたと思った。照明が付き、講演の終了を知らせるアナウンスが流れて、人が散り始めても惚けた状態のまま、ライブ中に感じていた世界の名残を必死に追ったほどである。

探し当てて声を掛けてきた真美にも曖昧な返事で答え、人の波に沿って外に出た。そのうち寒さと倦怠感が徐々に分かるようになり、漸く現実世界が見えてくる。

汗まみれになった衣服は絞れそうな程にぐっしり濡れていたし、薄くしてきた化粧もすっかり落ちていようだった。身体は節々が気だるく、思うように動かない。動かそうとすると酷く重く感じられた。恐らく筋肉痛になるだろう、そう思った。

真美も同じような有様だったが、それでも百合絵等よりは余程慣れているらしく、いちいち百合絵を気遣ってくれた。ライブ直後の惚けた百合絵の様子も気にしていないようだった。少し申し訳ない気持ちになる。

感想を聴かれたが、百合絵は凄いとしか言えなかった。真美も興奮冷めやらぬ様子で、あれが良かった、これが良かったと、話しかけてくる。百合絵はともすると飛んでいきそうな意識を叱咤しながら真美の言葉に頷いていた。真美の言葉は共感出来る部分も多かったが、百合絵の頭の中で感じた事とは差があるようにも思えてしまう。

二日目のライブは予想通り全身筋肉痛で、鉛のように重だるい体で臨むことになったが、気分は一日目よりも高揚していた。

そしてその日のライブの幕が上がる。

昨日同様物凄い圧迫感だった。位置としては一日目よりも少々前方の位置を確保する。ただ前に背が高い人がいて、首を伸ばさなければステージの様子は伺えなかったが、それでも時折垣間見えるステージだけで百合絵には十分だった。

SEが終わり、一曲目は激しいアップテンポの曲から始まる。昨日のライブでは三四曲目に演奏されたはずだ。百合絵は幾分冷静な

気持ちで見れるようになっていたのかもしれない。

だが、二日目のライブの衝撃は一日目を遙かに上回るものだとも思った。世界観が更に深くなり、その世界の深遠部まで埋没していく。

鬼神だ。そう感じたのも錯覚ではなかったと確信する。そして、鬼神でもあり、大いなる揺り籠の様でもあると思った。鬼子母神、と言うのを聞いたことがあったが、それから連想した、という訳ではない。無意識にそれを考えていた可能性はあるが、何故か懐かしく、心地良く感じてしまったからである。

私はこれを知っている、そう思った。

メンバーは全員男性だし、普通なら母性というものは感じないのかもしれない。しかし、彼からの発する世界が例えるなら胎内であるかのように感じたのである。

事実これはきつと胎内なのだ。

自分がそう感じたのなら、これは自分にとって胎内に他ならない。胎児だった頃の記憶がそう感じているのではなく、もっと原始的な記憶から喚起された感覚がそう感じているのだと思った。百合絵個人、では無く、生命としての最初の記憶だ。

百合絵はそう思い至って身震いする。

人口密度は凄まじく、人々の蒸気で天井の方は靄が掛かった様になっていた。水分と言う水分が全て搾り取られた様で、喉もひりつくようだし物凄く暑いが、背筋が冷えたのだ。恐怖、では無い、歓喜で、である。

「流石に昨日今日で疲れちゃったね。私もここまで激しいと思ってなかったから二日連続でも大丈夫だろうとか思ってたんだけどきついね」

明日バイト大丈夫かなあ、と真美は上を向いてぼやいている。化粧もすっかり落ちているし、髪も汗でぐったりとしていたが十分綺麗な顔だった。

一日だけでも相当に体力を疲弊させたが、回復しきらない体での

二日目は更に堪えた様だ。余韻に浸っていたかったが、体がついていかない。

私なんて真美より体力も無いし、慣れてないからもう結構限界、と弱音を吐くと真美は私も、と言って笑った。

「そういえば今日は音が昨日より良くなってたね。まあ昨日のステージはこの会場での初日だったしPAさんも慣れたんだろうね」

PAと言うのは確か音響管理をしている人の事だ。百合絵が感じた差はそのせいもあったのだろう。

「確かに音が大きくなってた気がする。昨日よりも引き込まれる感じがしたもん。お客さんの興奮も更にヒートアップしてるって感じで…もう死ぬかと思った」

「確かにねえ。多分昨日来てた人も多いと思うんだけど、よく元気残ってるなあって感心しちゃうよ」

だよね、と答えて二人で笑った。二人とも満身創痍といった感じだったが妙に心は清清しかった。

真美は如何思っているんだろう　百合絵はふと気になった。あのライブで百合絵が感じた様に真美も感じたのだろうか。それともあれは百合絵だけに見えた世界なのだろうか。気になったが、結局その日の帰りも在り来たりな感想を語るだけで聞けなかった。鬼神だとか胎内だとか上手く説明する術が無かったし、言葉にしたらなんだか違うものになってしまう気がしたからだ。

百合絵は他のライブというのを知らないし、若しかしたらこういう世界観を持つているバンドも珍しく無いのではないかと思った。だが、比較出来るものが無いと不安　正しく今の自分がそれだと思ひ至りげんなりとした気分になる。

そもそも基準と言うのは曖昧模糊とした物だし、それこそ状況や個人の価値観で変わってしまう。そんなものに知らず知らずに依存している自分が嫌だった。最も今の百合絵には自分の本質すら良く分からなくなっているのだから、比較する対象を幾ら知ったところで自分の中で基準を定めることは出来ないのだろうとも思う。

だったら 見たまま感じたままのみ考えるしかない。ライブ中に確信したようにあれは紛れも無い真実なのだ。少なくとも今迄あんなはつきりした気持ちを百合絵の中に与えてくれたものは無かった。きつとあれは百合絵の本質が表層に引き出された瞬間でもあり、あの時の自分が本来の自分だったのだのではないだろうか。

頭の中でロジックを組み立てて行く。百合絵は不安だった。どんな時間が経って、ライブの時の感覚が薄れて行き、ただの錯覚となってしまう事が。論理立てて考えればそれは記憶の引き出しに分かりやすい情報として整理され、感覚が薄れても情報が補ってくれる。

このロジックを立てて行くことは百合絵の癖でもあった。辛うじて自分を自分として留めて置くための蘇生装置である。

だけど多分、こんなことをしなくともあの衝撃も心地良さの記憶もずつと残っているだろうとも思った。若しかしたらそれに取り憑かれてしまうのを恐れたからこそ、それを論理立てたのかもしれない。そうすれば理性的な自分が感情的な自分を抑えてくれるだろうからだ。

二日経って、漸く身体に残っていた鈍重な痛みは無くなったが、あの感覚だけは鮮明に残っていた。そして知りたいと思った。あのバンドの事をもっと知りたい、と。

だが一定の距離感を保っておきたい気持ちもあった。百合絵は所詮彼らも人間なのだと分かっているからだ。崇高な印象を持っているのならそのままにしておきたい。

近づけばそれだけ色々な事が見えてくるだろうし、目を背けたくなるような部分も少なからずあるはずだ。長所があれば短所もあると言うのは仕方の無い事だろうし、それが在るからこそその個性でもあるのだと思うが、それでも絶対的なものには憧れを抱く。百合絵にとってはそのバンドこそがそうなのだ。否、あのバンドの世界観と言った方がしっくりくるのかもしれない。

現代であればインターネット上で簡単様々な情報を手に入れるこ



とが出来る。Galley と入力すればすぐに公式ホームページが見つかった。

ホームページはダークな趣で、全体的に黒く、若干見難い箇所もあったが、バンドの雰囲気そのままだ。百合絵は文字を読むのに苦勞しながらも、雰囲気損なわれていない事に安堵した。

プロフィールに軽く目を通し、バンドの経歴、コンセプトのようなものが記されている箇所を見つける。そこにはこう書かれていた。Galleyとはそのままガレー船から取っている。

ガレー船は古代・中世にあった大型の手漕ぎ船である。

多くは奴隷や罪人がその動力として用いられていた。

我らはこの奴隷や罪人と同じでただ命令に従順に主の手足となっているだけである。

我らはただの手段でしかなく、ただそれにあらんとしている。その後も引き続き詳細が書かれていたが、全てはそこに要約されているらしかった。

百合絵は主とは何なのか気になった。ライブの時、全てが一つの構成要素になってあの世界が形成されていたのは確かだった。だが、主と言うのが居るとすればあのヴォーカル、レオン以外には考えられない。彼はあの時真実を語っていた。身体全てを使って余すところ無くそれを表現していたと思う。

だが、表現 その言葉に行き着くとふと百合絵は違和感を覚えた。

表現していたのはレオンの内部だと無意識のうちに感じて、それで納得していたが、表現していたものが外部、それもバンドや、はたまた手の届くような所のものではなかったのではないか。レオンやバンドというのは一つの媒体、インターフェースに過ぎなく、その大元となる形状を持たない何かの主なのではないのか。そう考えればなんだか全てが綺麗に収束されていくような感じがした。

私があんな風を感じたのはきつとその主の姿を垣間見たからなんだ 百合絵は興奮気味にそう思った。

論理立てて考えていたことがなんだか馬鹿らしくなる。そんな事をするまでも無く当然の心の動き、謂わば本能でそう感じたのである。本能は最初からそうプログラミングされているのだから。

だがきつとそれに気付くか気付かないか、はたまた気付いてもそれを錯覚としてしまうかは人によるのであろう。百合絵は運良くそれに気付く事ができた。

本能、つまり己の本質である。

百合絵は何度も心の中でそれを繰り返し噛み締めた。そして揺ぎ無くなる迄続けた。

そうして百合絵は世間を軽蔑するようになった。

個人として人々を見ていけばその中には尊敬出来る人物等もいたのだが、世間と言う大きな枠で考えると全てが軽蔑の対象となった。そして自分でさえも軽蔑した。世間の一部となっていることが耐え難かった。

ここから抜け出す事は不可能である。それ故にやり場の無い焦燥感や苛立ちを如何したら良いのか戸惑った。

全てが内面に渦巻く。そして益々世間が嫌になる。まるで悪循環と言つ他なかった。

だが、一度それと気付いてしまつては後戻り出来ない。気付かぬうちは不条理な現実もなんて事は無いのに、気付いた途端それは暴君のように不穏分子を排除しようと荒れ狂う。

百合絵はそう、暗黙のルールを敵に回してしまつた。

それでも表面上は普段と変わらぬ生活を送つていた。一寸前から殆ど引き籠もりのようだったからそれがただ継続しているだけだ。

詰まるところ折り合いをつけていくしかないのだと分かつていたからそれ以外は如何しようもない。ユイスマンスの描くデ・ゼッサントのように山奥で隠遁するだけの財産など無いし、何か変えようと思つてもたかが知れている。

ただ唯一の現実逃避として小説を読み漁るようになった。Gale yの曲も全て聴いたが、やはりライブでなければあの感覚を味

わえる事は無かったから始終聴いている訳ではない。

それに引き換え小説は始終読んでいた。食事さえ取らずに日長一日読んでいる時さえあった。昔から本を読むのは好きであったが、月で言えば二三冊と言ったところで特別好きと言う程でもなかったから、大きな差である。

そして今は特に力ファを好んで読んでいた。描かれた不条理な世界に眉を顰めつつも何時の間か主人公と自分を同一化してしまっているのである。自分自身を遙か頭上からもう一人の無感動な自分が見下ろしている感覚に囚われた。そして反発しつつもそれは己の認めたくない部分だということに気付いたのである。

これは自分で自分の傷を無神経に抉っていく作業と言えるのかも知れない。そう考えると荒療治に違いなかったが、そうすることで百合絵は何とか現在の自分との折り合いを付ける事が出来ていたのだ。

活字に溺れ、思考に塗れて、外に発散する術も持たずに半月程が過ぎた。

久々に外の空気を思い切り纏いたくなり、日も暮れてから散歩に出かけた。散歩と言っても近所の公園位しか思い浮かばず、街頭がぼつぼつと点る狭い道を通って辿り着く。

小さな児童公園に、既に子供たちの姿は無く閑散としていた。公園内には街頭が申し訳程度に一本立って居るが殆ど意味を成していない。隅々には闇が巣くっていた。

その闇に埋もれるように設置してあるベンチに腰を掛ける。

既に秋の気配も色濃くなってきたこの時期は日が沈むと途端に寒さが増す。ベンチはひんやりとした湿り気のような冷気を纏い、百合絵の身体の熱も奪われた。

闇の中から街頭の明かりに目を遣る。その明かりはやけに白々しく見え、遮るように掌を翳してみた。手の甲は真っ黒だった。

両手を翳すと左手の方が歪だった。中指の第二関節が左に肥大している。

暫く眺めた後、持ってきた本を一冊膝の上に置いてみた。暗くて読めないだろうことは分かっていたが、何となく持つてきてしまったのだ。カフカの『城』の文庫本である。

これもまた未完で終わっている作品なのだが、何となくそれがこの作品には正しいように思われた。未完であるから当たり前なのかも知れないが、何とも宙ぶらりんな状態で話は終わる。最初はそれに酷く反発心を覚えた。自分はこうならない、と。でも良く考えてみればそれが当然の事にも思えた。人生の最後などこんなものではないのだろうか。

物語の終盤には何か劇的な出来事が起こるか、何らかの解決がなされる物だと思っただが、人生と言う物語にはそんな事等滅多に起こる訳ではないだろう。第一自決でもしない限り死ぬ時等分らないのだから何か起こしたくても起こせないのが普通だ。

何か事故に合うとか殺されるとかしても、確かにそれは悲劇的で一種劇的ではあるかも知れぬが、本人にとっては何とも宙ぶらりんな状態の結末だ。本当に一瞬の出来事であったのなら終わった事にすら気付かないで結末が与えられてしまう。

百合絵は生まれ変わりだとか極楽浄土だとかは信じていなかったが、結局死んでみなければ実際の所は分からないと思っているからその時を半ば楽しみにして待っている。そして百合絵は魂が完全に消滅してしまう結末をどこかで望んでもいた。すっぱり終わりになった方がいい。また意識を持つて生まれ変わったり、魂だけで彷徨うなんて考えて見れば気が遠くなりそうな話だと思っただ。

だからこそ前世の記憶は忘れているんだ、なんていう説も出来たのだと思っただが、それを採用するならばそれは同じ魂が永遠に輪廻している訳であり、忘れていたとしても、なんだか気持ちが悪いと思っただ。自分も今そうやって存在しているのかと思うと嫌悪で鳥肌が立つ。その結末が真実だったら、目に見えぬ粒子の一片にまで恨みを抱きそうだ。

そこまで考えるて延々と続きそうな堂々巡りを半ば強引に断ち切

る。気分を害するだけだと思ったかだ。

百合絵は何か考え事をする度に話がどんどん形而上学的な方向に逸れていってしまうのを自覚していた。時にはそれで己の卑小さを知り、一種諦めにも似た気持ちで現状の不満を受け入れられ、精神衛生の向上を図るにも効果的だ。だが、それによって何の解決にもならないと酷く落ち込む場合もある。今日の場合は断然後者の様だった。

何とはなしに天を仰ぐ。夜空ではゆつくりと雲が移動していた。

天気が悪い、という訳ではないがやけに雲の多い夜だと思った。

百合絵はこういう空が好きだ。満点の星空と言うのも良いが、雲が多い晴れた空というのも何とも言えぬ安らぎを百合絵に与えてくれる。

ずっと眺めていると身体が一個の空洞になってしまったかのように感じるのだ。雲と一緒に中身は全部浚われてしまったかのような感覚。

元素だ、と思った。元素に還元されてしまった気になれる。思考を持たず、ただ世界の構成物質の一つ。流れるままにあり、意味等知らずにただ在る。そう考えると心が益々透明になった。

百合絵の体は自然に固まってそのまま固定される。瞬きや呼吸もゆつくりになっていくような気がした。

どれくらいそうしていただろうか。すっかり芯から身体は冷えてしまっていた。いつの間にか寒さにやられて身体の活動能力が低下し、動けなくなっていただけなのかもしれない。

掌を擦り合わせる。片栗粉の感触がした。

なんだか百合絵は細胞の気持ちがあった様な気になった。自分の中にもある細胞だ。常々百合絵は細胞を不思議だと思っていた。自分の身体の中で生まれて死んでいくのに全然痛くも痒くもない。それが不思議だった。皮膚も無理矢理剥がせば痛い、自然に剥けていくのは何ともない。何故なのか百合絵には不思議で溜まらない。それは細胞の気持ちがあった様な気になっている今も変わらない。

かったが、それでもただ細胞は在るだけなんだと分かった。

きつと細胞は無感覚なんだ。プラスチックや硝子球と同じだ、と思った。

辺りは闇が濃くなっている。逆に百合絵の闇は綺麗に晴れていた。きつとここに吸い込まれてしまったんだろうと思ってみる。そうしたら益々気分が良くなって、文庫本を持つとベンチから腰を上げて岐路に着いた。

また闇を溜め込んだらここに来よう。百合絵はそう思って心なしか柔らかくなった顔の筋肉で薄っすら笑みを形作る。懐かしい感覚だった。

そして無性にGalleyのライブに行きたくなったのである。

強固な門に果てしなく続いているような白い塀。掛かっている表札も立派な物で『西方』と随分達筆な字で掛けられている。例えるなら映画で見る武家屋敷といった感じだった。

門は見た目通りの重厚な面持ちで左右に開き、石畳が屋敷の玄関まで続いている。左右に広がる庭園には白い小石が敷き詰められ、大小様々な石がぽつぽつと置かれていた。

松のような木が端の方に控えめに立っているが所謂これは石庭という奴なのだろう。義文はその独特の雰囲気からダリを連想した。何となく似ている。ダリのあの不可思議な世界に何処か通じている物を感じた。温度が感じられない、と言ったら良いのだろうか。そういうところが同じだと思った。

前を行く人物の背中に視線を転じる。

ラフな淡いグレーのカットソーに白い細身のスラックス、真っ黒な髪の毛をさらさらと揺らして歩く様子はなんとも軽快に見えた。

義文はこの人物　那葵もまたこの庭と同じだと思った。ただ庭を見たからそう思ったのかもしれないが、簡単にどんな風景にも馴染んでしまう、否、その風景を侵食していると言った方が正しいのだろうか　そんな風に思えた。

天上天下唯我独尊という言葉は正しくこの人物を表すに相応しい。そして那葵自身は毛程も意識していないのだろう。義文には全く捉えどころが無い人物であった。

とは言うものの那葵と知り合ってから一週間程しか経っていない。それがまるまる卵蔓庵で働いている期間でもあるから、ほぼ毎日顔を合わせている計算にはなるが、まだまだ知らない事の方が多いのは当たり前なのかもしれない。

今日は那葵の自宅だという屋敷を訪れている。

殆ど那葵はあの卵蔓庵の建物内で生活しているような感じだった

が、所謂セカンドハウスのような物だったらしい。訪問の理由は卵蔓庵で働き始める切っ掛けとなった事と同じだった。つまり自宅にあるがらくた、基コレクションの整理の為、である。休日返上で借り出されたようなものだったが、那葵の自宅はどうなっているのか好奇心もあり承諾した。だが、例え断つても同じ事になっていただろう。屋敷内は外観を裏切ることなく随分立派な造りだった。時代がかっていいるが、古臭いという感じではなく、それが一個の威厳となつてこの建物は存在していた。

義文には今まで縁のない世界だったから興味津々で辺りを見回してしまふ。まさかこれ程の屋敷に住んでいるとは思わなかった。

道楽で店をやっている辺り、それなりの家柄の出なのだろうと想像はしていたが、それでも精々少し立派な一軒家というくらいの自宅を想像していたのだ。義文の常識ではそれが限界である。そうそうこんな立派な屋敷に住む人間と出会う訳がないと思っていたからだ。

屋敷の中は清浄な空気が張っているという感じで余計な物音は一切聞こえない。黒光りする廊下を微かに軋ませる足音が響くのみだ。

那葵の話では常時十人程屋敷内には居るとの事だったが、そんな気配は無い。それにこの屋敷に十人しか居ないというのは義文の感覚にすれば勿体無い、と言える。これくらいの広さがあれば旅館としても機能しそうだ。

「はい、ここだよ」

広いと言つてもそれ程入組んだ造りでは無い筈だが、那葵の部屋に辿り着くともう玄関がどちらの方向だか分からなくなっていた。あれこれ感心して眺め歩いていた為だろう。

襖を開くとそこには一面、卵蔓庵にあるのと同様の雑多な物達で埋め尽くされていた。辛うじて足の踏み場が作られている、と言つた有様である。

中には絵画骨董品の類もあったし、相当に高価な物ではないかと思われるような物も混じっていたが、足元に転がる首の壊れかけた



薄汚い人形やそういうがらくた類と同じ様な扱いをされていた。

「うはあ」

心の中の何とも言えぬ虚脱感がつい口をついた。

「これ全部倉庫に移すんだ。軽く纏めて運んでくれれば良いよ」

那葵は柔らかい笑みで何でもないように口にするが、全て片付けるのにどれ程の時間が掛かる事が 考えただけで気が遠くなりそうだった。

それでも手を付けなければ始まらない。わかりました、とだけ答えて入り口部分にしゃがみ込み、品物を物色し始めた。

那葵の方はすいすいとがらくたの間を滑るように進んで行き、奥にある窓を開けてその棧に腰を掛け、手の届く範囲のがらくたを取ると楽しそうに眺め始めた。何時もの事ではあるが、片付ける気があるのかどうか疑わしくなってしまう。

義文は黙々と作業を進め、二三時間程掛けて何とか三分の一程を一人で整理したのである。細々した物はダンボールに積み、大分運び出し易くなった。那葵の方も適当に見ているだけの様で、何となく周囲は分別しているようである。

「那葵さん、帰ってらしたんですね」

ふと背後から声が掛かる。義文は開け放った障子に背を向けて居たから、反射的に振り向いた。

そこには落ち着いた物柔らかな声に相応しい、涼しげな顔の男が立っていた。着流しがまた様になっていて、普段から和服を着慣れているのだと一目で分かる。

それにしても声を発するまでに気配が分からなかった。

「ああ、こちらは 長坂さんですか？初めまして。私はこの家の当主と言った所でしょうか、西政伸と申します。今日はわざわざお越し頂いたのに挨拶が遅れまして申し訳御座いません」

政伸は間抜けにもぽかんとただ見上げているだけの義文に、一瞬目を細め思い出すようにしてから酷く丁寧な調子で話しかけてきた。如何して名前を知っているのだろう、と一瞬訝しんだのは那葵は

人の事を話すとかそういう事をしないような気がしたからだ。だが、別段話していても可笑しくはない。

「あつ、いえ、私も挨拶もなく上がりこんでしまつて・・・」

慌てて居住まいを正すとしどろもどろになりながらも中途半端な挨拶をした。顔が赤くなっているのが分かる。義文は今更ながら、本当であれば真つ先に自分の方からこの屋敷の主に挨拶に行かなければならなかったのではないだろうかと思つたのだ。何となく那葵の調子に侵されて義文の常識が狂つていたのかもしれない。

何となく居心地が悪くなり那葵の方を見やると、相変らずがらくたを眺めているようで、義文の様子など全く気にした風もなかった。「那葵さん。そろそろ昼時ですしお食事でも如何ですか？」

再度言葉を掛けられると那葵はああ、そうだね、と言つて漸く顔を上げた。

ふと義文は疑問を感じた。政伸が当主であるのに那葵の方がまるで当主の様な態度であるからだ。勿論その態度は何時もの那葵と寸分変わるところも無く、そういった面から見れば至極当たり前ではあつたのだが、政伸は少なく見ても那葵よりは年上に見えたとし、当主が敬語なのに対して那葵がそうではないという事は不思議にも思ふだろう。親子程歳が離れている訳でもなく、政伸は落ち着いていゝるから若干上に見えていたとしても精々三十代前半といったところだ。余り似ているとは思えなかつたが兄弟、と考えれば納得は出来る。

そこまで考えて那葵の年齢を知らない事にも気付く。義文の方が政伸より、年齢は近い気がするがそれすらよく分からない。特に気にする事も無いと思つていたが急に気になった。

ただ、今この状況で聞くのは憚られ、取り合えず義文の中では歳の離れた兄弟という結論を出したことで落ち着いて。政伸の敬語もただの癖で、誰に対してでもそうなのだろう。

政伸を筆頭に三人は連なつてがらくた部屋を後にした。意識すると確かに空腹を感じる。何か冷たい飲み物も欲しかった。

通された部屋は広い座敷だった。欄間には円形の飾り窓が設えてあり、床の間には大小の山々が描かれた水墨画が掛けられ、その前には一輪の彼岸花が生けられていた。静寂な風景に彼岸花の赤はやかに鮮やかに映え、青磁の透明感を持った色合いとも対照的でそれぞれの特質を増長し合っている。義文は慣れない景色ながら、何処かに懐かしさの様な安らぎの様な空気を感じ取った。

勧められるまま座布団に腰を下ろすとまもなくして膳が運ばれてきた。若い女性が二人、如何にも優雅な仕草で義文に向かって挨拶を済ませると膳を整え始める。義文は膳で食事をする機会などは早々あるはずもなく、挨拶をされても頭を下げて姓名を告げる事くらいしか出来なかったし、準備されている間、どうして良いのか分からずに一人戸惑い乍俯いていた。

それでも好奇心から上目遣いで様子を伺う。政伸は威風堂々といった感じで座っているし、那葵はすっかり寛いだ様子で遠くを見ていた。どんな時でもこの人物には如何という事は無いらしい。寛いでいるにも拘らずだらしない感じも受けない。義文は恐縮するばかりだが二人にとっては日常的な事なのだろう。

膳を用意してくれている二人は永松という姓の姉妹との事だった。姉は小枝子、妹は結衣香と言うらしい。小枝子は二十歳を越えた位だろうが、妹は二三歳下だろう。二人とも雰囲気は違うが顔の造作が似ていた。どちらにしても相当な美人には変わりなく、姉は少し気の強そうな顔の造りで、妹はあどけなさを残した柔らかい印象だった。

準備は物の五分と掛からなかったが、その間殆ど必要な物音以外は立つことも無く、義文には随分長い時間に感じられた。姉妹は支度を終わると一礼して部屋を出て行ったので幾分気が楽にはなったが、慣れない作法に義文の神経は休まる事が無かった。その様子を見て取った政伸が楽にして食べて下さい、と声を掛けてきたが、そう簡単にリラックス出来るものでもなかった。

那葵は気紛れに箸を動かし特に作法も何も関係ない様子で食べて

いる。そんな那葵を少々羨ましく感じながら、曖昧に返事を返すと、極力上品に食べる事を心掛けながら全てを平らげた。美味しかったが恐らく半分程しか味わえなかったのではないだろうかと思う。

昼食の後のお茶も済ませ、片付けの続きの為に座敷を後にしようとしたところ、丁度また一人の人物が現れる。那葵の背中越しに見たその姿に義文は暫く惚けたようになった。

その男は理想的な八頭身でモデルのように手足が長く、狐を思わせる顔をしていた。薄茶の髪が顔を包み優男風の雰囲気ではあるが、背は高く骨格もしっかりしているから細身でもひ弱な印象は無い。

そしてやたらと金属を身につけていた。両耳にはずらりとピアスが並び、左眉にも二つ並びで金属が埋め込まれている。どれも十四ゲージを超える大きさで大きい物だと小指くらいは入ってしまうのではないかと思われた。首筋には精緻なうろこ模様のタトゥも入っている。

義文には普段中々見ないようなタイプの人間であり、全くこの男の容貌に馴染まない純和風な屋敷という場所柄も手伝って、義文を驚かせるに十分な効果を発揮した。

「那葵さんお久しぶりです。片付けをしていると伺ったので私も手伝おうと思ひましてね」

微笑むと一層眦が上がり狐顔の印象が強くなる。外見とは裏腹に話し方には品があり、所作も洗練されていた。よくよく見ると服装もラフではあるが趣味が良く上品に纏められており、義文はそのギヤップにも面食らってしまう。

「おお、久しぶりだね要。最近店に顔出さないけどバンドが忙しかいかい？」

那葵は変わらぬ様子で親しげに答えている。バンドをやっているとの事だったが、確かにそう言われればバンドマンといった風貌かもしれない。装飾品の数々を差し引いても雰囲気も華やか、というか人目を惹く感じではある。最もこの屋敷で出会う人物は皆、人目を惹かずにはいれない魅力があったが、なんと云うか大勢に見られ

ていることに慣れているような雰囲気があった。

「まあそうですね。忙しいと言えば忙しいですが、そろそろ本業も再開しますよ」

那葵にそう答えると、そちらは　　と言って義文の方に視線を転じる。また目を細められた。

「長坂義文さんですね。成る程　　。私は河上要と申します。バンド　　と言っても然程有名ではないのでご存じないかも知れませんがGalleeyと言うバンドでベースを担当させて頂いております。卯蔓庵にはよく伺うので今後もお会いする機会があるかと思っていますので宜しく願います」

言葉遣いも声の調子も慇懃なそれで、腰を折る姿や微笑みを湛える様子も見る者に好感を与える。何が成る程なのか義文に意味を推し量る事は出来なかったが、Galleeyと言うバンドは知っていた。

確かに頻繁にメディアに露出する事も無いから知らない人も多いかもしれないが、学生時代の友人に熱狂的なファンが何人かいたので曲をともに聴いたことがない義文でもそれなりに情報を持っている。確か海外でも活躍しており、有名と言えば有名なバンドである。

そんな人物に名前を覚えていたというのは些か面映い心地だった。如何やら義文の名前は那葵の周囲には割りと広まっているらしい。何故だろう、とは思ったが差した意味が思い当たるはずもなく深く考えるのを止めた。

義文は政伸に挨拶した時の様にどもりながら挨拶を返す。今日は挨拶してばかりだが、一向に慣れることは無い。

那葵の周囲には変わった人物が多いと思う。先日会った臣広という画家の青年にしても、この屋敷内で会った人々にしても何処か浮世離れしている。那葵自身が浮世離れしているような存在で、類は友を呼ぶとも言出し、タイプは違えど自然とそういう人達が集まってしまうのかもしれない。義文は至って平凡だと自覚しているだけ

に戸惑う事も多いが、知らない世界に触れる事は楽しくもあつた。ついこの間までぎすぎすとした空間で事務的な毎日を送っていた事を考えると、まるで天と地程の差がある。

政伸とはそこで別れ、今度は要を伴つてがらくた部屋へと移つた。一人加わつただけでも相当に仕事は早くなる。何より要の動きには無駄が無く、何でもてきぱきとこなしてしまつたから尚更だ。感心しながらその様子を眺め、義文も倣つて手を動かす。自然と会話もなくなつたが、那葵は相変わらずだし、初対面の要と話すような話題が特にある訳でもなく、忙しくしている事は義文にとって楽だつた。

日暮れ前に部屋は片付き、倉庫にも全ての物を運び終えていた。その倉庫というのは所謂蔵のような物で、開け放つた瞬間にかび臭いような古臭い匂いが鼻をついた。中は広く、手前の方には恐らく那葵が集めたと思われる品々が入つたダンボールだとかもあつたが、大層な桐の箱だとか値打ちを感じられるような品々が暇なく並べられていた。

倉庫であれ蔵であれ、物を仕舞つておく場所なのだから雑然とした感じは否めないが、それでもそこは一個の趣が感じられる。中に居るとそのまま蔵のもつと奥深い所まで引き擦り込まれそんな錯覚を起こさせた。

がらくたがあつた部屋は畳の色が多少変色している部分があつたけれども、すっかり綺麗になり、見ているだけで仕事を達成した充足感が沸いてくる。少しだけ、今まで在つた物が無くなつて寒々とした印象も受けた。だが、如何やら那葵の収集癖のお陰でまたこの部屋は物で一杯になるとの話を要より聞き、何だが安心したような脱力したような気持ちになる。折角片付けてもきりが無い、そう一人溜息をつく、その意味を察知したのか要は笑つていた。

仕事を終えて一息吐いていると昼に膳を運んできた小枝子がお茶を運んでくる。何となく一日過ごしてこの屋敷にも慣れたような気分になつていたが、このような持て成しに慣れていない義文は又も

や戸惑ってしまった。

お疲れ様ですと労いの言葉を掛けてくれる小枝子になんと答えたものか困惑して、いや、慣れました、と苦笑して見せると小枝子も笑みを漏らした。ずっと無表情に給仕をしてくれるだけだったからその表情の変化に義文は些か驚いた。笑うと眇められた瞳が琥珀色の光を帯び、なんだか妖艶である。

「おや、珍しいですね、小枝子さんが男性に微笑みかけるなんて」  
要は面白がっている様に茶々を入れた。長い足を持て余した様に畳に投げ出し今しがた注がれた熱いコーヒーを飲んでいる。

「それではまるで私が冷血漢の様じゃない？私は貴方程冷たくはない」

随分砕けた調子の物言いである。この屋敷に来てからずっと敬語ばかり聞いてきたせいかな義文はなんだか不思議に感じた。とは言え不自然という訳ではなく、その会話は何時もの事なのだろうと思われる気安さがある。

皆何かしらこの屋敷、引いては那葵に関わりがあり、付き合いも深いのだろうと思われた。

「ふふふ、確かにそうかもしれませんがね。小枝子さんは余程慈悲深いお方です」

含みを持たせた笑いは要の雰囲気によく似合っている。その後思いついたかのように元の表情に戻ると世貴はまだ寝ているのかと尋ねた。義文は初めて聞く名だった。那葵の名前も変わっているがこのヨキという響きも聞き慣れない。

「もう起きた　ああ世貴」

答え終わる前にふとその名前の主が現れたらしく、小枝子は廊下の方を見やる。そこには義文から見れば外人にしか見えない風貌の青年が一人。無表情ではあるがかなりの美青年で、甘い面構えから発せられる雰囲気は柔らかく無機質である。

そつえばどこかで　と義文は何となくその顔を見たことがある気がした。

「那葵が来ていると聞いてきた」

発せられた言葉は外見を裏切つて流暢な日本語だった。表情を変えずそつけなく言うとは無造作に座り込む。

「世貴、久しぶりだね。寝る子は育つなあ」

那葵はそう言つて漸く棧から降りると世貴の前までつかつかと歩み寄り頭を乱暴な仕草で撫で、少し離れた位置に腰を落ち着けた。

義文はその仕草に驚いたが、本人や他の者は至つて変わらずにそれを受け入れている。どういう関係なのだろうと疑問を持つと同時にそこで唐突に世貴が誰だったのかに思い至つた。

「ああ！ Galleryのヴォーカルか！」

思わず声に出してしまふとあつさり要が、そうだよと答える。

「でも確か外国の方じゃなかったですか？ヨキつて名前つて余り聞きませんけど　日本の方なんですよね？」

素つ頓狂な声を上げてしまつた事に後悔の念が押し寄せ、それを紛らわすかの様に言葉を繋ぐ。だが、実際すぐ念頭に上がった疑問だったから、意外にも自然な調子になった。

「世界の世に貴族の貴つて書くのですよ。この家の跡取りという事になっていきますから勿論国籍は日本ですね」

無口らしい世貴に代わつてこれにも要が説明をくれた。跡取りとの事だったが、当主の政伸とは全く似ていないし、親子程の歳の差もない。ハーフとも考えたが、瞳が青いという事から如何やらそれも無さそうである。

何か事情があるのかもしれない。それ以上突っ込んで聞くのも憚られて、そうなんですか、と義文は曖昧に返事を返した。

改めて世貴を見る。やはり華があると思った。バンドのフロントマンであるからそれなりの存在感と言うものが必要だとは思つが、無口にも拘らずこれだけの存在感を出せるというのは凄いと思う。否、無口だと言う所もそのオーラを保つために一役買っているのかもしれない。

苦心して世貴が饒舌な姿を思い描いてみたが、それではなんだが



興醒めしてしまうような気がした。

義文は改めて自分の周りに座っている四人を控えめに眺めてみた。皆タイプこそ違うが何か一貫した迫力のようなものを備えている。また、皆が皆浮世離れしている。それこそこの日に焼けた畳の上という妙に現実感のある景色とは違和感を覚える程だが、その違和感でさえも四人の圧倒的な雰囲気飲み込まれ有耶無耶になっている気もした。

一番親しみを覚えるのは今も饒舌に小枝子と離している要だった。が、その親しみ易さも表面上だけのような気がしてきていた。

那葵や世貴に比べれば小枝子も余程親しみやすかったが、それでも異性という壁がある為か如何も義文は馴染めない。先程見た妖艶な表情にも一因があるのかもしれないが、義文にとって女性とは不可侵な生き物であった。

全く異なる生物、一種神聖なものという気さえしていた。

その先入観があるから、ただ単に異性だからというだけではなく、自分等では決して推し量る事が出来ない、という諦めにも似た気持ち。大きな隔たりとなってしまうているのかもしれない。

少し冷めたコーヒーを深みのある湯飲みのようなカップで啜る。とても会話に入っていくこと等出来そうもなかったし、眺めていた方が良くも思った。最も話しているのは要と小枝子が殆どで、たまに思いついた様に那葵が噛み合わない合の手を入れるだけだ。しかし、それも別段可笑しいと言う事はなく、当たり前のように要と小枝子もそれに答えている。

世貴は入ってきて以来一言も発せず、那葵の方を注視しているようだった。始め義文は那葵と世貴は何となく似ていると思ったのだが、思った程似ていないのかも知れないと思う。何処かしら共通点はあるのに違ふ。乱暴な言い方をすれば那葵は躁病の気があり、世貴は鬱病と言う感じである。

実際その様子からそのような感情の起伏は全く読み取れないし、二人に共通して無感動、無頓着、無機質という印象があるのだが、

敢えて分類するとその様な差なのかと思つたのだ。

また、皆の様子を眺めていると今まで検討をつけてきた年齢が違ふような気がしてきた。整つた顔というのは得てして一種の迫力が出てくるものであるし、それが年齢不詳の印象にも繋がる。世貴に關して言えばまるきり白色人種にしか見えなかつたし、日本人である義文には始めから実年齢の判断が付け難かつたところもあるが、それでも那葵と同じ位、若しくは少し下くらいだと思つていた。しかし、那葵の年齢すら目算でしかなかつた訳だし、その目算にすら自信が持てなくなつてくると全てが混沌としてくる。

果たして目の前のこの人物たちは本当に存在するのだろうか、若しかしたら自分はずっと眠つていて全てが夢の中で作り出された虚像でしかないのではないだろうか、そんな考えがふと頭の中を支配する。

その不安の影は自覺した途端益々大きくなり、目に見える景色を浸食しゆらゆらと大きな影絵のように襖や畳、障子の上を旋回した。眩暈がする。意識が遠のく感覚。だけど何故か心地良くもあつた。外見上はなんら変化もない自分自身の姿がやけに白々しく見えた。実際の光景である訳もないのだが、それが頭の中で作り出された映像なのか、自分自身の目で見た視覚情報から寄るものなのか義文には判断がつかない。

ぐるぐると回る陰の中に、はつきりした輪郭を持った人の姿が四つ浮かび上がる。まるでオブジェのようだ。冷たい大理石で作られた美しく硬質なオブジェである。義文は芸術に造詣が深い訳でもなかつたが、この四つのオブジェは傑作であると確信した。

そしてそれを思う存分に鑑賞出来ている自分自身を酷く幸福だと思つた。

大量の血液が胸に流れてきて、そこが信じられない程熱く膨れていく気がした。そして得体の知れない熱風のような物が暴れ回っている。自分の内部からずたずたにされている様な感覚だった。しかしその痛みは何故か心地良い。酷く感覚が冴え渡っているのに何処

か鈍感になってしまっているような不思議な感覚だ。

現実が齎す白昼夢。

既に日は暮れようとしている。

辺りは赤紫色から青紫色に移り変わり、何時からか薫っていた桃の匂いが一層熟したものに変わっていく。じゅくじゅくとも思考も熟れていく。

小枝子が夕食の準備の為に立ち上がるまで義文はそんな具合だった。万事元に戻る時、ちっぽけな器に全てが収まっていく様な感覚を味わう。なんだか物足りなく、酷くがっかりした。

だが、それも一瞬の事。義文は直ぐに現実世界の人間的常識を取り戻し、夕食を丁重に辞退する。とてもそこまで手数をかける訳にはいかないと判断しての行動だったのだが、そのまま屋敷に留まっていたはもう日常生活に戻れなくなるのではないかという無意識の懸念もあったのかもしれない。

屋敷の中の空気は清浄だし、何ら変わった性質の物ではない。それでもそこは何か独特の魔力のような物が渦巻いている様な気がした。魔力とは言っても毒々しい物でもなければ怪しげな物でもない。それでも上手い言葉がなく、義文の貧困なボキャブラリーの中では魔力と言う他ないような気がした。

玄関まで見送りに出てくれた要に改めて挨拶をすると、意識して呼吸をゆっくりとしながら門まで歩く。石の庭は昼間見た時よりもずっと生き生きしているような気がする。知らず鳥肌が立った。

けれど門を出れば意外な程にあっさりと慣れ親しんだ夜が広がっているだけだった。内側に込められていた空気は門の外側に漏れ出すと言う事はないらしい。

空を見上げると綺麗な朧月夜だった。輪郭を空に溶け込ませた雲がゆっくりと風に流されている。然程寒くもないのに吐き出す息は微かに白かった。

最後に見た要の瞳も琥珀色の光を湛えて笑んでいたのを一瞬思いだす。だが、もう桃の香りも消えうせ、焦げた木の匂いが脳をちく

ちくと刺激した。

景色が急激に青白んできている。黒だったものが藍色、青に、そして徐々に水で薄めたようになっていくが、代わりに埋もれていた色達は徐々に本来の色を濃くしていた。

「冷えますね。特にこういう時間帯は視覚的にも寒い気持ちになります」

冷えると言いながら全く寒そうな気配も見せずに男は悠然と微笑んでいる。

一体何処を見ているのか。

視線の先に確かに自分が居るのだと分かっていたが、自分であって自分でないもの、否、自分も知らない自分の本質的な部分を見ている様な気がしている。

「私はこういう雰囲気好きです」

百合絵はぼつりとそれだけ漏らす。朝日が出る前の一寸した時間はまるで時が止まってしまったような錯覚を起こさせる。特に人通りもない塀に囲まれた路地を歩いているから尚更そう思った。

「私も嫌いではないですよ」

一層笑んだ顔で男 要は笑った。細くなつた目元は猫のようだ。元々百合絵はこの要に対してそういう印象を持っていたからかもしれない。要は Gallery のベースストである。細身の身体を撓らせたプレイスタイル等から猫の様だと勝手に思っていた。

「あの、やっぱりこんな時間にお邪魔してしまうのは迷惑にはならないですか？」

百合絵は急にその想いが強くなり立ち止まった。

朝日は完全に顔を出したらしい。辺りはすっかり黄ばんでいる。

「いえ、問題ないですよ。それにこんな時間の方が良いのでしょうか。でももし嫌になったと言うのなら止めておきましょうか？」

嫌になつた訳ではない。寧ろ切実に『卵蔓庵』という店に行きた

いと願っている。だが、百合絵の常識がそれに理性の歯止めを効かせている。始めは勢いが勝っていてそれ程気にならなかった事になり始めた。要はそれを見越しているのだろう。百合絵を氣遣う素振りを見せても実際一度決めた予定を覆すつもりは無さそうだった。そして百合絵は要の言葉に妙な安心感を得てしまう。何故か説得力があるのだ。外見とは裏腹の優雅な物腰に慇懃な口調がそう思わせるのかもしれない。

わかりました、とだけ答えて止まっていた足を前に踏み出す。先程と全く変わらぬ様子で。

百合絵が何故 Gallery のメンバーである要と連れ立っているのかと言うと、殆ど偶然の成り行きに過ぎなかった。とはいえ、憧れのバンドのメンバーとこうして連れ立って歩いている事は百合絵にとって正に奇跡的な出来事に違いない。

大学の友人に誘われて行ったクラブでのことだ。雰囲気有余り百合絵の肌とは合わず、一人仲間から外れてカクテルを舐めていたら、丁度隣に寄り掛かった人物が要だった。

だが、その時は嬉しいハプニング、位の心地でいた。自分の好きな有名人だったとはいえ、偶然有名人と街中で出くわす、なんて話は良く聞くからだ。

百合絵はぼんやり遠くを見ていたのだが、要の存在は人目を惹く。自然と隣の人物の顔を伺ってしまっていた。

要はピアスやタトゥ等でも実際本人だと分かりやすいし、人間達ということもないだろう。その割に Gallery のベーシストと気付く人は居なかったようだ。メディアには滅多に露出しないし、写真でさえ暗くて分かり難い物が多い。フロントマンであれば気付かれたのかもしれないが、余程ファンでもなければ他のメンバーまで見てはいないのかもしれない。

確信した百合絵はつい衝動的に声を掛けてしまっていた。考えるより先に口が動くという事は百合絵にとっては珍しい事ではあったが、深く考えたところで良い言葉が出る訳が無い。寧ろ変に意識し

ていたら碌に言葉として発音されなかったのではないかと思う。声を掛けてから要が答えてくれる一瞬の間が酷く居た堪れなくはなかったが、結果的には良かったという事なのだろう。

要は突然声を掛けた百合絵を訝しがることもなく、につこり微笑んで丁寧な仕草で受答えをしてくれる。百合絵はそんな仕草に安心しつつもどぎまぎしながら会話を続けた。クラブの中で流れる爆音の渦はライブに比べれば静かなもので会話がままならない程ではない。多少大きな声で話さなければ成らなかったが、多少の酔いも手伝って直ぐに慣れてしまう。

話しているうちにぎこちなさも徐々になくなっていき、様々な話をする事が出来た。主に Gallery に関係する事だったが、途中からは百合絵自身の考えも交えながら語られていたし、そういう意味ではファンとアーティストという関係だけには留まらなかったのかもしれない。

レオンの話になった時、彼の一番尊敬している人物を本当か冗談か分からぬ口調で教えてもらった。それが卵蔓庵の店主だった。

その店については話を聞くだけでは良く分からなかった。

店主の名前は那葵といい、薄暗い店内に彼の収集物が壁一面飾られてある。分かったのはその程度である。

だが、要曰くきつと百合絵は気に入るだろうとの事だった。百合絵も何故かそんな気がしていた。無性にその店へ行きたくなってしまった。

そしてその心情は素直に言葉として漏れ出ていたらしい。要は一層深い笑みを浮かべてその意を汲んでくれたのだった。

クラブを辞したのはそれからすぐ後の事で、百合絵は友達に先に帰る旨だけ伝えたと要と一緒に深夜の街を歩いた。要にも当然連れが居るのだろうと思ったのだが、そんなそぶりもなく、気にしなくて良いと言われた。百合絵にはミュージシャンの付き合い等分からなかったからそういうのも常なのかも知れないと思い直す。

暫くはぶらぶらと深夜の街を徘徊した。勿論卵蔓庵に向かってい

たのだが、それなりの距離であるにも関わらず車を拾うことはなかった。どちらとも言わなかったが、二人ともそういう気分であつたらしい。もしくは百合絵の気分を要は察して合わせてくれただけなのかもしれない。

どれくらいそうして歩いていただろうか　空が白み始めるまで二人はほぼ無言だった。それでもその無言は心地良いものだった。「さあ、ここですよ」

如何やら目的の場所に着いたらしい。目の前の建物には確かに『卯蔓庵』の看板が掲げられていた。随分古めかしい建物である。

黄ばんだ景色に、全体的に焦げ茶色の建物だけが浮いて見えた。

「もう開店されているんですか？」

百合絵はドアに掛けられている開店の札を見て不思議に思う。まさかこんな時間から営業しているとは思えなかったからだ。二十四時間営業でもあるまいし

「ああ、この店は何時も開店中です。主不在でも開店中なんですけどね」

成る程　この店の主人、那葵という人物は相当に大雑把な性格なのだろう。店が始終開店中になつていても一向に困る事がないらしい。確かにこういった店であれば常識を持って尋ねても無駄かもしれない。

入りましよう、と促がされ、要が開けたドアはすんなりと開いた。当然の様に鍵も掛かっていないらしい。

後に続いて店内に踏み入れると当たりは薄暗かった。まるで夜に逆戻りしてしまったかのような具合で、橙色の間接照明だけが仄かに辺りを照らしている。

店内の様子は確かに不思議なものだったが、事前に聞いていたから驚くというよりは納得した。

ただ、日が昇っていて地下でないにも関わらずここまで暗いものだとは思わなかった。こういう薄暗さや古臭い調度品に囲まれた雰囲気というのは、昨今流行のバーなどを思い浮かべればそれ程物珍



しくもないのかもしれないが、ここは故意にやった演出というより、自然に出来上がった産物のような感じである。

また、店であるのに店足らしめる機能が欠如していた。その点では多少驚きにも似た感情があつたのは確かである。ただ店として見なければ何処にも違和感がないように思えた。全てが一つになってその空間を構成している、そんな感じた。

要は少し待っていて下さい、と言うといきなり部屋の床の一部分を持ち上げて中に入って行ってしまう。そんな場所に地下室があるとは思わなかったからかなり驚いた。

一人残された百合絵は店の中を改めて見回す。本当にぎつしりといった感じで品物が並べてあり、雑多ではあるものの、これだけあると寧ろ壯観、といった感じでもある。更に壁際に寄つてよく見ると、並ぶ様々な品は百合絵にとつて興味をそそられる類の物であることが分かり、益々面白くなった。

薄暗い照明と相まってそれらは不思議な魅力を発しているようだった。もしこの店から持ち出して白日の下に晒したのならば、途端にそれらは不思議な魔力を失ってしまうのではないだろうか　百合絵は何となくそう確信した。

暫くするといきなり下の方から声が聞こえた。夢中になっていたのか床の扉が開いたのには気付かなかつたらしい。否、若しかしたら要が入った時に開けっ放しになっていたのか

「お客と言うのは君か！成る程　ようこそ卵蔓庵へ」

声に驚いて振り返るとそこには恐ろしく綺麗な人物が一人顔を出していた。薄暗くとも良く分かる。正にそこだけ光が点っているかのような美しさだった。

百合絵は目を見張る。一瞬心臓が止まってしまったようになった。

「初めまして」

何ともそつけない声音になってしまったと言ってから思う。

百合絵は他に挨拶らしい言葉を全く考えられなかった。その一言でさえも単なる反射で出たようなものだったし、その後に言葉は続

かない。元々口数が多い方ではないから思考力が奪われた今、口が動かないのも当然の事だ。

「こちらが那葵さんです。そして、こちらが今お話した百合絵さんです」

地下から出てきた二人は百合絵の前に立ち、要がそれぞれの間で丁寧な紹介をする。何時見ても動作に品があると思っていたが、今は尚更慇懃に見えた。

百合絵は幾らか思考能力を回復させて、紹介と共に軽く会釈をする。少し上目遣いになってしまったのは自分でもみっともないと思っただが、どうしても那葵が気になってしまったのだ。

那葵は綺麗に微笑んでいる。

百合絵は暫くまじまじと那葵の微笑に見入ってしまった。きっとこの人物はきつと何時もこんな顔をしているのだろうと思った。怒りもしなければ悲しみもしない。無表情でもきつとその表情は柔らかいのだろう。

百合絵は数時間卵蔓庵に滞在したが、那葵に対する印象は変わらなかった。全てを包み込むような雰囲気。だが、よく考えてみると要も似たようなところがある。確かに外見も違えば口調も違うが、何処か共通したところがある。那葵と一緒に居るからそう見えるのかとも思った。

「百合絵はここを気に入ってくれたかな？」

ふと那葵がそんな事を尋ねてくる。店の中に簡易でお茶の席を設け、三人はゆったりと寛ぎながらコーヒーを飲んでいた。

百合絵は最初こそ戸惑った部分もあったが、不思議とすぐ雰囲気馴染む事が出来てしまった。

「ええ、とても不思議な感じですけど何処か懐かしいと言うか安らげる感じがします」

前の会話との脈絡はなかったが、これが那葵のリズムなのだと百合絵も分かるようになってきており、特に変にも思わず答えた。

「大体皆さんこのがらくたの山に面喰らっていかれるんですよ。那

葵さんの収集癖には感心してしまいます。これ以外にもまだまだあるんですからね」

要は笑いながら言う。確かに百合絵も少し面食らった部分もあるからその気持ちは分からないでもない。しかもこれ以上、とはどの程度の量なのか分からなかったが、恐らく少なくともこの倍以上はあるものと思われた。確かにそれは感心するしかないだろう。

「僕は自分の気に入った物は身近に置いておきたいんだ」

那葵は高張るとかそんな事情は如何でも良いらしい。

「なんだか羨ましいです。そんな風に好きな物をとことん追い求められるのって」

百合絵はつい思ったままの事を口にしてしまう。それだけ那葵の顔が素晴らしく充実感を持っている様に見えたからだ。

「でも百合絵さんはGalleeyに関してあんなに熱心にお話して下さったじゃないですか。私はあの時の貴方はとても生き生きとしていて素晴らしかったと思ってますけど」

それを聞いて百合絵は顔を赤らめた。確かに熱く語ってしまった自覚はあるし、全部本当に思っていたことだ。だが、それを本人から改めて口に出されると羞恥が込み上げる。

「確かに私はGalleeyを素晴らしいと思いますし、本当に好きなバンドだと言えますが、所詮私は一リスナーに過ぎないし、それを作り出せているのは要さん達な訳ですし」

言い訳がましく口にした言葉はなんだか自分でも良く分からなくなってきた。最後は尻窄みになってしまった。照れ隠しの様に温くなつたコーヒーを啜る。

「僕はただあるがままを分かりやすく表現しているに過ぎません。ですが、それを受け取る側がその表現を如何取るかは分からないのです。凡その共通認識を与えられたとしても、やはり個体差がありますからね。全く湾曲しない、という事は不可能でしょう。百合絵さんはそれでも私達の認識と大分近いように感じました。それは別に良い事でも悪い事でもないのですが私はそれで貴方に興味を持つ

た。そして、貴方も同じように感じられたから Gallery に興味を持ったのでしょう。那藝さんも同じ理由で『好きな物をとことん追い求めている』んですよ。だからそういう意味では貴方が羨ましいと思うものは既に手に入っているんです」

要の説明は確かにそう言われればそうなのかもしれないという説得力を持っていた。だが、何故だろうか。百合絵是那藝に対してなんともそれだけでは説明出来ないような羨望の感情を抱いていた。「上手く言葉に出来ませんが、私は何物にも縛られないような那藝さんが羨ましいのかもしれませんが。私は自分の本質と言うのが何時の間にか分からなくなってしまうって。那藝さんは凄く自分というものを持っていらっしゃる様な感じがします。性別とか年齢とかそういう根本的な原則の枠からも解き放たれている様な。そんな感じです。私はそういう常識から解き放たれたいと思っている。まるで空想家の夢だと笑われてしまいかも知れませんが、そんな事を考えては幸福な気持ちに浸り、現実とのギャップに落胆するんです」

百合絵は考えている時の癖で自分の指先をじっと見つめながら言葉にする。言い終わった後も自分の言葉が足りないような、他にも言いたい事がある様な気がしてそのまま指先を見ていた。

「何物にも縛られたくない。それは気持ち一つで何とでもなる様でいて中々難しいものです。若し完全に縛られない状態というのがあるとすれば他の動物と同じに生きるしかない。この国ではまず、戸籍が無い人間なんて存在しませんからね。居てもやはり戸籍を求めてしまう。それはその方が都合がいい社会のシステムになっているからだし、実際無数の人間が暮らしていく以上規則というものも必要になってきますから。普段、そんな事は当たり前で気にもならないでしょうが、一度その息苦しさに気付いてしまえばそれは時折酷くわずらわしい物にもなります。如何しようも無い現実があり、その中で生きて行く為には我慢して上手く折り合いをつけるしかないんです。命を絶てば或いは救いには成るかもしれない。それでも

生まれてきたのには何らかの意味もあるんです。例えば一生を極平凡に過ごしたとしても、その人の知らない所で確実に意味が存在している。その意味を見つけられればきつと貴方はそんな迷いを抱かなくなるでしょう。例えばそれが仮初だとしても良いんです。真実である必要は無い。しかしその人個人にとっての真実と言うものは存在する。他人にとって真実だからと言ってもその人には真実とならない場合の方が遥かに多い」

「百合絵はもし君が望んでいる世界を手に入れたのなら如何する？本当に何物にも縛られない世界だ」

百合絵は那葵を見返す。那葵は変わらずに微笑んでいる。百合絵は静かに視線を落とすとその世界をもう一度考えてみた。

「私は若し今の世界が一変してしまうのだとしたら素晴らしい事だと思います。だけどそれは本当に叶う事がないと思っっているからそう感じるのかも知れません。結局は空想の世界から抜け出せないんです。理想論ばかり追い求めてデメリットには頭が回らない。夢を叶えた人間が抜け殻のようになってしまふ、なんて話を聞きますし、私もそうなってしまふのかもしれない」

「そうだね。そうなってしまう人間も居るだろう。だけど、自分の真実を見つけていればそんな風にはならないよ。人間と言うのはね、隷属する生き物なんだ。隷属するものが無ければ途端に不安になる。ただ、隷属するものがあるにも関わらず不安に陥ってしまうのは隷属する相手もまた人間だからだ。若しくは人間が作り出したもの、だね。勿論それが人間であつたとしても盲目的に、例えば神だと信じればそれはそれで本人は救われるんだ。本人が神足りると思える程の確証があればそこに不安はなくなる。宗教、秘密結社等もそれに当たるだろう。よく過激な新興宗教なんかは信者をマインドコントロールしていると非難されたりもするが、それはそれで良いのかもしれない。僕はそういうの好みではないけれども、本人がその状態に満足しているのなら口を挟みたくはない。それから科学者等もそうと言えるかな。一つの事を信じ探求していく様は一種神を信じる

行為と同じだからね。これもよく論理的観点から非難を受ける場合もあるが、それは価値観の相違であるだけだ。だが先人は公に数え切れない殺し合いをしている訳であるし、それは現在にだってある。カニバリズムでさえ今は野蛮で文明的でないと意味嫌われているが、近世代極身近に存在していたんだ。現在それを闇雲に非難している人々も辿つていけば過去に人肉嗜好をしていた祖先にもぶつかるといふ程にね。現在も菓子等で人型を模した物や顔が描かれている物もあるだろう？それらは潜在的なカニバリズムの欲求を表しているのではないかと考えられなくは無いんじゃないかな。言葉でも『食べてしまいたい程可愛い』なんて言うでしょ？言葉が生まれるのには何かしらの意味があるものだから、文字通りそういうことがあったのかもしれない。最も、死者を弔うと言う意味で、その死者と親しかつた者がその肉を食らうと言う風習がある地域は存在したんだけどね」

そこで那葵は、ああ、話が少しずれてしまった、と笑った。

「まあ兎に角そういうった根源的な欲求には目を背けたくなる醜悪と考えられるものも多分に含まれていて、人間を隷属する生き物とすることもこれに含まれるだろうってことだね。必ず何かに隷属している。そうしなければ生きていけないんだ。さっき、隷属するものがあるにも関わらず不安に陥ってしまう場合を話したけど、これは隷属しているとまず気がついていない場合、忘れている場合が多い。気が付いて、それを重要な因子だと見極めれば世の中はもっとシンプルになる筈だよ。それこそ百合絵の理想とする世界に近づくだろう。だが、この意識を広めるのは容易ではないはずだし、可能だとしても数十年、数百年の単位で見なければならぬだろう。そここそ劇的な事が無ければ無理なのかもしれない」

躍起になつて変えなければならぬ理由もないし、そうするつもりなんて毛頭ないんだけどね、と又もや那葵は笑った。

確かにこんな意識改革を行った所でメリットは無さそうだし、一部そういう思想を持った者だけが喜ぶだけだと思う。それにそうす

る事は価値観の押し付けでしかないような気もするし、そんな事は那葵も望むところではないのだろう。また、百合絵の望む所からもずれてしまう。理想を目指し、過程でそれを覆すような事をしているとは元も子も無いのだ。

ただ、誰もが認める絶対的な存在があったら如何なのだろう。否、そんなものは存在しない。宇宙は膨張し続けているし、自然も形を変える。絶対的な存在は不変でなければいけない。それは存在し得ない存在なのだ。

形而上学的観念に突き当たって終わりだ。

百合絵はそう思い至ると酷く疲れてしまった。きつと、那葵もそのことに関してはきつと全て承知の上なのだろう。

だが、百合絵とは違って全く変わらぬ素振りである。きつと那葵は落胆等しないのだろう。要もきつとそうだ。全てが在るがまま、流されるように彼らは存在しているのだと思った。自分もそうなれたらどんなに良いだろうか。そう考えては見たものの、彼らの境地等理解する事は出来ず、ただただ、深淵へ落ちて行く様な気持ちを味わっていた。

そんな百合絵の心内とは裏腹に、また一人の人物が床下から上ってきた。

「那葵さん来客中失礼します。私はそろそろ帰らせて頂こうと思ひまして」

明朗快活とした声だった。真つ黒な髪の毛はアシンメトリになっており、左は短く刈り込まれ、右は前下がりに長くなっている。だが、それが良く似合っており、一重瞼の涼しげな面持ちの青年だった。要同様タトゥやピアスで装飾している。百合絵には何というのか分からなかったが、手の甲に円形に浮き出た異物と分かる物も恐らくアートの意味合いを持っているのだろう。

良く見ると綺麗に残った傷跡もいくつか見受けられた。ただ肌を露出しているのは鎖骨から上と手だけであるからはつきりとは分からない。

この人物の登場の為か、百合絵の果てしなく下向していた気持ち  
は一旦リセットされた。

「では一緒に帰りましょうか宗之さん。百合絵さんは如何なさいま  
す？」

要がそれを引き取ると宗之と呼ばれる人物は軽く頷いた。百合絵  
も夜は眠っていないし、確かにそろそろ辞した方が良さだろうと思  
う。私も帰ります、とそれに同意した。

「じゃあ、また何時でも着たら良いよ。僕は太抵居るし、歓迎する  
よ」

那葵は最後に百合絵にそう言うと言つと店内に客人を残したまま地下に  
潜って行った。とことん自由な気質の人だと思う。三人でそれを見  
送ると後は無言で卵蔓庵を出た。もう日は大分昇っていて随分と眩  
しく感じられた。



「お早う御座います」

薄暗い場所でのこの挨拶に初めのうちは違和感を覚えていたものの、半月近く同じ行為を繰り返せばいい加減それも無くなってしまう。

「お早う御座います」

那葵は大抵地下室に居るので、店先で挨拶をする事は稀だったが、今日は人影が見えたからすぐに声を掛けた。

だが、答えた主是那葵ではない。まず那葵ならば気の抜けた生返事が返ってくるのが常である。

明るい場所から暗い場所へ入ってくるからすぐには目も慣れないし、大体のシルエットしか分からない。まさか那葵以外の人物が居るとは思って居なかったが、その声が臣広であることに気付き納得した。

「嘉山さん　ですよ。暗いから一瞬分からなかったです。那葵さんは居ないんですか？」

那葵とは随分親密な付き合いがある様だし、まだ大分早い時間帯ではあったが別段居て不思議という訳でもないだろう。一度だけではあるが義文とも面識があるから事情は何となく飲み込めた。

「那葵は下で片付けだそうです。すぐ終わると言われて待っているんですけどかれこれ一時間位経ちましたから忘れられているのかもしれないですね」

臣広は笑っているが、一時間はすぐ終わる、の範疇を越えているだろうと思う。二人が旧知の間柄であるのを知っているから良いよなもの、知らなかったのなら、如何対処して良いのか分らず狼狽していたはずである。

だが幾ら旧知とは言え、笑って済ませる臣広も待たせる那葵も一般的な常識では推し量る事は出来ない。那葵やその周囲にも大分慣

れたつもりだったが、こういう場合はつくづく感心し、呆れる。最も、義文自身、このペースに巻き込まれて現在に至っているのだ。そう思うと微かに苦笑が漏れてくる。

義文は下に行くついでに声を掛けてくる旨を伝えと、床下へ降りていく。床下へは急な階段を下りなければならぬ。これも最初は暗いのも手伝って足元が覚束無かったが、今は慣れたものである。床下の空間は中々に広く、地下室と言った方がしっくり来るのかもしれない。長身の部類に入る義文が立つても十分にゆとりがある。だが店に比べれば天井が低いのに代わりは無く、穴倉のような印象を抱かせる。また、床下には幾つか部屋もあり、蟻の巣の様でもあった。

義文は何時ものように丁度店の下にある部屋で荷物を置くと、トンネルのような廊下に出た。

廊下の両端には広めの部屋があり、左右対になるよう六つの小ぶりの部屋が配置されているという造りである。そしてこの小ぶりの部屋は四つが倉庫の役割を果たしており、一つが給湯室、もう一つがユニットバスになっている。風呂もトイレも裏の余り住居らしくない住居部分にもきちんと備え付けられているが、大抵この物を使っている様だった。

そして那葵は大抵一番奥の部屋に居る。ここは他よりも多少天井が高く造られており、那葵の寝室にもなっていた。

大きな天蓋付きのベッドが中央奥に据えられ、長椅子、それに重厚なローテーブルを挟んで来客用のソファが対になって置かれている。だが、ここに来客を通したのは見た事がない。臣広はここに来たことがあるらしいが、未だ地下に降りてくるのも見た事がなかった。

壁際には棚があり、店の中にあるようながらくたを同じように並べてある。室内は天井や壁、床も含め様々な赤で統一されており、照明も橙色だったから、一步この部屋に踏み込むと全てが赤く染まってしまった様な錯覚に陥る。

義文はこの部屋に入ると脳が麻痺した様に感じる事が間々あり、嫌いな訳ではなかったが、とても生活は出来ないだろうと思う。

「お早う御座います。臣広さんが随分と長くお待ちの様ですけどまだ用は終わらないんですか？」

「ああ・・・」

生返事を返す那葵は長椅子の上に悠々と横になり読書をしていた。随分と装飾が凝った古い本である。普段の気分屋的な気質からはあまり想像できないが、意外にも中々の読書家で日長一日読書に明け暮れているという事も多々あった。余り披露されることも無いが、その知識も豊富なのである。

那葵がよく読んでいる分厚いそれ等は義文にとって辞書の様にか見えないし、見るだけで辟易してしまう種類のものだ。第一ラテン語やフランス語等で書かれた物が一体何の本であるのかすら義文には全く分からないのである。

床下にも同じような本が無造作に散らばっている事から推察するに、大方片付けをしている最中に気になり始め、それに没頭して仕舞った、といったところだろう。那葵にはこういうことがよくあるのだ。

「那葵さん、聴いてますか？もう一時間以上お持ち下さってるみたいですよ」

床に散らばる本を拾い集めながら長椅子の傍まで寄ると幾分声を張り上げて言った。

「ん・・・？ああ、すっかり忘れていた」

どうやら今度は声が届いたようだ。案の定忘れていたらしいが、それでも本を閉じて起き上がった所を見るとすぐに行動してくれるらしい。那葵は一つの事に没頭するとどんな状況でもそれを優先させてしまうような所があるからそれだけでもましと言える。

それにしてもこんな照明の少ない場所によく字が読めるものだと何時もながら義文は呆れてしまった。その癖視力は良いらしく裸眼で全く問題ないというのだから不思議なものである。

「今お茶を持って行きますから上に上がっていて下さい。それに片付けがあるのでしたら私がやっておきますが」

「あー、いいよ、いいよ」

言い掛けたが途中で遮られた。特にする必要は無いらしいがこの店での仕事と言えば片付けくらいなのである。やることは結局変わらない。

那葵は持っていた本を長椅子に放ると独特の軽やかな足取りで部屋を出て行く。

気だるげにしている時でさえこの歩き方は変わらない。足音が無い訳ではないのに、地に足が着いていないのではないかと言う程に重力を感じさせない歩き方をするのだ。それは独特だが綺麗な歩き方だと義文は思う。

那葵の後姿を見送ると、拾った本をテーブルに乗せ、義文も部屋を後にした。

「丁度良かった。義文すぐに出るよ」

お茶を準備をして店に上がると唐突にそう言われた。まだ床下から顔しか出していない。お茶を入れてきたのも無駄になってしまったようだ。

言い終わるや否や那葵は立ち上がり、すぐにでも出掛ける姿勢である。臣広もそれに続くが、こちらは苦笑交じりで肩を竦めている。一応義文を気遣ってくれているという事なのだろうが、状況がよく飲み込めない。

「あの何処に行かれるんですか？店もあるし、私は残っていても構いませんが」

「いや、義文にも居てもらわなくっちゃ困るんだ」

那葵の声や表情は何時もと変わらぬ穏やかなものだったが、義文は何処か含みがあるような気がした。ただ単に錯覚かも知れぬし、自分が必要とされていると言う事は今までの経験上、つまり力仕事があると云う事だとすぐに判ったから、そのせいでそう感じてしまっただけなのかも知れない。

兎にも角にも義文は付いて行くしかないらしい。既にドアに手を掛けている那葵を追って、先程着いたばかりの店を出る事になった。臣広の運転で向かった先は先日訪れた西方邸であった。道中殆ど無言で目的地さえ教えられなかったのだが、途中から大体の方向でここへ向かうだろう事は検討がついた。

「那葵さん、意外にお早かったですね。私はもつとのんびりしてらっしゃるのではと思っていたんですけどね」

玄関先で出迎えてくれたのは要である。今日見ても狐の様な顔だという印象は変わらなかった。

「義文がもう一寸来るのが遅ければ遅くなってたかも知れないけどね」

擦れ違い様にそう声を掛けると那葵は一人でどんどん中に入って行ってしまった。臣広と義文は一応玄関先で儀礼的な挨拶を済ませると、那葵の後を早足で追う。

真っ直ぐに向かった先は先日訪れた那葵のコレクション部屋だった。片付けてそれ程経っていないはずだったが、既に新たな品物がぼつぼつと溜まり始めている。

その中には臣広が描いたあの奇妙な絵も混じっていた。白と黒の油彩画である。なんだかそれは卵蔓庵で見た時とは微妙に異なっているようにも感じた。照明の効果というのは意外に大きいものだしそのせいなのかもしれない。だが

「確かにこれは私の描いた物ですが　あの頃とは違っています」

臣広はそれを瞬きすら忘れたように見入っている。握り締めた拳が微かに震えている様な気さえた。義文は再度その絵を見てみるが臣広が感じているだろう程の変化は見極められなかった。臣広が確かに、と言っているという事は、那葵からこの絵の変化を知らされて見に来たのだろう。つまりそれが目的だったようだが、義文をわざわざ連れてきた意味が無い。それとも何か他に用があったのだろうか　義文は疑問を抱きつつも恐らくそれが妥当な線だろうと

思った。

相変わらず臣広は絵に見入っているし、那葵や要もその様子を伺っている。だが、元より美術的センスが皆無の義文は、絵の変化に關して考える事はすぐに放棄していた。作者である臣広は微細な変化にも聡くなるのかも知れないと思ったが、何故皆がそこまで関心を持つのかがいまいち理解出来ない状況で、ただ今は傍觀者でいる事しか出来ない。

「まるでドリアングレイの肖像のようだね。勿論あれはフィクションだけれども、これは現実だ。しかも目に見える速度でこれは変化を続けているんだよ」

那葵は何時もの顔で絵を眺めながら楽しげに言った。

「現実　これが夢で無い事は私も承知している。夢の様な気もするが、私はこれをどこかで予感してもいた。ただそれはただの錯覚であるべきだったし、その錯覚こそこの絵の価値だった。それが錯覚でなくなつた今、これはその価値を失っている」

臣広の声から動揺は消えていた。握り締められていた指も開かれて、徐々に赤みを取り戻していた。

「僕も分かっていたんだよ。正直に話すと初めて見た瞬間からこの絵は動き始めていた。ただそれはきつと僕にしか分からなかったのだろっね。だって、これは余りにも僕に近いから」

那葵は最初に小さく笑い、その微笑を貼り付けたまま、最後には微かに目を細めたような気がした。

義文は幾ら目を凝らしてみても絵の変化等は分からなかったし、那葵の言っている意味が理解出来なかった。那葵の言葉は何時も何か含みがある様でいて、空っぽの様な感じがする。それに真っ直ぐな言葉の様でいて実は複雑に入れ組んでいるから、義文には真意や意味が分からない事は珍しくない。

臣広も今回はその点で義文と同じ意見を持ったのか、微かに眉を顰めると那葵に向かって口を開きかけたが、言葉になる前に遮られてしまう。

「始め、臣広がこれにタイトルが無いと言っただろう？ 臣広は大抵タイトルをつけないが、この場合それが一番正しいと思ったよ。『裏』と言ったのはね、これが僕の裏だったから。否、ある意味では表だけだね。他にも色々呼び方はあるけど、まあ適当に選んだ訳さ」

その視線は絵を見る訳でも、他の何かを見ている訳でも無く、既に三次元の世界にはない様な気がした。人間は三次元までしか認識出来ないと言うが、きっと那葵にはそれ以上のものが見えているのではないだろうか。那葵の言葉は相変わらず理解出来なかったが、それで良いのだと妙に納得してしまう。人の気持ちを感じる事が出来ないのと同じなのは同じなのだ。人の好みがそれぞれ違う事と同じような事だ。

実際、赤だと思って認識している色を、他人も赤だと言ったからといって、それが自分とその人に見えている赤が全く同じである保証にはならないのだ。また、そういう可能性が絶対に在り得ないと言う事も出来ないだろう。

だから那葵が見ている世界が分からないのは当然である。だが、胸に広がる何とも言えぬ落ち着かなさは何なのだろうか。少なくとも那葵に対しての悪感情ではないが説明することは難しい。

「それはどういう意味だ」

臣広の声は抑えられてはいたが、内心の戸惑いを如実に表している。この状況では無理もない。

「意味って言ってもそのままなんだけどな」

そう言って笑う那葵は相変わらず見る物を惹き付ける魅力を持っている。安心感さえ与えてくれる。

だが、この状況には不自然だろう。幾ら那葵の平素を知っているとはいえ、こんな風にはつきり感じるのは初めてだった。

「分かった。君がそう言うのならそうなのだろう」

一瞬何かを言いかけて止め、結局はそれだけ言々と臣広は肩からふっと力を抜く。それは努めてそうしたのかもしれないが、義文には納得出来なかった。

しかし、義文が口を挟めることでもない。無意識に上げた手を空中に僅か彷徨わせ、そして下ろした。

「彼は？」

那葵は既にこの話は終わったとばかりに話題を変えている。彼とは誰なのだろう　いつもならそう思うところだが、今は臣広の様子の方が気になってしまった。如何思つてあれで納得したのか無性に聞いてみたくなった。

「いえ、まだ戻られていません。昼までには戻りますが」

要がそう答えると二人は部屋を出ていつてしまふ。喉が渴いた、と那葵が言つたからである。勿論義文と臣広にも声を掛けられたが臣広がもう少しここに居ると言つたので義文も残つたのだ。

「あの　一つお聞きしてもいいですか？嘉山さんは那葵さんのあの言葉にどんな意味を見出して納得されたのです？」

無言でじつと絵を見つめている臣広におずおずと声を掛ける。今こんな質問をするのは酷く無遠慮ではないかとも思つたが、聞ける機会はそうそう無いだろうとも思つたのだ。

「意味は分からないですよ。納得もまだ出来ないのかもしれないらしい」

それは一言一言を噛み締めるような話し方だった。

「では何故？」

「私はこれでも絵描きの端くれだ。正直絵に関してはそれ程詳しい訳でもないが、それでも何故絵を描くのか、その気持ちは理解しているつもりです。少なくとも自分が絵を描いている理由は分かっています。　何故描いていると思います？」

臣広は少し考え込むようにしてから唐突に、義文を見てそう問いかけてきた。その表情に先程までの困惑などは感じられない。

「自分の見た世界を伝えたいからでしょうか？」

僅かに考えてからそう答えた。

「そうです。恐らく全ての画家の思いにそれは共通していると思います。私も変わらない。でもその手段が必ずしも絵である必要は



ないと思いませんか？美しい文章でその世界を表現する事も音楽で人々に一つの世界を見せる事だって出来る。才能云々はまた別の問題としてもやろうと思えばどんな手段も用いる事が出来るでしょう。だけど私は絵でしか表現出来ないんです。そしてそれを説明しろと言われても出来る物ではない」

義文はそこでああ、と納得した。つまり言葉では表現出来ないものがあると言いたいのだろう。出来たとしてもそれは何処か変容してしまふ。だから感じるしかないのかもしれない。

臣広と並んでその絵をじつと見つめてみる。やはり何処が変わっているのかは分からなかった。

「既に意味は集約されているということですよね」

全く意味など掴めそうにもなかったが、眺めて気分の変化があったのならそれが意味という事にもなるのだろう。

「どうなのでしょうね。なんだか分からなくなっていました。私が描いた絵だけれど、今はそう言っているのとも良く分からない。最初に込められた意味も変容してしまった。いや、元々意味を込めて描いた訳じゃない、そんな気さえします」

そう言って笑う臣広の顔は困っているようでもあり、清々しさも含んでいるようであり、受けた義文は少々戸惑ってしまう。

「ああ、えっと・・・私にはやはり絵を描く方の感覚は分からないですし、絵を見てその意味を感じ取る、ということもよく分かりません。それでも初めてこの絵を見た時分からないながらも惹きつけられる様な魅力は感じました。強い想い　　というのでしょうか、そういうものがあつたからこそその魅力ではないか、私はそう思います」

自分でも何を言っているのかよく分からなくなる。励ますつもりがあつた訳でもないが、何か言わなければいけないと感じたのだ。ただ言つたことは嘘ではないと思う。

「そう、ですか。そう言われると確かに強い想いは持っていたような気がします。ずっと私の中にあつたビジョンだったのですから。」

ただ完成した、と思ってもそれはそのビジョンとは異なっているようにも感じたんです。そして、那葵のようだと思った。頭の中にあつた時はそれが那葵のようだと感じたことなどなかったんですけどね」

臣広は何処か遠くを見ているようであつた。若しかしたらこの短時間のうちにすっかり意味を見出してしまったのかもしれない。義文がなんと答えたものかと逡巡していると更に臣広が言葉を繋ぐ。「ドリアングレイの肖像は悪行を重ねる毎にその姿を醜くしていってほしいですが、この絵の場合はまるで万華鏡のようだと思いますか？」

そう言つて微笑む姿はまるで新しい価値をその絵に見出したかのようだった。

義文は再度絵を眺めてみる。やはり変化は分からなかった。ただ、この絵の渦がぐるぐると回る様子を想像してみると確かに万華鏡のようだと思う。どこか禍々しくも見えるのにその渦の微細なタッチが美しいと思う。

「きつと本質は何も変わっていないからなのでしょう」

これは那葵に対して、また絵に対して自然に出た言葉であつた。何時の間にか意識の奥底で二つは離れがたく結びついてしまったのかもしれない。

「そろそろ私たちも行きますか。店ではお茶を飲みそびれましたので少々喉が渇きました」

最後にもう一度絵を見つめると、臣広がそう言つて踵を返す。義文もそれに続き、無造作にがらくたに紛れた那葵の『裏』を残し障子を閉めた。

重く軋んだ音を立てる廊下を歩きながら、次見た時は変化が分かるだろうか、そう思つて今見た絵の様子を再度思い浮かべてみたが、既に細部は臆気である。結局義文はその変化に気付くことは出来ないのかもしれない。

臣広の背中を見やる。ぴんと伸びた背中中は凜としている。迷う様

子もなく廊下を歩いていくところから察するに、この家には何度も訪れているのだらうと思われた。

「嘉山さんはこちらにいらっしゃる事も多いんですか？」

何となく黙っているのが嫌になつてその声を掛ける。広い屋敷内では部屋から部屋への移動もそれなりに時間が掛かるのだと、義文は先日西方邸を訪れた際には初めて実感として知った。

「いえ、それ程多くはないですよ。大体は店に赴きますかね。那葵は大抵そちらにいますから。こちらに来るとしたら那葵に連れられて来るくらいのもですよ。それでも那葵はあの通りですから自然と屋敷内の間取りにも詳しくなります」

恐らく義文が考えていたことを察したのだらう。聞かなくともその説明をくれた。

「はあ、そんなものでしょうか。私は先日一度来たきりですが、とても慣れそうにはありませんよ。こういった屋敷自体馴染みがないので」

自分が慣れる日は来るのだろうか、と思うが今迄の経緯を考えればさして時間も掛からないものなのかもしれない。

「ああ、丁度良かった。今宗之さんがいらした所です」

臣広が襖に手を掛けたところで丁度中から開かれる。十中八九義文ならばつかつていただらうと思うが、要は全く慌てた様子もなくそれを避けた。

「彼つて宗之さんの事だったんですか。今迄名前は何度も聴いていたけれどお会いするのは初めて」

不自然に言葉を切った臣広の視線を辿ると、理由を理解する前に義文も同じように息を呑んだ。

「初めまして。宗之です」

すつくと立つて目の前に立たれると更にその驚きは大きくなる。

何故ならそれは義文と瓜二つだったからだ。

それは義文自身がそっくりだと感じる程に似ていた。髪形や服装、体への装飾は義文とは全く異なっているが、それでも鏡でも見てい

るような錯覚に囚われる。

「いや、余りにも長坂さんに似ていたものだから吃驚してしまつて。世の中には他人の空似つてあるけれども、こんなに似ている事もあるんだねえ」

心底吃驚したといった様子ではあつたが、臣広は早々に状況を受け入れてしまつたらしい。興味深そうに二人の顔を見比べた。

「ええ、私も吃驚しました。こんなに似ている方つているんですね」  
義文は少し遅れてそう言った。吃驚はしたが、自分に似ている人物と巡り合える機会など稀有なものだろう。僅かな戸惑いと照れ、嬉しさが緋い交ぜになつた気持ちである。

二人とも僅かに遅れて自らも名乗ると、襖前で立つたままになつていたことに気付き、室内に腰を下ろした。要もそうであるが、宗之も和室には余り馴染まない人物のようである。

「義文に会わせたかつたんだよね。吃驚するだろうと思つて」

那葵はそう言つて笑つた。如何やら義文はこの為だけに連れて来られたらしい。

「那葵さんは本当に人が悪いですよ。いやあ、それにしてもそつくりだ。声まで非常に似ているし、まるで双子のようですね」

要もそう言つて笑っている。

部屋の中にはお茶を運んでいたらしい結衣香もあり、義文と宗之を見遣つて無邪気な顔で笑つていた。こちらも事情は承知していたようである。

「本当ですよ。一瞬ドッペルゲンガーという奴を見たのかと思ひました。でもなんと言つか新鮮でもありますね。私は宗之さんのような格好もした事がないですし、自分の変身した姿を見ていると言つか ああ、こんな風に言つてしまつては失礼ですかね」

確かに自他ともに認める程似てはいるが、今日会つたばかりの相手である。そう明け透けに自分と比較してしまつては失礼だろうと思ひ至る。こんなにも似ている人物に奇妙な縁を感じていたのかもしれない。悪印象は持たれたくなかつた。

「いえ、私もそんな風に思いましたから。少々懐かしい感じもしたくらいです。体を色々弄り始めてから久しいですからね」

宗之は姿、声こそ義文にそっくりであつたが、話し方や表情はまるで違つた。まだ僅かな時間しか共有していないが、その間一貫して無表情であり、声に抑揚すら乏しいのである。

一卵性双生児は育つた環境が違つてもある程度趣味や性格は似ると言うが、他人の空似では当てはまらないのも当然だ。そんな些細な発見を面白いと思いつつも少々寂しくも感じる。

「あの それはスカフィリケーション、インプラントですか？」

その臣広の視線は腕から覗く傷跡と妙に盛り上がった箇所を見ていた。タトウやピアスは分かるがそれ以外は義文の知識にはなく、なんと呼ぶのかは分からなかったが、よく見ると首筋にも明らかに故意に付けられたような模様の傷がある。

「よく知っていますね。若しかして嘉山さんも興味がおありですか？」

答えたのは要だった。狐顔が楽しそうに笑っているように見える。「興味はありますが、自分でやろうとは思いませんね。私は痛いのが苦手ですから」

臣広はそう言つて苦笑した。確かに見るからに痛そうではある。

「これは要さんに施術して頂いたんですよ」

「えっ、要さんがですか？」

宗之の言葉に驚きの声を上げたのは臣広である。義文も驚いたと言えは驚いたのだがいまいち仕組みが理解出来ていない。

「私の本業、ですかね。那葵さんを介してこういった仕事を受け持つてるんです」

それに驚きの声を上げたのは今度は義文だった。

「那葵さん！そんな仕事なさってたんですか？」

「あれ？言つてなかった？仲介屋みたいなことしてるって言つたでしょ」

座卓の上にだらりと伏せていた那葵が幾分顔を上げてそっけなく

答えた。その様子は何を今更、といった感じであるが詳細な事等何一つ聞いていないし、そんな素振りすら見た事がない。

ただ那葵に聴くだけ無駄な気もして溜息を一つ吐くと要に向き直って尋ねる。

「あの、具体的にどんなお仕事なんでしょうか？ 私には馴染みが無くて皆さんのお話もよく飲み込めていません」

正直にそう吐露する。

「無理もないですよ。興味がなければ一生関わる事もないような世界ですからね。まあ、ピアス、タトゥなんかは今時珍しくもないので見れば分かると思いますが、インプラントやスカフィリケーションとなると実践している方も少ないですし、目にする機会は中々ないでしょうね。インプラントは歯科の治療でもその名は聞くことがあると思いますが、この場合はあくまでアートを目的としているんです。治療目的ではなく異物を体内に埋めるという事です。スカフィリケーションも同じで傷で描くアート、といったところでしょうか。メスを使って傷を作ります。こういったものは身体改造として一括りに出来ませんが、他にも様々なものがあります。例えば火傷で模様を描くとか　まあ私は主にピアッシング、タトゥ、インプラントとスカフィリケーションといった施術を行っているのですが」

要の話は確かに興味がなければ一生関わらない世界の話だと思った。怖い物見たさ、というのはあるが、何故そんな事をしたがるのか義文には理解できないし、聞いているだけで体が痒くなる気がする。

「大体分かりました。でもバンドも忙しいでしょうに大変そうですね」

これ以上詳しい説明は余り聞きたくなくてそう話題を逸らす。そんな義文の真意を汲み取ったのか要は微かに苦笑したようだった。「ええ、ですから本業とは言いましたけど、ごく限られた人達にしか行っていないです。那葵さんを介してやってきた人のみを相手にしているんですよ。最近は忙しかったのであまり力を入れられなかつ

たんですけど　どうやらそろそろお客もありそうですから暫くは本業に掛かりきりになるかもしれないですけどね」

細められた目は綺麗な三日月型だと思う。そんな感想を抱いた位で既に要の仕事には余り興味を覚えなくなっていた。

「はあ、では那葵さんの仕事のパートナーといったところなんでしょうかね。でもそう考えると余計に私は、本当に片付け要因として雇われただけって感じがします」

勤め始めてからは片付けしかしていなかったし、他に仕事らしい仕事もあるようには見えなかったのだから今更ではあるのだが些か虚しいような気持ちになった。

「ふふ、そんなこと無いですよ。那葵さんの立派なお世話係をして下さっているとお聞きしています。那葵さんはこちらには気が向いたときにふらりと戻られるくらいですからね。長坂さんのような方がいて下さると安心だと姉と二人で話しておりましたのよ」

それまで成り行きをただ楽しそうに眺めていただけだった結衣香がその声を掛けてくる。澄んだ明るい声は一気に場を華やかにした。「そう言って頂けると励みになります」

義文より年下の女性だが、結衣香の方が余程成熟していると思った。姿や声仕草等はまるで少女のそれだが世間知らずなお嬢様、といった印象は受けない。

「男性嫌いの姉が男性の方を褒める事なんて滅多に御座いませんのよ。もっと自信を持つてもいいくらいですわ。ねえ那葵さん？」

「ああ、あの小枝子が男を褒めるところなんて今まで見た事がないからな。僕もお墨付きをあげるよ。実際義文を雇って良かったって思っているしね。僕の宝物を眺めていられる時間が増えた」

最後は心底嬉しそうな顔で付け加えられる。恐らく最後の一言に那葵の本音が全て詰まっている物と思われた。

「そうですか、それは良かったです・・・」

人の役に立てるというのは嬉しい事だ。だが、那葵が喜ぶのと比例して義文の仕事も増えるという事なのである。心中複雑な気持ち

になつた。



何故涙が出ないのだろう。百合絵は白く昇っていく煙を眺めて不思議に思った。

悲しくない訳がない。遣り切れないような想いもある。だが、自分の感情なのに何処か他人事のようにしか感じられなかった。

真美が死んだ。

正確に言えば殺された。相手は百合絵の知らない人物だった。バイト先の客だったらしい。

真美はバイトでホステスをやっていた。忙しく、何かと金も掛かる服飾の専門学生には都合の良いものだったようである。

百合絵は水商売に偏見はないし、寧ろ相手を楽しませ満足させる仕事だと、それが出来る人を尊敬してもいた。だから真美にこのバイトの話を聞いた時はいろいろな体験談も聴いたのだ。

ただ、この客の話題が出てくることは無かった。もし何かあったのなら愚痴を溢す位はあったのではないだろうか。それとも、百合絵に言う事でも無いと思われたのか。今となっては分からない。

百合絵にとってこの訃報は日常という直線上に余りにも唐突に突き刺さってきた事件と言って良いだろう。

報道された加害者の男の顔は正直百合絵の嫌悪感を刺激するには充分だった。それは殺人を犯した者であるという先入観が余計助長させたのだろうが、所謂生理的に受け付けないと感じるタイプの人間だった。

清潔感が無くべったりと額に張り付いた脂ぎった髪の毛、着用しているのはスーツだったが、それもサイズが合っておらずよれよれというのが見て取れる。

よく真美は愛想良く相手を出来たものだと思う。百合絵なら笑顔を向けようとしてもそれは引きつったものにしかならなかっただろう。

真美は暫く前からその男に気に入られていたらしく、シフトを入れている時はほぼ来店していた程だという。店のオーナーも余り良い印象は持っていなかったらしいが、これといって大きな問題があった訳でもなく、寧ろ普段は静かなもので、特に注意しなければいけない人物とも思っていなかったらしい。

それがこんな事になるなんて　そう言っただけ取材に依っていたオーナーの様子を白々しいと思ってしまったのは百合絵の見方が斜めだからなのだろうか。違うと否定出来ないし、実際こういう事件とは予測出来ないような所からひょっこり起きてしまうものなのかもしれないが、そう思ったところで気持ちは変わらなかった。

火葬場というのはなんだか工場みたいだと思う。

犯行発覚が殺人が行われた翌日。身元が判明したのはそのまた翌日。犯人逮捕がまたまた翌日。結局漸く落ち着いて葬儀を執り行えたのは真美が死んでから一週間以上経ってからだった。

そして今正に真美は灰になっているのだろう。アプリコット色の髪の毛も綺麗にネイルされていた爪も一緒に灰になってしまっている。

なんだか不思議な気持ちでした。

工場と想ったのはただ煙突があるという理由だけではない。内部の様子も随分機械的な流れ作業で、人間だったものを灰に加工している、そんな風にすら思えたからである。

こう思うのは不謹慎なのかもしれない。ただ、それを言うならそう思わせてしまうそのシステムも問題があるのではないだろうか、そんな風に聊かずれたところで思考を働かせた。

死んだら何処に行くんだろう。ぼんやりとそんな事も考えた。

生前の姿をよく知る人がある日突然に死んでしまうと死というもののがぐつと近くに感じられる。しかもそれが正に思いも寄らぬ方向から齎されたのなら尚更だ。

一緒に時間を共有して、お互いの言葉で意思を通わせあったのはついこの間の事だ。一緒にGalleyのライブに行っただけの世界

を一緒に堪能したのも記憶に新しい。それを思うと不思議な感覚は益々強くなる。

あのライブで感じたあの世界が、若しかしたら肉体から開放された世界にあるのではないか　そんな風に考えた。

若しかしたら真美はその世界の住人になれたのかもしれない。

少し羨ましいと思った。

この世界の様々な柵から開放されて真美はきつと無になれたのではないだろうか。意思を持たず、個という観念も無く、ただただあの世界を形作る構成物質の一つになれたのではないだろうか

酷く心が逸った。自分もそこに行きたいと思ったが、死にたい訳じゃない。否、ある意味死にたかったのかもしれないが、酷く前向きな気持ちでそう思うのだ。そこに求めている世界があるのだと。そう思った時の感動はとも言葉で言い表すことは出来ない。そして己の肉体が酷く邪魔に思えた。

不意に宗之と呼ばれた青年の姿を思い出す。

本の僅かに会っただけであつたが、彼には好感を持った。恐らく外見だけなら近寄りがたい部類に入るだろう。世間一般では、その外見が特徴的な場合、自分とは感覚が違つと身構えてしまう部分が少ないからあるからだ。百合絵も勿論例外ではなく、だが、彼の持つている感覚に興味を持った。

ただ、その時はそれだけで、特に今迄深く考ええることもしなかつたのである。それが何故か今になつて彼のことが少し分かつたような氣になつた。

肉体を消滅出来ないのなら少しでも理想に近い形にする。つまりはそういうことなのではないだろうか。結局この世界では実体が全てである。だとしたらその中で最大限理想を表現しようとするのは至極当然な流れのように思える。

それで例え生き難くなつても　きつとそれは些細な問題でしかないのだ。引き換えに理想世界へ近づけるのだから。

羨ましい。

真美も宗之も羨ましい。

百合絵もいつか死ぬ。そしたら真美と同じになれるのかもしれない。だが、そんな何時だか分からない先の事を考えて誤魔化せる欲求ではなかった。かと言って百合絵は宗之のように一步を踏み出すことも出来ない気がした。

覚悟が足りない。所詮甘えなのだ。そう言われてしまうかもしれない。或いは本当にそうなのかもしれない。だがきつと百合絵が宗之のようにしたところできつと満足は出来ないのだとも思うのだ。

答えが出ない。欲求ばかりが募って出口が見えない。苦しかった。何かしないと発狂してしまいそうだ。

だがそんな内側とは裏腹に、表情は固まったように変わらないし、動きも酷く緩慢だった。内側で暴れる濁流をなんとか押さえ込もうとしているのかもしれない。

Galleryのライブに行きたい。

ぽつつとそんな考えが浮かぶ。一度そう思うと、募った欲求は一気にこの明確な形の欲求に取って代わった。

「那葵さんは嫌になつたりなさいませんか？」

西方の屋敷、珍しく那葵が一人で屋敷に戻って来ていた。

「何がだい？」

縁側に腰を掛けて庭と丸い満月を眺めている。気温は随分と低かったが、良く晴れた空に満月はくつきりと姿を見せていた。

「はあ・・・これだもの。私が伺いたい事くらいお見通しでしょうに」

小枝子はそう言って傍らに座った。辺りは真っ暗であるのに月の明かりの為なのか、二人の姿は淡く発光しているようだった。

「そんなこと無いよ。うーん、まあ聞きたいのって僕の趣味のことかな？」

小枝子はそれに白々しい、といったように眉を顰めた。

「そう嫌な顔しないでよ。別にわざと聞き返したわけじゃないよ」

那葵は小さく笑った。小枝子は益々眉を顰めた。

「全く、貴方という人と一緒にいると飽きませんわね」

「気の休まる暇が無い　って言いたいんじゃないの？」

「まあ良くお分かりになりましたね」

小枝子はそこで少し表情から力を抜いた。

「僕はこのコレクションと一緒にだよ。あれは皆から見たらがらくた、なんて思われているけど、僕にとっては宝物なんだよ。もっと言えばがらくたのように見えるからこそ宝物に成り得るってところかな」

「あら、私にも分かりやすいように仰ってくれているのかしら」

小枝子は目をゆっくり細める。那葵は横目でその様子を見やった。「別に他意はないんだけどなあ。がらくたに見えるってことはさあ、完全じゃないって事だと思うの。それが全く機能的ではない、役立たないって物かな。どっか壊れてたり、全く無意味な品だったりさあ、それ無くともいいんじゃない？ 的な、ね」

「まあそうなのでしょうね。だからがらくただと思ったら私は見向きもしませんわ。那葵さんが集めていなかったらがらくたという言葉葉を与えることすらしなかったかも知れませんか」

縁側から下ろした那葵の片足がゆらゆらと揺れている。白いその軌跡が残った。

何かをかき回したのかもしれない。辺りの空気が変わる。

「ふふ、そうだねえ君ならそうだろう。寧ろ近くに僕が居て、君にがらくたと意識させてしまった事は僕のお気に入りのがらくた達にとって災難だったかもしれないねえ」

「否定はしませんわ。それに名前が与えられたことで私の中で少し意識して部分はやはりありますもの。でもそれを言うなら私にとっても災難ですわ。きつとお互いに関わらなければ一番良かったでしょうに」

「うん、でもそれじゃあつまらないとも思わない？ 平和過ぎるのは

ねえつまらないんだよ。少しくらい起伏が無くちゃあ。だから争いは消えないんだと思うよ。だってなくなっちゃったら生きている意味がないってくらいにつまらなくなるだろうからね。これは感情の表れでもあるし、皆が感情を失わない限り争いはなくならないんだよねえ、きつと。そして多分それって本末転倒だと思わない？」

首がかくつと傾げられた。

「確かに分からなくはわらないですわ。だけど、私はそれでも関わりたくなかったわね。つまらなくて平温で怠惰な世界で私は充分に満足出来る。元々そういう存在なのですから」

小枝子はじつと虚空を見つめた。月を眺めているようできて、実は光りの粒子の一粒一粒を観察しているような　そんな目付きである。

「それでも君も独りは嫌なのだろう？君の大事な子供達を手放すつもりはないだろうに」

「独りが嫌なわけではないですわ。ただあの子達は私を必要としている。そして私にとっても似ている存在ですからね。一緒に過ごす事はとても自然な事なのですわ。彼女達は私という本体があって始めて生きているとも言えるのです。私と一緒にいる事は魚が水の中でしか生きられないのと同じくらい当たり前のことなの」

「本当にそうなのかなあ。僕にはよく分からないけれどもね、慈しむという気持ち。恐らく君のそれはそうなのだろう？」

那葵は再び足で闇を掻き回した。白い軌跡が残る。

「さあ、どうなのかしらね。私にも分からないですけど、自然に溢れ出てくるものですから特に名称等必要ない気がします。貴方と同じよ」

小枝子はそこで那葵を見て笑った。暗い赤を乗せた唇が薄く引き延ばされた。

「そうだったねえ。ただ、そんな事すら普段の僕は忘れがちだね。言われて、ああ、そうだと気付く。其れだけ僕は本質を表せているってことかな？いや、そもそも表すというのも僕にはおかしい表現

だね」

那葵はそう言つて笑つた。言葉は何処か台詞めいていた。

「楽しそうですね。でも私は貴方のそんな遊び心が理解できないの。要の前でやられた方がよろしいんではなくて」

「要はどんな話をしても同じ様な態度で　僕としては退屈なんだ。しかも彼は意外にも真面目だからね。下手をすれば僕の仕事を増やされてしまいかねない。僕は遣りたくない事は遣らないけれども、彼の持つてくる仕事は遣らざるを得ないものばかりだ・・・」

那葵は後ろに手を突いて、天を仰ぐと大きな溜め息を吐く。

「要は本当に貴方が遣りたくない事などさせませんわ。いつも貴方が第一ですもの。全て貴方の一番の望みの為にやっているんでしょ。それくらい分かつてらっしゃるくせにわざとらしいですわね」

小枝子はそう言つて呆れる様な仕草で少し笑つた。

「えゝでも、たまに嫌がらせなんじゃないかつて思う時あるのは嘘じゃないんだけどなあ。世貴の事もあるし、まあ仕方ないんだろうけどねえ」

「ああ、そうよ、貴方には世貴もいるじゃないですか。あの子は貴方にとつての私の子供達と同じ様なものではなくて？でも　たつた一人という点では分身といった感じがしら？」

「世貴は別格だよ。分身・・・というよりも一つの僕と言つた方がしっくり来るかな。まあある意味子供のようだとも言えるけど」

そう言つて肩に顔を埋める様にして目を伏せる。

「ふふ、那葵さんにそういう方がいらつしゃつて本当に良かったわ。私、まだ世貴が居なかった時には貴方とは永遠に分かり合えないような気がしていたけど　今はそれが少しだけ共有出来る部分があるかもしれない、そう思っておりますのよ」

「おや、嬉しいねえ。君にそんな風に言われたのは初めてだったんじゃないかな」

「あら、そうでしたか？では少し言い過ぎたかもしれませんわね」  
目を細めて笑う姿は闇夜に青白く、何故か益々くつきりと浮かん

だ。

「あゝああ、やっぱり君はそういう性質だね。まあだからこ僕は面白いと思っっているんだけどさ」

そこで那葵はそのままごろりと横になった。ひんやりした床と那葵はまるで同じ物質のように同じ温度で馴染んでしまう。

「ねえ、君の子供達に一人加えてあげたい子が居るんだ。多分ね、僕なんかより君の方がその子の求めている物を持っていると思うのね」

「まあ、貴方がお勧めするなんて珍しいわね。だけどその目は信用していますから、大歓迎ですわ」

小枝子はそう言いながら軽くその細い顎を手の甲でなぞった。滑らかな動作である。

「そう、良かった。ねえ、もしさあ、義文だったら君は受け入れるかい？」

那葵は一瞬考え込むようなふりをして、何とも面白い事を思いついたというような表情をした。

「長坂さんは無理だと分かっただけでしょう？確かに私も彼の事は珍しく気に入っておりますが、かといって私と同一化出来る方は御座いませんわ。ただ少しまでも、というだけの男性なのですから」

小枝子の瞳は硝子玉のような輝きで持つてその記憶の姿を見ているようだった。

「だよねえ。まあもしも、を想像してみたら面白いなあって思っただ」

「もしも彼が加わったんですか？それでは均衡は崩れてしまいますわ。待つのは分離と壊滅でしょうね」

「本当にそうなるかな？あとさ、もしそうだったとしてもさ、それってそんなに駄目な事だと思う？」

那葵はごろりと体を転がすと上目遣いで小枝子を覗き込んだ。

「また可笑しな事を考えていらして？お願いですから私の事は



そつとしておいて下さいな。先程おつしやっていた方はお預かりしますが・・・それ以上は関わりをお断わりさせて頂きますわ」

聊か呆れたような、うんざりしたというな表情と声音だったが、僅かに困惑も含まれているようだった。

「そう。わかったよ。あゝあつまらないなあ」

そう言いながらも何処か楽しそうな那葵の様子はやはり月夜に、それ自体が発光しているように、はっきりと姿を浮かび上がらせていた。

「那葵さん、そろそろ戻りましょう」

そこに音もなく、まるで闇から生まれた様にして要がやって来る。気配すら感じさせない動きだったが、那葵と小枝子に驚く様子もなかった。

「今日はこつちにいたいんだけど」

「いいえ、駄目です。本日はお戻り頂かなければ。ほら今日は目立ち過ぎます」

要は闇を撫でるようにして、離れた場所から那葵の輪郭をぼかした。微かに歪んだ様な景色に、それでも相変わらず那葵はくつきりとそこに在った。

「要、今日は、ではなく、今日も、の間違いだろう。君はいつもそう言う　世貴は如何したの？」

那葵億劫そうに体を起こすと、仕方がないというように立ち上がった。酷く気だるげであるのに妙に軽い動作でもあった。

「世貴も戻っておりますよ。那葵さんを随分お待ちです」

「そうなの？じゃあ早く行ってあげないと可哀想だね」

那葵の足取りはまるで重力を感じていないかのように軽やかである。実際地面からそれは僅かに浮いているようにさえ見えるほどだった。

「要是那葵の世界が明確に見えているのよね？それはどんな世界なのかしら」

小枝子は那葵の姿を見送りながら何気なく聞いてみた。

「さあ、もしお知りになりたければ Gailey のライブにでもお越し下さい」

要は慇懃な仕草で大きく腰を折る。

「嫌よ。私にはあの音は耐えられませんか」

小枝子の白い眉間に皺が寄る。

「つまりそれが答えですよ。小枝子さんにとっては耐え難く嫌悪する世界。それだけ分かれば充分でしょう」

細い瞳が更に細まり、それは微かに黄色く光った。

「確かにそうね。愚問でしたわ」

「では私もこれで失礼致しますね。小枝子さんも今日は早めに戻られた方が宜しいのではないですか？」

「貴方に言われるまでもないわ」

一度大きく息を吐いた小枝子は、そのままその場から立ち去った。彼女の動いた残像が細かい粒子となって当たりに散らばっていった頃、要は自らも元来た闇へと引き返した。

闇は深く、月は雲に隠れ、発光する物もなく、ただただタールのような重苦しい黒が深く深く辺りを覆う。

「数年前の事です」

宗之は確かそう切り出したのだ。

「もつと昔ではないのですか？」

そう問われると、確かにそうで、何故自分が数年前等と言ってしまったのか不思議に思った。

「そうですね 二十年以上前になるようです。私は老夫婦の家に引き取られました」

「貴方はその時お幾つでした？」

「まだ物心付く前です。まだ一歳にもなっていなかったのかもしれませんが。私の本当の両親の事は一切知りません。顔も勿論覚えておりません」

はつきり言ってしまうと、宗之は本の数ヶ月前迄毎日のように顔を合わせていたにも拘らず育ててくれた老夫婦の顔すらはつきりと思い出せなかった。

「ええ、それは仕方がないでしょう。人の記憶等そんなものです。ですが思い出せない所に確りと記憶されていたりもするのですよ」

そこで相手はにんまりと微笑んだ。

「では、私の持っているビジョンは若しかしたら何処かで実際に見た光景なのでしょうか」

「さあ、どうなのでしょうね。でもそういう事です。その可能性も十分に有り得る。貴方が単に忘れていただけで、確り何処かに刻まれているからこそ貴方にはそのビジョンがとてモリアルに見えているのかもしれない」

「やはりそれが私の求めているものだから見えるのでしょうか。私は両親の顔を思い出そうと思ったこともないし、特に気にした事も無い。だから分からないというのは理解できます。だけれども私は持っているビジョンを求めるような想い等今までに持ったことが無いと思うのです」

「もしそれが記憶する時の想いに関係しているとしたら如何ですか？それで十分説明はつくでしょう」

宗之はそこで、そうか、と妙にすっきりした気持ちになったのを覚えている。

「では私はこのビジョンに突き動かされるままに進んでもいいのですね？」

「さあ、それもどうなのでしょう。私は何も貴方に強制は出来ない。ただアドバイスするのみです。貴方が明確に望めば手は貸しますがね」

爬虫類のような瞳だった。宗之はそれを確りと見据え決意したのだった。

「私は真実を知りたいのです。宜しくお願いします」

ぐっしより汗をかいている。もう随分肌寒い季節になっているというのにこの汗の量は異常である。

唐突に目を覚まし、暗闇の中で大きく息を吐いた。心臓が脈打つ音が耳にまで響いた。

義文は最近こうやって目を覚ます機会が多くなった。前にも全く無かった訳ではないが、ここところやけに多い。かと言って何か特別原因となるような出来事があつた訳でもなく、夢の内容も目を覚ました途端急速に彼方へと遠ざかっていってしまう。

なんなのだろう　夢から覚めたばかりの感覚は酷く過敏で、内容は忘れていくというのにそれは長く尾を引いた。普段気になりもしない暗闇が酷く恐ろしいものを感じたり、肌に触れている布団の感触が気色の悪いものでもあるかのように感じる。

金縛りにあっている訳でもなく、手足は動かそうと思えば動かす事も出来るのに、動かすのが酷く恐ろしい事に思えて明かりを付ける事も出来ない。辺りの気配を無意味に探って、普段気にも留めない家鳴りにびくりと体を強張らせる。神経が鋭敏になっていると在りもしない怪異を信じてしまいそうになる。

暗闇の中では時間の経過が早く進む気がする。だから早送りされる周囲と自分との差異が一層そう感じさせているのかもしれない。

どれ位そうしていただろうか。時計を確認した訳ではなかったから分からないが、汗を冷たいと感じられるまになると、神経の高ぶりも大分静まったようだった。暗闇も普段の景色として馴染んでいく。

馬鹿らしい、口に出して言ってみた。そう思いたかったから出た言葉だったのかもしれない。だが、掠れた響きを持つそれを聞くと、本当に滑稽な事に思えてきて、少々愉快な気持ちにさえなった。一種のアトラクションを経験したようなものかもしれないと思ったの

である。こんなに手軽に、しかもたつぷりとリアルに体験出来るのはなんだか皮肉だなとも思った。どんなに金を掛けて工夫を凝らしたアトラクションでもここまでの感覚を与えてくれた事は無いからだ。ただ、あれは一時の虚構だと最初から分かっているからこそ楽しめるのかも知れない。

上だけでも着替えようとベッドから降りたが灯りを点ける気にはなれず、手探りで適当な着替えを選び、着ていたシャツは床に放った。朝になったら洗濯機に放ればいい。そこまで行くのは億劫だった。

夢で何を見たのか、思い出すため記憶の断片を手繰れないだろうかと試みた。だが、必至に思い出そうとして出来るものではなく、ただ、蛇か何か爬虫類らしきものが出てきた事くらいしか分からなかった。義文は特別爬虫類が嫌いな訳ではないが、気持ちが悪いと感じてしまう部分は少なからずあるように思う。例えば夢の中で大量に蠢くそれ等に囲まれたとか、そういう夢だったのなら或いは冷や汗が大量に噴出してしまふ事もあるだろう。だが、多分そんな夢ではないような気もした。かと言って他にどんなシチュエーションがあるだろうか、と思っても早々思い浮かぶものではないから、ただ気がする、というだけで実はそうなのかもしれない。

再び横たえた体で一度だけ寝返りを打った。左を向く。こちらは窓際となっており、今は分厚い遮光カーテンで外界の様子は全く伺えない。それでも僅かに上部から月明かりだろうか　ほんの僅かな灯りが漏れてきている。

そこでふと白夜という言葉が浮かんだ。まず日本人には馴染みがないし、実際に見た事がある人もほんの一握りではないだろうか。だが、知識としてどんな現象かは知っている。夜でも昼間の様に明るい現象を言うのだ。しかし、義文は今、この白夜という言葉を出しながら違う情景を思い浮かべた。その言葉通り白い夜を思い浮かべた。一面に雪が積もった光景に近いかもしれない。月明かりを反射して辺りがきらきらと輝き、青白く全体が発光するような

なんだか白夜という言葉はそれを表したほうが相応しい様に感じる。一面の雪景色というのも義文にはあまり馴染みはなかったが、それでも日が沈まない夜よりは余程馴染み深いからそう思うのかもしれない。

思えばもう直ぐ暦の上では冬である。今年は雪国へ行くのも良いかもしれないと思った。滅多に旅行などしないのだが、雪景色が恋しくなった。学生時代に友人達とスキーに行ったきり、一面に積もった雪というのは見ていない。

誰か一緒に行ってくれるだろうか、そう思ったが心当たりはなかった。一人で行くのは苦ではないのだが、どうもそれでは結局行きそびれてしまう気がした。予め人と予定を立てておけば、気が付いたら春だった、という事態にはならないだろう。

日帰りでは少々辛いだろうから一泊はしたい、と思ったところでふと仕事の事を思い出した。卯蓼庵での休みはあつてないようなものなのである。連休を果たして取れるものなのか疑問に思った。急に呼び出される事もあるし、よっぽどの予定が無い限りは出勤しているのである。行っても片付けをするか、それも無い時はお茶を飲みながらのんびりするのが常なのだが、連休の許可を得られたとしても忘れられて、直ぐに呼び出しをくらいそうな気がした。それは気が気ではない。

それに 事情を話したら那葵も一緒についてきそうだと。

僅かに苦笑が零れる。多分この予想は十中八九間違いないと思われたからだ。それでは旅先でまで仕事をしているのと変わらない状態になりそうだが、那葵なら雪景色を見てどう思うのだろう、そんな事を想像すると一緒に行くのも悪くないと思える。

那葵の集めているがらくたには民芸品も多い。海外の物が大半だったが、日本の物もあり、義文は片付けをしながら見覚えのある品に出会う事も何度かあった。それ等をどうやって入手しているのかは分からないが、若しかしたら那葵は自ら出向いて入手している場合も少なくないのではないかと思った。ふらっと出掛けてしまいそ

うなイメージがある。だとしたら相当に旅行慣れしていそうだし、案外良いスポット等も知っているかもしれない。

そう思い至ると、たった今思い立った旅行案に俄然期待が募った。先程とは全く違った意味で鼓動が逸る。

恐らく那葵が来るとなれば要も一緒ではないだろうかと思った。だが、バンドも忙しいだろうし、そんな暇は無いのかもしれない。先日知った本業というのも詳しくは分からないが、兼業しているとすれば益々忙しいだろう。

そして 宗之という自分そっくりの人物を思い出した。要に施術してもらったのだというその体には無数の印が刻まれていた。あの時はそれ程意識して見なかったが、今思うと一つ一つがやけに印象深く記憶に刻まれている気がする。見えない部分の方が遙かに多かっただろうが、それでもそれ等に明確な意味があったのではないかとあれから少し考えるようになっていた。

自分とあんなにも似ている人間は滅多に居ないだろう。自分で聴くとよく分からないが、声もよく似ているという。だから気になっってしまうというのは極当たり前の事であって、別段可笑しくは無い。ただ、特徴的過ぎる身体的特徴故にこの興味は増徴されていると言つて良いとも思う。今迄全く縁の無かった世界。そんな世界に自分がある。そんな倒錯的なパラレルワールドが交差する瞬間をこの目で見ているような気分になる。また、これは直接本人に会っている時より、義文一人になってじっくり考える時間が出来た時に強く感じてしまう事だった。

とは言え、あれから宗之とは一度卵蔓庵ですれ違ったきりであり、連絡先は勿論宗之がどうやって生活しているのかも分からない。あの身体的装飾ではやはり出来る仕事も限られてくるだろう。卵蔓庵にも義文が知らないだけで頻繁に出入りをしているようだし、若しかしたら那葵や要の仕事を手伝っているのかもしれない。

義文は一応那葵や要の本業というものを凡そ理解したつもりだが、具体的な部分はさっぱり分からない。また、理解したつもりになっ

ているだけで実は全く理解できていないのではないかと思うような事もあった。やはり馴染みのない仕事には変わりないのだからそれも仕方ないのかもしれないが、利用する客はちゃんと理解した上で利用しているのだろうか、疑問を抱かないでもなかった。また客はどうやってあの店の正体を知るのだろうかとも思う。何かしら宣伝をしなければ客は来ないと思うのだが、やはり事情を知った今もそんな素振りを見た事はない。

人づてに広がるという事も考えられるが、だとしたらもう少し繁盛していても可笑しくないのではないだろうか。また、義文が居ない深夜や朝方に集まっているのか、とも考えたがあの店に大勢が集まっているのは想像が出来ないし、相応しくも無いだろう。直接聴いてみれば早いのかも知れぬが、何となく遠慮があった。義文は踏み込んではいけないような 否踏み込みたくないところかと思っているのかもしれない。

とろとろと思考を赴くままに這わせていると空が大分白んできたようだった。部屋の中も薄ぼんやりとした明るさが充満している。鴉が何か喉に詰まったような特有の鳴き声を響かせている。鴉が好きと言う人は少ないだろうが、義文は苦手である。それでもこの鳴き声だけは何となく好きだった。昔歌った童謡でこの鳴き声に鴉の愛情が詰まっていると感じた印象がそのまま残っているらしい。

もう直ぐ起床の時間だ。聊か眠気はあったものの起きてしまった方が楽だと思い上体を起こす。

それに何か音が聴きたいとも思った。何でも良かったが、先日気紛れに買った Gailey のCD を手に取る。一度流し聞きしただけでこんなものか、と思った程度の感想しか持って居ない。別に悪かった訳でもないし、嫌いだった訳でもないのだが、その時の気分なのだろう。

一番新しいというアルバムを買ってみたのだが、ジャケットには変形した白い人体が曲線のフォルムも美しく控えめに描いてあり、ベースは深い青にも見える黒だった。色の対比がとても綺麗だと義



文は始めにそんな印象を抱いたのだが、よくよく見ると少々グロテスクでもある。

パソコンを起動させ、既に取り込んである楽曲を再生する。始めは静かな調子のSEから始まり、途中からひび割れたような低音と高音が入り混じった音が押し寄せる。民族楽器と電子音を掛け合わせたような音が厚みを持って膨れ上がり唐突に終わると、次のトラックへとタイミング良く切り替わった。それは間違いなくハードな曲だろう。音も重く、テンポも速く、無数の叫び声で彩られている。ヘッドホンで聴くと右から左と抜けるように縦横無尽に駆け回る音が形を持っているかのようにリアルだった。

思考が塗り潰されていく感じがした。蜘蛛の糸のように張り巡らされた思考回路が全てこの音のかたちで装飾されていく。

義文は暫しその感覚に身を任せた。瞬きの回数が減り、呼吸さえゆっくり静かなものになる。この状態は無心と言うのかもしれないが、音に神経を支配されている、と言った方がしっくりくるかもしれない。だが悪い気はしなかった。寧ろ心地良いとすら感じた。何かに抱き込まれているような安心感があつた。強張っている様にも見える体はこの上なくリラックスした状態でもあるような気がした。

ああ、何故自分は知らなかったのだろう、そう思った。Galleeyの名前は随分前から知っていたし、楽曲も少しは知っていたのだ。だけど、Galleeyの楽曲が与えてくれる世界というものが全く見えていなかったんだと気付く。ただ集中して聴いたからといって見えるものではないだろう。恐らく、義文がそれを見るだけ、知るだけの準備を整えたからこそ分かったのではないかと思うのだ。鳥肌が立つ。ざわざわと肌が蠢く感覚があり、静電気のような細かな刺激が皮膚の内側から起き上がってくるのを感じる。薄暗い室内で己の腕に浮き出した小さな凹凸を眺めてみた。まじまじと鳥肌が立った様子等今までに無かったのかもしれない。純粋な驚きが湧き上がってくる。小さな粒が体の中に無数にある。

知らない。そう思った。確かに自分であるはずなのに見覚えが無

い。黒子の位置も昔からある痣の位置もそのままなのに全く見覚えがない腕だった。宗之の腕なのではないか。一瞬そんな馬鹿げた考えが頭を過ぎった。だが、そう分かっていてもなかなかその発想は消えてくれず、澱のように義文の奥底に沈殿していくような気がした。

そういえば何時だろう、そう思い時計を見やる。既に八時になるうとしていた。そろそろ出勤の準備をしなければいけないだろう。まだこのままの状態でいたい、そんな気持ちがないでもなかったが、思いの他体は軽やかに動き、体が覚えてしまっているらしい朝の準備を機械的に始める。

さて家を出ようか、となったところで携帯電話の着信音が鳴り響く。

「はい、長坂ですが」

電話は卵蔓庵からである。最初あの店に電話があると知った時は吃驚したもののだが、電話の無い方が確かに可笑しい。

「おはよう御座います。河上です。すみませんが、今日は急用が出来まして店の方は空けさせて頂きますのでお休みという事にさせて頂いても宜しいですか？」

電話の相手は那葵ではなかった。最も要であれば予想の範囲内ではあるのだが、先程まで彼のバンドの曲の世界にどっぷりと浸かっていたこともあり、なんだか妙な感動と驚きを感じてしまった。

「えっと、おはよう御座います。お休みというのは構いませんが

何かあったんでしょうか？」

何か悪い事でもあったのだろうかそんな考えが過ぎり、一応尋ねてみる。

『いえ、特に長坂さんが心配なさるような事は御座いませんよ。明日は通常通りお越し下さい。突然申し訳ありませんが宜しく願いますね』

丁寧な口調は慇懃過ぎるほど慇懃でまさにいつもの要と言った感じである。声からは何も察せられなかったが、明日は通常通り出勤

と言う事ならば不慮の事故だとか急病だとかそういう事ではなさそうである。分かりました、とだけ伝えて電話を切る。

さて如何しよう、そう思った。既に玄関先で靴まで履いている。行きたい場所は特になかったがこのまま当てもなく出掛けるのも良いかも知れない。そんな風に考えて玄関のドアを開けるとなんだか妙に体が軽い気になった。頭の中にあつた無意味な考えも雲散霧消していく気がする。

空は晴れのような曇りのような微妙な空模様だったが、雨は降らないだろう。少々肌寒いが快適な温度である。自然と足は駅の方に向いた。

行きたい場所を考えてみる。人が多い場所は避けたいし、かといって都心からあまり離れたくもない。手頃な公園にでも行こうか、と思いついたのは卵蔓庵の近くにある公園だった。今迄一度も足を向けた事はないものの、駅からも割りと近く、かなり広かつたはずだ。沢山の人が利用するような場所ではあるが、広い分それ程気にならないだろうと当りをつけ、いつもの電車でいつもの乗換えをし、いつもの駅で降りた。改札は反対方向となり、毎日のように利用している場所なのに少しだけ違った印象を受ける。そんな小さな事にもいちいち感心してしまう自分がとても充実しているように感じられて気分も晴れやかになってくる。

駅から少し歩くと木々が並ぶ並木道になっていた。辺りに緑の香りと若干の土の香りが混じり一層新鮮な気分には拍車を掛ける。広葉樹は既に葉を散らしているものも多くみすばらしい様相になっているのもあつたが、それも風情があると思う。綺麗に整っている必要はないのだ。

何か鮮やかな色も少し見たいと思った。この時期に旬の花というものもあるのだろうが、公園にはそれらしいものは見当たらなかった。ただ、申し訳程度に雑草に混じって咲いている青い花があり、それを近くで眺めてみることにする。恐らく似たような花は道端でも咲いているのだろうし、別段変わったところも、特に眼を惹く様な特

微もない花である。それでも注意深く眺めれば中々面白い。花卉に這った細かい筋も僅かにグラデーションになっている様子も小さいからこそ益々緻密に見え、それが単純に凄いと思った。更に見ていると何故こんな発色をするのだろうか何故こんな感触がするのだろうか些細な部分が無性に気になってきて、その疑問はその花を離れ世界、宇宙にまで拡大していく。全てが不思議に満ちている。全て分からないことだらけだ。宇宙は何もない空間から誕生したのだと、前に聞いたことがある。それを考えると益々不思議だと思う。気持ちは強くなった。

若しかしたらこの世界は幻覚なのではないか。若しかしたらこの世界は仮の理の中で作られた実験世界でしかないのではないか。本当の世界とは何も無い状態が正しいのではないか。素粒子レベルまで全てが分解できるのだと考えるとその状態が一番フラットな状態とも言えるのではないだろうか。はて、しかしそうだとすれば我々が意思と考えているものも素粒子の結合によって生まれた物質なのだろうか。ならば、これ等に一定の法則性がある事も頷ける。この解析が出来るようになれば全ての考え行動の予測も可能なのではないだろうか。

考えはどんどん飛躍し、花を見ながらにして別のものを見ている状態である。周りに人通りもあるが、自分だけ切り取られた空間にいるような錯覚さえ覚えた。だが、瞬き一つで急速に元の世界への接続を取り戻す事が出来た。そしてこの世界の様々な問題がいかに些細なものであるのかを実感し、如何でも良くなってしまう。また、早急に解決しなければいけないような問題も直ぐに解決出来てしまうのではないかと酷く前向きな気持ちも湧き上がってきた。実際には様々な柵もあり、そもも行かないのだろうか、こういう気持ちになるというのは良い傾向と言えるだろう。

しゃがみ込んでいた足を伸ばし再び歩き始める。公園に来たといつてもやはりやる事が無いのは同じである。一周してみようと思った。

だが、あつという間に一周してしまい、再び思案に暮れることになる。足を止めて近くのベンチに腰掛ける。何故か卵蔓庵しか思い浮かばなかった。勿論今日行っても閉まっているのだろう。

そこまで考えてはた、と思い至る。あの店が閉まっているところなどあつただろうか、と。要は店を空けるといつていた。つまり今日は無人と言う事である。例えば西方の屋敷に向かう時であつても店は開店中で戸締りすら碌にされていなかったのであるが、その際には義文も同行しており、正に無人となつた様子を今迄に見たことが無い。同じ様に開店中の札が掛かっているのだろう、と思つたが、要が店に居た事を考えるときちゃんと戸締りされているのではないかと思つた。だとしたらどんな様子なのか少し見てみたいと思つた。丁度あの通りには物珍しい商店も多い。こんな時にでも覗いてみるのも良いかもしれない。

立ち上がるとまっすぐに駅の向こう側へ向かった。

## 9（後書き）

少々加筆修正が加えられる可能性があります。

雨が降っている。黒いタールのような雨水が溜まっている。

ゆらゆらと揺れる水面は何か無数の生き物を内包しているようだ。きつとその生き物達はタールよりも濃厚で深い深い闇色なのだろう。

二階のアトリエからこの水溜りが目に留まり、臣広はふらふらと軒先まで出てしゃがみ込んでいる。昼の気温は雨でもそれ程下がる事はなく、別段寒くもなかった。風は殆ど吹いておらず、軒下には雨が入って来る訳でもない。だからただ無心で水溜りを眺めているのだ。

本日妙子は朝から友人と旅行に行っている。二泊三日の旅行である。

それ程遠方に行くでもないし、短い留守ではあるのだが、妙子はそれでも家を空けることを散々心配していた。何せ妙子が数日空けるような事など数年に一度なのである。余程自分が頼りなく見えるのだろうかと思うと、臣広は些か複雑な心境になったが、実際臣広の生活が妙子によって支えられている事も十分理解している。

散々旅行に行くか否かを迷っていたようだったが、だから尚更、たまには息抜きをして欲しいと思い、強く旅行に行く事を勧めたのだ。

結果的に妙子は旅行に出かけた訳であるが、それまでもまた大変だった。恐らく自分の荷造りよりも残していく臣広の為の準備の方に余程手間を掛けたのではないだろうか。

食事は勿論のこと、考えられる限りの不足の事態に備え、様々な生活用品を準備していつてくれた。出掛ける際にはまるで何かの講習会のように事細かな確認もあったほどだ。

そして、つい先程も電話があったばかりである。日に数度はきつと掛かってくるだろう。これでは旅行に行っても満喫できないのではないかと思うが、妙子曰く、電話で声を聴いて適度に確認を取れ

なければ気が気ではなく、旅行などしてられない、というのだ  
た。

ここまで言われてしまえばもう臣広は苦笑いを浮かべて頷くしか  
ない。

臣広は特に意味も無く一つ大きく息を吐いた。

体がその分軽くなつたような感覚になる。

そして、一度目を閉じゆっくり開く。視界が広くなつた気がした。  
雨の粒は小さく、遠くの方は少し白んで見える。水溜りの波紋が  
休む暇なく生まれては消え、重なっては打ち消されていく。虫にで  
もなつて横から見たら津波のように見えるんだろつか、等と考えた。  
虫の目線など考える機会は滅多にないから、想像すると少し新鮮な  
気持ちになる。

遠くを見たり、足元を見たり、毎日のように生活している場所  
あるのに改めてじっくり周囲を眺めるとなんだか知らない場所を見  
ているような、新しい発見が様々あることに気が付く。雨だから景  
色が変わって見えるというのもあるかもしれぬし、気分の問題なの  
かもしれない。

それに左目だけで見る景色は実際のそれよりも酷く狭く閉鎖的な  
のだろつか。焦点を合わせるのにも時間が掛かるし、コツを掴んで自  
然にそれが出来るようになるまでには少々時間も掛かったものであ  
る。

ただ、片目だけというのは時に便利なものでもある。目を開けた  
まま、外界の景色を眺めたまま、自己の内側へと簡単に沈んでいく  
事も出来るからだ。多分白昼夢というものに似ているのではないだ  
ろつか。深く深く潜つた場所から間接的に外を眺めているような奇  
妙な感覚だ。

その時の景色はやけに白っぽく所々反射するように光って見えた。  
とても美しく、そして真新しい紙のような鋭利さを持っていると思  
う。気付かない内に何処かを傷つけてしまいそうな、そんな危うさ  
を孕んでいる気がするのだ。



このままずっとこうしていたい、臣広はそんな風に思った。一時の感情であるのは明白だが、そう思うことによって聊か己の世界の構成をまた一つ明確にイメージできる気がした。そして、少し違った形で絵に描くのだろう。無心に筆を走らせてその世界は出来ていくのだ。頭の中のイメージを転写するのだから何も考えないに越した事はない。余計な考えは元の世界を歪ませてしまふ要素でしかない。

とり止めもなく思考を遊ばせながら、ずっと同じ景色を見ていると段々焦点がずれていき、丁度良いぬるま湯のような景色になっていく。鋭さは全て半透明の柔らかいもので被われている感じた。

そして暫く空白の時間が流れる

一瞬のようでこの時間は実際数十分続いていただろう。気付いた時には雨は既にながっていた。臣広は軒下から僅かに落ちる雫がなんだか少し寂しいと思った。空はまだすっきりしない曇り空だが、暗い色が薄まっている。きっと今日はずっとこんな空模様になるのだろう。

臣広は大きく伸びをしてずれた焦点を元の調子に合わせた。視界が一気にクリアになると、同時に酷くすっきりした気分になった。

そこにタイミングを図ったように電話が鳴る。

家の中からであるが、周りが殆ど自然で囲まれているような場所では外まで響き、気付かない方がおかしいだろう。作品に取り組んでいる時、妙子が不在の場合は大抵留守電にしてあり、出る事はないが、別に無視をしたいわけではない。

急いで家の中に戻るとリビングにある子機を取った。

「はい、嘉山ですが」

『ああ、臣広が出るなんて珍しいねえ』

電話口からは弾んだような軽やかな声が響いてきた。

「那葵が電話を掛けてくるのもめずらしいと思うが。今日はどうかしたのか？」

那葵から以前電話があったのはいつだろう、と考えてみたが、思

い当たらなかった。若しかしたら掛かってきた事など今までになかったのかもしれない。

『これから何か予定あるかい？』

「いや。私は大抵籠っているだけだからね」

『ではこつちに出てこないか？海晴と英志が近くに居るみたいだから車で迎えに行かせるよ』

海晴と英志とは要と同じバンドのメンバーである。数回面識があったが会話を交わした記憶は殆んど無い。

「私は構わないが、迷惑ではないか？」

『大丈夫だよ。車なんだし、ついでついで』

臣広は流石に気が引けたが、那葵のいつものペースである。使えるものは使ってしまうというその精神はある意味見習いたい部分だ。それに不思議と那葵の周りにいる人間は那葵に使われることを不満に感じていないようなのである。寧ろそうすることが自然だと思っている様に感じることにすらある程だ。

これを不思議にも思うが、臣広もその感覚が何となく分かってしまつし、説明しようとするとなかなか難しい。出来なくは無いのだろうが如何にも抽象的で曖昧なものとなり、本質からは大きく外れたものになる気がする。

半ば那葵に押し切られる形で電話は切れ、結局臣広は急遽出掛ける支度をする羽目になった。無意識に大きな溜息が漏れたもののこれは条件反射のようなものなのだろう。臣広のように極端に刺激の少ない日常を送る人種にとっては僅かな外出でも心が躍るものである。

迎えに来た二人は見掛けは聊か派手であるが要同様丁寧で、話し難いということもない。寧ろ要より親しみ易さがあるかもしれない。要は社交的ではあるが、なかなか心の奥底が見えないような性質だからだ。

「わざわざすみません」

「いえ、用事があつてこつちまで来ていましたし、帰り道なので気

にしないで下さい」

海晴は金髪に染めた短髪にたれ目が特徴的な青年である。笑うと笑窪が出来、少年のような印象だ。メンバー四人の中では一番小柄だが、これで激しいドラミングをする。臣広は初めてその様子を見た時普段とのギャップに驚いた程である。

もう一人の英志は無口で高身長ということもあり、聊か威圧感があるが、黒髪を軽くボブにした髪型と目元の柔和さで近寄り難いという印象は随分和らぐように思う。

英志の運転で出発した車は丁寧な運転だったが、随分早く卵蔓庵に到着した気がした。道が空いていたのもあるのだろうが、臣広の運転ではこうはいかない。実際それ程時間に差は無いのだろうが、運転中は気が張るからか無駄に長く感じるのだろう。車窓からの眺めも全く違って見え、随分新鮮なものだと密かに驚いた。

「食べるかい？さつき小枝子さんが持つて来てくれたから」

店内には誰もおらず、導かれるまま穴倉へ深く潜っていくと、那葵は突き当りの真っ赤な部屋で真っ赤な寝椅子に寝そべり、落雁を食べていた。傍らにはくびれのある優美なアンティークのカップが置かれており、紅茶のお茶請けとしては何ともちぐはぐな組み合わせとなっている。それでもこの部屋では何故かしつくりとくるような気もした。

「落雁なんて随分食べていないな」

そう言って進められるままに一つを口に運んだ。独特の食感のそれは、細やかな粒子を残して口の中を溶けていく。臣広の心の奥底に沈殿した澱をも同様に消去してくれるような気がした。

タイミング良く要が運んできたお茶で残った粒を流し込むと条件反射のように力が抜ける。湯飲みに注がれた酷薄な色の液体は日本茶であった。やはり臣広にはこの組み合わせの方が良い。

「じゃあ、俺等は世貴んところ行ってるから」

のんびりとなんの用なのだろう、などと考えながら茶を啜る臣広とは裏腹に、海晴は急ぎ茶を飲み干すとそう要に声を投げて部屋を

出て行つた。英志に至つては一口口を付けた程度である。要に掛ける声は気軽なものであつたが、軽く那葵に頭を下げた仕草は丁寧そのものだ。やはり那葵は何か一種の抗いがたい雰囲気を持つているのかも知れないと思つた。

「それで何か用があるのか？」

落雁の包みを弄びながら那葵に問う。思えばこんなに気安く声を掛けてゐるのは臣広くらいかもしれない。

「特にないよあ。まあ居たら面白いんじゃないかつて思つただけ」

無意味に紅茶を銀製のスプーンで掻き回している那葵が間延びした声で答える。視線は渦を巻くカップの中身に注がれている。臣広の位置から見ると更にその色を濃くし、赤黒く鈍重な色を帯びていたそれは深く暗示めいたものを秘めているような気がした。

「何がだ？」

この問いに那葵はただ笑つただけだつた。

その那葵らしい回答に一気に力が抜ける。無意識に大きく息を吐くと漸く落着いた心地がした。この赤い空間は何度来ても始めは馴染めないらしい。部屋に入った途端一瞬息を飲み、鼓動は幾らか早くなつてゐるはずだ。もし那葵がこれを見越して居たとすればなんという悪趣味だろう。ただ、本人は全く寛いだ様子であることは間違いない。

「なんでさあ、人間は動物とかさあ象るんだろうねえ」

臣広はいきなり何を言い出すのだらうと那葵を見やると、手に持った落雁を指先で転がしながらそれをじつと凝視している。どうやら落雁に象られた兎を見ての言葉のようだ。

「親しみがあるからではないか？子供向けのビسケットなんかでもあつたし・・・楽しんで食べてもらえるようにという意図も考えられるが」

唐突な疑問だと思つたが、思い付いた理由を真面目に答える。

「そうかもしれないけどさあ、それをばりばり食べちゃうんだよ。なんか結構残酷だなあつて思つわけ。中には人間を象つたものとか

もあるじゃない？ああいうのってさ、人肉嗜好の表れ何じゃないかとさえ思っし」

「考えすぎだろう。そんな事を考えて作っている訳ないじゃないか」「でもさあ食べちゃいたいほど可愛いとか言うじゃない？ちよつとずれるけど目に入れても痛くないとかもさ。実際考えると凄く残酷じゃない？流血ものだよ」

方眉を上げて話す仕草は那葵にしては珍しいものだった。

「確かにそうだが、そこまで考えないだろう。寧ろ考えていたらこんなに普及していないはずだぞ」

「まあ意識はしてないのだとは思っけど、根底にあるんじゃないかなあって思っんだよねえ。可愛いものとかさあ自分の好きなものとか憧れるものとかさあそういうのと同化したいつて思っのは。言われてみると多分思い当たる人も多いんじゃないかなあ」

確かに憧れの人を模倣するのはよくあることだし、気持ちは理解出来る。

「だが、飛躍し過ぎていないか？私はカニバリズムなど想像するだけで胸がむかつくぞ」

同化がイコールでカニバリズムという考えにはなかなか到達出来るものではないだろう。

「それが普通の反応さ」

「ん？それでは先程言った事と矛盾していないか？」

「してないよ。同化したいって欲求があるって事は行き過ぎれば確実にカニバリズムになる。だから嫌悪しなきゃいけないのさ。もしくは神聖視するとかその行為が非日常的なものだと認識してないければならない。でなければ人間社会は成り立たなくなってしまうだろう」

「カニバリズムという文化が極近年まであったことは理解している。その社会でもそれに意味を持たせていた事を考えればまあ納得はできるがな 結局何を言いたいんだ？」

「いや、意味などないさ。ただなんでだろうなあって思っただけ」

那葵は既にその話題には興味を失ったかのような様子で弄んでいた落雁を口の中に放った。だが、臣広は納得がいかない。よく考えてみると無意識の中に力二バリズム的な欲求が潜在的にあるのではないか　この予測を打ち消すことが出来なくなった。

「ねえ、ピアスとかあけないの？」

那葵が上体を伸ばして臣広の髪を掻き上げた。普段は中途半端に髪の手で隠れている耳が露にされる。

「あけないよ。手入れが大変そうだし、私はあまり装飾品が好きではない」

唐突な質問だとは思ったが、今に始まったことではない。それに単純な問いなら反射的に答えが出てくるくらいにはこのやり取りに慣れてしまっていた。

「似合うと思うんだけどね」

「そう？」

那葵がこんな風に言うのは珍しいと思った。自分に似合うのか否かは考えたことはなかったが、そう言われれば悪い気はしない。

「要にあけて貰えば良いよ。似合うピアスも選んでくれるよ」

「いや、見ているのは面白いけど遠慮しておくよ。それにそう言う那葵もあけていないじゃないか」

「僕は似合わないからねえ。それに要は僕にはあける気ないし、あけて欲しくもないみたい」

その回答はよく分からなかったが、少なくとも那葵に限って似合わないという理由はない気がした。いや、それ以前に那葵が他人の考えで己の行動を変えらるというのはなんとも可笑しい話ではないかと思う。

「あけたいとは思うのか？」

「いやあ、別にいい」

気だるげな返事だが、とても優しい表情をしているように見えた。光の加減なのかもしれない。ただ、この回答をそのまま信じるなら、那葵は特にピアスに対する関心がないということなのだろう。だから

らきつとどつちでも良いのだ。臣広は一人でそう納得し、先程感じた微かな違和感を忘れた。

「どうしてこの部屋を赤くしたんだ？前から気になっていたが・・・とても落ち着く色とは思えない」

臣広はふと気になったいた疑問を唐突に思い出し、口にした。特に聞いてどうなるものでもない。だから今まで何となくタイミングを逸していた。

「ここは赤でしょ。青とかも好きだけど、ここは青じゃだめなんだよね」

「なんでだ？」

青がだめ　その感覚は何となく分かる気がした。ただそのイメージがし難かっただけなのかもしれないが青では妙に白々しい気がする。それを那葵が望んでいない事が直感のようなもので理解されたのだ。

「ここは穴倉なのさ。ぬくぬくと心地良く生暖かく包んでくれる穴倉。ここで生まれていくんだ、全てが　まあそういうイメージだよね」

最後は大仰な程の仕草で小首を傾げ微笑んだ。からかわれているのだろうか、そう思ってしまうような仕草である。だが、多分本心だと臣広は思った。那葵は基本的に嘘はつかない。本心を隠したよくな、はぐらかすような発言は多くするが、それが虚言だった事は一度も無い。意図的にそうしているのかもしれないし、実際の所臣広は何か思い違いをしているのかもしれないが、それでも臣広なりに現在までの那葵との付き合いで得たパターンより那葵の感情とでも言うのだろうか、それを察する事が然程難しくはなくなっていた。

「成る程な。まあ感覚としては分かるような気がするよ。分かっても落ち着かないだろうという気持ちは変わらないがな」

「まあねえ、色相学で見たら興奮作用があるって色らしいから無理もないかもねえ」

どうやらそこまで分かっていてやっているらしい。那葵の考えを理解出来ても那葵のようにそれに適用出来るだけの能力を持つのは難しいようだった。慣れなのか、それとも元来そういった感覚が鈍いのか、臣広にはなんとも判別がつかなかったし、本人も理由などよく分からないものでもある気がした。

「そういえばさあ、最近物騒なニュース多くない？通り魔とかさあ。あれさ、何人刺されちゃったんだっけ？二十人くらい？」

「ああ、あったな。大分そのニュースも落ち着いてきたが、模倣犯なんかも出てきているみたいだしな」

那葵は世事に疎い訳ではないが、このような話題を話すことは少なかった。過去の出来事を引用する事は多いが、ごく最近の出来事である。

「みたいだよねえ。たぶんその一人だと思っただけど、この前世貴が遭遇してさあ」

「えっ、それは大丈夫だったのか？」

那葵はいつもの落ち着き払った様子でそう言ったが、勢い込んで聞き返してしまったのは仕方がないだろう。何事もないからこそかも知れぬが大事には変わりない。自分自身がここまで他人に対して反応出来る事に少々驚くと共に、その発見が聊か胸をすつきりさせてくれた。

「大丈夫って聞かれるとなあ。まあいろいろあったよ」

相変わらずマイペースな話し方である。きつと那葵には臣広の心の動きなど知る由もないだろうし、興味もないのかもしれない。いつも感じる事ではあるが、この時ばかりは二人の間にある温度差というものが臣広には不満だった。

「まさか怪我でもしたのか？大変じゃないか！いや、私が慌てても仕方がないが・・・犯人はどうなったんだ？」

落着き過ぎている程の那葵に少々焦れたのもあった。つい声を荒げてしまったが、所詮臣広には他人事でしかなく、首を突っ込める問題ではないのだろう。ただ、世責はバンド活動もしているし、謂



わば有名人でもある。その辺りの報道がなかったことから考えると余程大事だったからではないかとも勘繰ってしまう。

「怪我はしないよお。世貴が怪我なんてするわけじゃないじゃないか」  
まるで有り得ないというように笑う那藝であるが、何故そこまで言い切れるのかが分かるほど臣広は世貴との付き合いは深くない。それでもそう断言されてしまえばそうなのかと納得するしかない。

「なら良いが・・・それでは何があったんだ？」  
「世貴が気に入らなかったみたいだね、その犯人をさ。だからいろいろあった訳」

「気に入らない？」  
気に入らないとはなんだろう。若しかしたら世貴は空手の有段者か何かで撃退したというような話なのだろうか、そんな風に考えて見たがいまいちしっくり来なかった。

「ああ見えて世貴は人の痛みとか分かるし無闇に人を攻撃することもない。それに全てを理解し包み込むような包容力も持っているんだ。けどだね、駄目だったみたい、その犯人は。世貴に必要ないつて判断されたの。だから消されちゃった訳なんだな」

「ちよつと待て、消されたって　まさか勢い余って逆に殺してしまった、とか言うんじゃないだろうな・・・？流石にそれは正当防衛にしても度を越すぞ」

正当防衛で誤って殺してしまった場合、罪は軽減されるのだろうがそれでも何かしら裁きは下される。身を守る為に本来被らなくてもよかった筈の罪を被ってしまったことになり、かなり損をしているように思うし、それが身近で起こったとなるとますますやりきれないような気持ちになった。

「違うよ。消しちゃったんだってば。殺すと消すって違うよ」  
「殺すことを消すとも言っじゃないか。だが　それだと戸籍から抹消したとかそういうことなのか？」

果たしてそんな事が簡単に行えるのか否かということはさて置いて、浮かんだ可能性をあげてみる。社会的に抹殺するという事も或

いは消す、という事に該当するだろう。

「まあそれはそうだね」

「それはそうとは？」

那葵の答えが分かり易かった試しなどない気がするが、今回は更に分かり難い。人一人を消した、と言えばその方法はごく限られているだろうからだ。

何故にここまでではつきりしないのか　臣広には疑問ばかりが募る。自分に直接的には関係ないかもしれないが、身近な出来事である。ここまで話を聞いたからにははつきりさせた方が良いのではないだろうか。それはただの野次馬根性からというのではなく、証言を求められる機会もあるかもしれないという事を想定したのである。知っていたからといって言える事は限られるのではないだろうが、中途半端に事情を知っているというのは誤解を招く発言をしてしまいそうで怖い。

「そのままでよ。言葉のまま。綺麗さっぱり消しちゃったんだ。存在も記憶も」

「馬鹿を言うな催眠術でも使えるのか？」

言葉そのまま受け取れば、まるでデータを削除した時のようにその存在　姿形はまるで初めからなかったかのように消失し、記憶、または記録というものからもその存在が在ったという事実が抹消されてしまっていることになる。そんな荒唐無稽の話があるのだろうか。少なくとも臣広が理解している世界の話では有り得ないと断言して良い。

あるとしたらそれこそ見世物としてのイリュージョンと催眠術

この場合は集団催眠というやつだろうか　それくらいであった。「催眠術ねえ。或いはそう呼べるのかもしれない」

那葵はうつ伏せに体を返すと僅かに上目遣いで考え込むようにしてそう言った。

「私は催眠術を否定するつもりはない。今は医療にも採用されているそうだし、それによって治療技術がもつと進歩するなら喜ば

しいことだと思う。だがな、そんなに易々と都合よく使えるようなものだとは思わないぞ。集団催眠なんかはそれこそ一種の舞台造りから入り、半ばトランス状態にまで持つていかなければ実現できないだろう。まあその例としてはこの部屋なんかは最適かもしれないがな」

臣広は話しながらそう気付いたが、外部でこの部屋と同じような場所を作るのも大変であろうし、大人数を収容するとなればもっと困難だ。更に集団ということになれば余程綿密に計画をしなければ容易に催眠状態に持ち込めないだろう。それこそ芝居の舞台より巧妙にその世界を作り込まなければ実現することは不可能だと思う。

「舞台装置は案外簡単に作れてしまうものさ」

「じゃあ、今回も作ったと言う事なのか？」

「間違っではないだろうけど、そういうことじゃないんだ。多分ね、僕と臣広との間にはかなり大きな理解の齟齬がある。まあ大して問題ではないんだけどね、この齟齬ってやつは」

那葵の表情は相変わらず楽しそうなそれだ。からかわれている訳ではないと分かっているけど、このはっきりとしない感覚はなんとも消化不良でもやややしたものの中溜まる感じがした。

一人の人間が数十年生きてきて、関わってきた人間全てを特定するのはまず無理だろう。ごく僅かな接触でも記憶に残る場合もあるし、残っていないくても本人の知らない部分には記録されているものだったりもする。それを含めて考えれば例えばどんな方法を用いても存在の抹消は出来ないだろう。

それを前提とした上で臣広は話している訳だが、この前提からして那葵の指すそれと齟齬が生じているのではないかという可能性に思い当たって軽く身震いをした。

「じゃあはっきり説明してくれよ。那葵はいつも回りくどい事を嫌う癖に自分の言うことは全く要領を得ていないのを自覚しているか？」

「僕は思ったことを感じたまま、一番近い形で話しているんだけど

なあ。臣広だつて、自分の絵の説明なんて出来ないだろ？出来てもそれは何か違つて分かつているはずだ。それと同じだよ」

確かにその通りではある。しかし、そうだとしても今回の件はまた別のこのようにも思う。ただ起こったこと、事実を述べてくれればそれで良いのだし、例えば臣広の理解を超える催眠術の詳細な内容を語ってくれたのだとしてもとりあえずは納得がいく。

「世貴はそういうことが出来ちゃうの。僕ととてもよく似ているでしょ？」

不満げな表情を見て取ったのだろう。那葵はそんな台詞を付け加えたが、結局何も進展はしていない。那葵と世貴の類似点をここで初めて気付き、確かにと納得出来たのが収穫くらいのものだ。

だが、この発見は案外臣広に大きな啓示を与えてくれた用に思う。改めて考えると何故気付かなかったのか不思議で仕方がない程二人は似ているかもしれない。そして、何故か那葵と結びつけると、一人消すことも然程疑問にも感じられなくなってしまうのである。那葵ならなんの痕跡も残さずにそれくらい実行してしまうのではなにか 盲目的にそう思ってしまった部分が臣広の中にあつたのだ。結局何一つ進展はしていなかったが、本の数秒前まであんなに知リたかつた事が、今は知らないほうが良い、知らなくて当然なのだと思えるようになっていた。

つまり那葵とはそういう存在なのだった。

不思議なほど落ち着いた感情の変化に聊か驚き、『ナキ』という響きのせいなのかもしれない、ふとそう思った。

ちらりと那葵を見やるといつの間にか傍らにあつた分厚い本を開いている。ただ流し読みしているようにしか見えないのだが、それは見かけだけなのは既に承知している。この場合呼びかけて返事が返ってきてても、本人の意識に寄るものでは無いと思つた方が良くだろう。

真つ赤なソファに改めて体重を預けると、体がずぶずぶと沈んでいく。それは実際以上に深くそこに馴染んでしまったような、そん

な感覚を臣広に与えた。

ああ、ここは胎内なのだ　臣広はそう思った。その発見は、静かな感動を与えてくれた。じわりと広がる熱のように臣広の中を広がっていく。

背が丸まる。手足が丸まる。

気持ちの良い浮遊感と安心感がどんどん強くなっていった。

「もうすぐだよ」

頭の中でそう響いた気がした。それは那葵の声だと思ったが、若しかしたら違うのかもしれない。とても深く優しく響いた声は酷く女性的でもあった。

何が直ぐなのか全く分からなかったはずなのに、何故かその声に更なる安心感を得られた気がして、臣広の意識はぶつつりと途切れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9390m/>

---

ナキモノ

2010年10月8日11時11分発行